大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第25集

若宮八幡宮遺跡

東横前ａ、ｂ地区
宮ノ前ａ～ｄ地区

庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

２００８

大分県教育庁埋蔵文化財センター

若宮八幡宮遺跡

東横前ａ、ｂ地区

宮ノ前ａ～ｄ地区

庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

序　文

本書は、大分県文化課及び大分県教育庁埋蔵文化財センターが庄の原佐野線道路改良工事に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した若宮八幡宮遺跡東横前a、b地区、宮ノ前a～d地区の発掘調査報告書です。

庄の原佐野線は大分駅南の周辺開発と一体で建設されているものであり、上野の台地の裾を東西に貫くように路線が設定されております。そのため、大友氏関連遺跡の南端近くを横断することになり、「御蔵場」の一部などが発掘されました。今回は、やはり大友氏に係わる若宮八幡宮の南裾の調査の成果を掲載しております。

調査では、大友氏に係わる時代の遺構、遺物はほとんど確認されませんでしたが、それ以前の弥生時代を中心とした生活の痕跡や、自然流路に廃棄された木器などが発見され、大友氏以前のこの地の開発の様子がおぼろげながらわかってまいりました。

そのような成果が掲載された本書が埋蔵文化財に対する理解につながり、また学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成20年 3 月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長　　福　田　快　次

例　言

1　本書は大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受け実施した、若宮八幡宮遺跡東横前a、b地区、宮ノ前a～d地区の調査報告書である。

なお、調査時の呼称は若宮八幡宮遺跡「東横前地区」、同2次「宮ノ前地区」同2次、同3次であり、アルファベットの地区名は今回の報告書作成段階で付けたものである。

2　調査は庄の原佐野線道路改良工事に伴って、平成15年度に東横前a地区、宮ノ前a地区とb地区（以上大分県文化課実施）、同16年度に宮ノ前c地区と東横前b地区、同18年度に宮ノ前d地区（以上大分県教育庁埋蔵文化財センター実施）において実施した。

3　宮ノ前d地区の調査については、一部業務を明大工業株式会社に委託して実施した。

4　出土炭化物等の放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に依頼しておこなった。

5　本文中で表記した遺構番号は、遺物注記との整合性を保つため、現場段階のものをそのまま使用している。そのため、後に遺構ではないことが明らかになったものなどにより欠番が生じている。なお、調査段階では遺構の種別にかかわらず通し番号であるため、遺構種別ごとには通し番号とはなっていない。

6　遺構の標記は下記の通りである。

ＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）

7　出土遺物は、すべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。

8　本書の執筆は第1章から第3章を小柳和宏（埋蔵文化財センター主幹）、第4章と第7章と第10章を高橋徹（県立歴史博物館副館長）、第5章と第6章を綿貫俊一（埋蔵文化財センター副主幹）、第8章は小柳と綿貫がおこない、編集は高橋、小柳、綿貫でおこなった。

目　次

序文
例言
第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・2
第３節　調査組織の構成・・・・・・・・・・・3
第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・4
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・4
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・5
第３章　東横前ａ地区・・・・・・・・・・・・8
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・8
第２節　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・9
１）　弥生時代・・・・・・・・・・・・・9
ａ　溝と出土遺物・・・・・・・・・・9
ｂ　土坑と出土遺物・・・・・・・・・9
２）　その他の出土遺物・・・・・・・・10
第３節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・13
第４章　東横前ｂ地区　・・・・・・・・・・・14
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・14
第２節　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・15
第３節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・17
第５章　宮ノ前ａ地区・・・・・・・・・・・・18
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・18
第２節　遺構の層位・・・・・・・・・・・・・20
第３節　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・20
第４節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・21
第６章　宮ノ前ｂ地区　・・・・・・・・・・・26
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・26
第２節　土層の堆積状況・・・・・・・・・・・26
第３節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・28
第４節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・28
第７章　宮ノ前ｃ地区・・・・・・・・・・・・43
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・43
１）　経緯・・・・・・・・・・・・・・・43
２）　基本土層・・・・・・・・・・・・・43
３）　遺構他・・・・・・・・・・・・・・47
４）　出土遺物・・・・・・・・・・・・・47
第８章　宮ノ前ｄ地区　・・・・・・・・・・・76
第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・76
第２節　遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・77
第３節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・78
第９章　自然科学的調査の成果・・・・・・・・81
第１節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・81
（１）遺構の位置　・・・・・・・・・・・・81
（２）測定の意義　・・・・・・・・・・・・81
（３）測定対象試料　・・・・・・・・・・・81
（４）化学処理工程　・・・・・・・・・・・81
（５）測定方法　・・・・・・・・・・・・・81
（６）算出方法　・・・・・・・・・・・・・82
（７）測定結果　・・・・・・・・・・・・・83
第10章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・82

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・94
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　地区名及び試掘調査位置図・・・・・・1
第２図　遺跡周辺の地形・・・・・・・・・・・4
第３図　遺跡位置図及び周辺の遺跡・・・・・・6
第４図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・8
第５図　Ｓ－１・・・・・・・・・・・・・・・9
第６図　調査区西側断面図・・・・・・・・・・9
第７図　Ｓ－２・・・・・・・・・・・・・・・10
第８図　ＳＤ－１、ＳＤ－２出土遺物・・・・・11
第９図　ＳＫ－１～５実測図・・・・・・・・・12
第10図　ＳＫ－４出土遺物・・・・・・・・・・12
第11図　水田層出土遺物・・・・・・・・・・・12
第12図　その他の出土遺物・・・・・・・・・・13
第13図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・14
第14図　Ｓ－１・・・・・・・・・・・・・・・15
第15図　出土遺物（１）・・・・・・・・・・・16
第16図　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・17
第17図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・18
第18図　土層断面図・・・・・・・・・・・・・19
第19図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・22
第20図　ａ地区、Ⅱａ層、Ⅱｂ層、Ⅱcd層
　　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・20
第21図　ａ地区、Ⅱcd層、Ⅲａ層、Ⅲｂ層、
　　ＳＫ２出土遺物実測図・・・・・・・・24
第22図　ａ地区 南区第１黒土層
　　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・25
第23図　ａ地区 Ⅲａ層・Ⅲｂ層 出土木器・・・・25
第24図　ｂ地区遺構配置図　・・・・・・・・・26
第25図　ｂ地区土層断面図　・・・・・・・・・27
第26図　遺構実測図・・・・・・・・・・・・・30
第27図　第一黒土層およびその他の土層
　　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・31
第28図　第一黒土層・国土層出土遺物実測図・・・32
第29図　第一黒土層・黒土層出土遺物実測図・・・33
第30図　第一黒土層・黒土層出土遺物実測図・・・34
第31図　第一黒土層・黒土層（上段）・ＳＤ１
　　上面・黒土層（下段）出土遺物実測図・・・35
第32図　ＳＤ－１、第一黒土層出土遺物実測図・・・36
第33図　ＳＤ－１、第２黒土層出土遺物実測図・・・37
第34図　第２黒土層、流路１出土遺物実測図・・・38
第35図　流路１、流路２ 南側深掘出土遺物実測図・・・39
第36図　南側深掘・ＳＫ－２出土遺物実測図・・・40
第37図　ＳＫ２、ＳＫ４、ＳＫ５、ＳＫ６、
　　ＳＫ10、ＳＫ11出土遺物実測図　・・・・41
第38図　ＳＫ７、第一黒土層、南側排水溝、
　　表採出土遺物実測図・・・・・・・・・・42
第39図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・43
第40図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・44
第41図　土層断面図その２・・・・・・・・・・45
第42図　主要部遺物出土状態・・・・・・・・・46
第43図　ドングリピット・・・・・・・・・・・47
第44図　出土遺物（１）・・・・・・・・・・・50
第45図　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・51
第46図　出土遺物（３）・・・・・・・・・・・52
第47図　出土遺物（４）・・・・・・・・・・・53
第48図　出土遺物（５）・・・・・・・・・・・54
第49図　出土遺物（６）・・・・・・・・・・・55
第50図　出土遺物（７）・・・・・・・・・・・56
第51図　２次 ３層、４層出土遺物・・・・・・・57
第52図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・58
第53図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・59
第54図　２次水路出土遺物・・・・・・・・・・60
第55図　２次水路出土遺物・・・・・・・・・・61
第56図　２次溝上層・黒土層出土遺物　・・・・・62
第57図　溝上面黒色土 出土遺物　・・・・・・・63
第58図　２次ＳＤ－１・２・３ 出土遺物　・・・・64
第59図　２次北東壁出土遺物・・・・・・・・・65
第60図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・66
第61図　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・67
第62図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・68
第63図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・68
第64図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・69
第65図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・70
第66図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・71
第67図　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・72
第68図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・73
第69図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・74
第70図　２次出土遺物・・・・・・・・・・・・75
第71図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・77
第72図　Ｓ－１・・・・・・・・・・・・・・・78
第73図　Ｓ－２・・・・・・・・・・・・・・・78
第74図　３次 Ｓ－００１出土遺物　・・・・・・80
第75図　３次 Ｓ－００１出土遺物　・・・・・・81

第76図　３次 Ｓ－００２出土遺物 ・・・・・・81
第77図　若宮八幡宮遺跡出土土器編年図・・・・93

表目次

第１表　遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・7
第２表　結果一覧表（１）・・・・・・・・・・・85
第３表　結果一覧表（２）・・・・・・・・・・・86
第４表　結果一覧表（３）・・・・・・・・・・・87
第５表　結果一覧表（４）・・・・・・・・・・・88
第６表　参考資料：暦年較正用年代・・・・・・89
第７表　遺物観察表（１）東横前ａ区・・・・・95
第８表　遺物観察表（２）東横前ｂ区　・・・・96
第９表　遺物観察表（３）宮ノ前ａ区・・・・・97
第10表　遺物観察表（４）宮ノ前ｂ区　・・・・98
第11表　遺物観察表（５）宮ノ前ｃ区・・・・ 101
第12表　遺物観察表（６）宮ノ前ｄ区　・・・ 105

図版目次

図版１　遺跡空中写真(東から)
遺跡空中写真(西から)
図版２（東横前ａ地区）遺構検出状況(東から)
ＳＤ－１
ＳＤ－１
図版３（東横前ａ地区）ＳＤ－１　遺物出土状況
ＳＤ－２
ＳＫ－１
図版４（東横前ａ地区）ＳＫ－２
調査区西壁
調査区東壁
図版５（東横前ｂ地区）完掘状況
ドングリピット堆積状況
ドングリピット完掘状況
図版６（宮ノ前ａ地区）完掘状況
検出状況
ＳＫ－１
図版７（宮ノ前ｂ地区）完掘状況
完掘状況
南壁状況
図版８（宮ノ前ｂ地区）ＳＫ－１
ＳＫ－２
ＳＫ－３
図版９（宮ノ前ｂ地区）ＳＫ－３
ＳＫ－５
ＳＫ－４
図版10（宮ノ前ｃ地区）作業風景
中央ベルト土層
北壁土層
図版11（宮ノ前ｃ地区）ＳＤ－１(北西から)
ＳＤ－１(北から)
ＳＤ－２
図版12（宮ノ前ｃ地区）ドングリピット検出状況
遺物出土状況
遺物出土状況
図版13（宮ノ前ｄ地区）完掘状況
作業風景
Ｓ－００１
図版14（宮ノ前ｄ地区）Ｓ－００１　遺物出土状況
Ｓ－００１　完掘状況
Ｓ－００１　土層断面
図版15（東横前ａ地区）出土遺物
図版16（東横前ｂ地区）出土遺物
図版17（宮ノ前ａ地区）出土遺物
図版18（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版19（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版20（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版21（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版22（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版23（宮ノ前ｂ地区）出土遺物
図版24（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版25（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版26（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版27（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版28（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版29（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版30（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版31（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版32（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版33（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版34（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版35（宮ノ前ｃ地区）出土遺物
図版36（宮ノ前ｄ地区）出土遺物

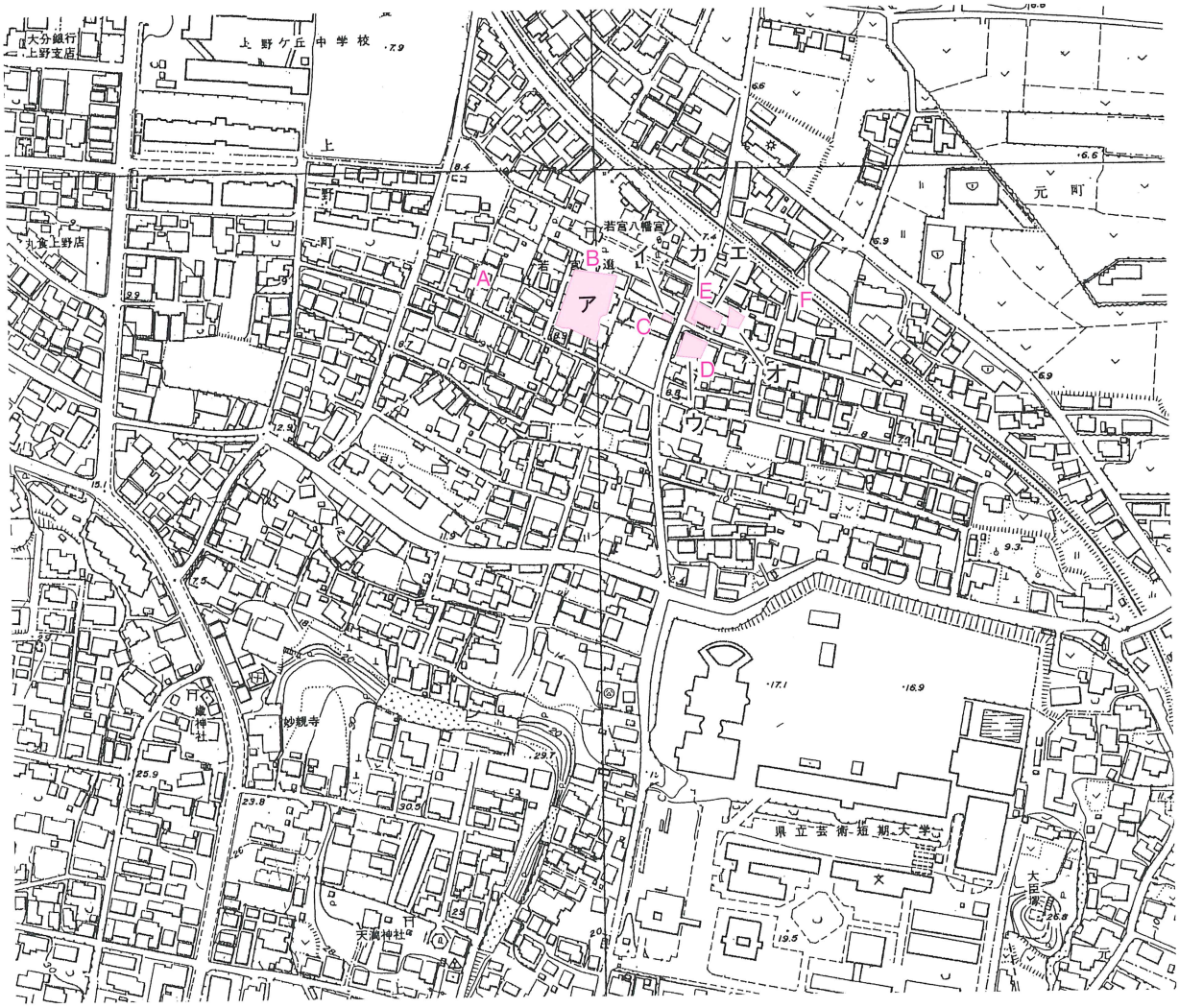
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

日豊本線によって南北に分断された大分市街地の一体化を目指した大分駅高架・駅周辺総合整備事業の一環として、平成５年に計画が発表された県道庄の原佐野線は、平成８年に都市計画が決定した。路線は大道バイパス（国道210号線）の「椎迫入口」交差点から国道10号線の「東元町」を東西に結ぶ約2.2㎞の区間で、上野丘陵の北裾をかすめながら、周知遺跡である「大道条里跡」、「東大道遺跡」、「若宮八幡宮遺跡」、「中世大友府内城下町跡」といった遺跡を通り抜けるものであった。平成９年度からは埋蔵文化財の試掘・確認調査が始まった。

確認調査の結果、東大道遺跡と若宮八幡宮遺跡、さらには中世大友府内城下町跡で遺跡が確認され、本調査に至った。この内、若宮八幡宮遺跡は、平成14年９月９日から26日にかけて、重機による確認調査が行われた。ＡからＦとした区間の内、Ｂ区とＤ区が若宮八幡宮遺跡にあたり、Ｅ区が家屋のために調査が出来ずに積み残された。その結果、Ｂ区（東横前ａ地区）とＤ区（宮ノ前ａ地区）で遺構が確認され、翌15年度に本調査を実施することになり、Ｅ区については家屋移転後に確認調査を行うことになったのである。

Ｅ区の確認調査は平成15年11月13日に行い、4地点で遺構を確認したため、一部15年度（宮ノ前ｂ地区）に調査し、残り（宮ノ前ｃ地区、ｄ地区及び東横前ｂ地区）は16年度以降に調査を行うことになったのである。



第１図　地区名及び試掘調査位置図

（ア…東横前ａ地区、イ…東横前ｂ地区
ウ…宮ノ前ａ地区、エ…宮ノ前ｂ地区
オ…宮ノ前ｃ地区、カ…宮ノ前ｄ地区）

第２節　調査の経過

各調査区の調査経過を年度別に述べる。

〈平成15年度〉

平成15年

10月１日　東横前ａ地区、重機による表土剥ぎ開始

10月７日　作業員入り、遺構検出作業開始

10月９日　掘下げ開始

10月23日　遺構検出全体写真撮影

11月13日　東横前ａ地区、図面残して調査終了

11月14日　宮ノ前ａ、ｂ地区、重機による表土剥ぎ開始

11月17日　東横前ａ地区完堀写真撮影

11月18日　宮ノ前ａ、ｂ地区遺構検出作業開始

平成16年

１月21日　宮ノ前ａ、ｂ地区調査終了

〈平成16年度〉

平成16年

６月22日　宮ノ前ｃ地区重機による表土剥ぎ、遺構検出作業

６月24日　調査区内トレンチ掘下げ

７月９日　調査区全体掘下げ

11月２日　東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区調査終了

〈平成18年度〉

平成18年

７月26日　宮ノ前ｄ地区調査開始

７月27日　掘下げ作業開始

８月11日　空中写真撮影

８月16日　調査終了

第３節　調査組織の構成

調査団の構成は次の通りである（肩書きは当時のもの）。

（平成15年度）

文化課　　課長　今永一成

主幹兼管理係長　渡邉重昭

〈資料室〉　　参事兼課長補佐　麻生祐治

発掘調査大型事業担当副主幹　小柳和宏（東横前ａ地区担当）

〃　　副主幹　綿貫俊一（宮ノ前ａ、ｂ地区担当）

〃　　嘱託　細川　愛（東横前ａ地区、宮ノ前ａ、ｂ地区担当）

（平成16年度）

埋蔵文化財センター　所長　伊藤正行

次長兼総務課長　益永孝則

調査第一課長　高橋　徹（東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区担当）

調査第一課大型事業担当副主幹　友岡信彦（東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区担当）

〃　　副主幹　綿貫俊一（東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区担当）

〃　　主査　矢部勝徳（東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区担当）

〃　　嘱託　権藤聡子（東横前ｂ地区、宮ノ前ｃ地区担当）

（平成18年度）

埋蔵文化財センター　所長　小玉学司

次長兼総務課長　岡本義博

調査第一課長　栗田勝弘

調査第一課大型事業担当副主幹　槇島隆二（宮ノ前ｄ地区担当）

なお、宮ノ前ｄ地区の調査の支援業務委託をおこなった明大工業株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師　佐藤万里江

調査助手　阿比留士郎

第２章　遺跡の立地と環境

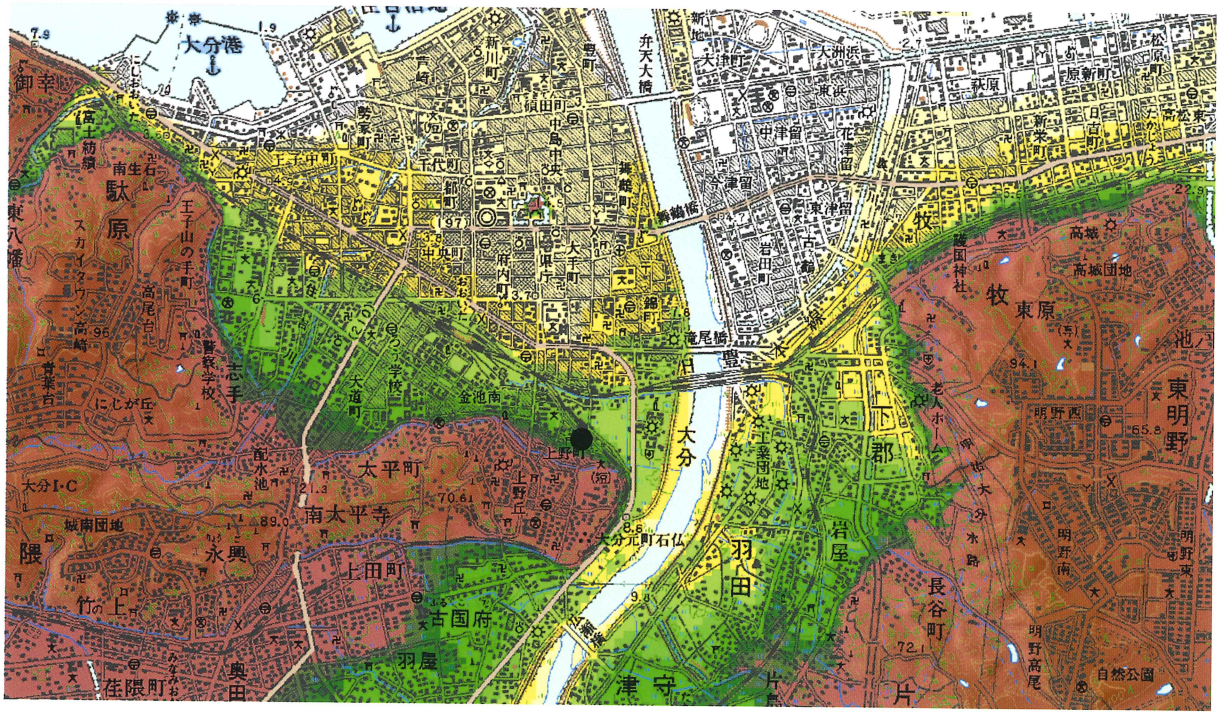
第１節　地理的環境

由布岳の東裾に源を発する大分川は、庄内・挾間の台地に深い渓谷を刻みながら西流し、大分平野に入ると明野の台地に阻まれて上野丘陵の西裾を回り込む形で北に向きを変え、一気に別府湾に注ぎ込むことになる。この変換点付近では沖積地が発達するが、近世以前では旧市街地が大部分海であったことを考えると、一気に海に放たれた大分川の流路は、徐々に沖積化を進めながらも一定せずに東西に振れていたことが想定される。

この埋没流路の内、最も最後まで埋まりきっていなかったのが、上野丘陵の北裾に回り込む形で残されていた流路である。この流路跡（旧河道）は1950年代まで蓮根畑であったと言われており、現在でも「白蓮池」と呼ばれる池がその名残を留めている。この旧河道部分は、庄の原佐野線とＪＲ久大線の高架工事に伴って試掘・本調査されており、実際に深い落ち込みがＪＲ久大線のカーブに沿って続いていた。

一方、若宮八幡宮遺跡の南側にも旧河道が存在していた。つまり、南北の旧河道に挾まれた部分に、今回調査された若宮八幡宮遺跡は乗ることになる。今調査で確認されたように、調査区の多くは地山層（基盤層）は砂層であり、旧河道が機能していた時期には氾濫源や自然堤防などで砂の堆積が進むような場所であった。実際、今回の調査では小さな旧河道が幾筋も確認されており、大きな旧河道の形成と同時か、あるいは先行して形成されたものと考えられる。今回の調査によると、弥生時代～中世前半段階では遺跡の立地する地点は、地形の形成途上にある不安定な場所であったと考えられる。

近世以降は、さらに城下町の築造に伴って海面の埋め立てと河道安定が進み、この若宮八幡宮遺跡の場所も安定した段丘になったものと考えられる。



第２図　遺跡周辺の地形（５万分の１）

※カツミール３Ｄ使用
黒丸が調査箇所

黄色は標高４ｍ～６ｍ
薄い緑色は標高６ｍ～８ｍ
濃い緑色は標高８ｍ～10ｍ
茶色は標高10ｍ以上

第２節　歴史的環境

大分川の下流域は、古代の豊後国国府が置かれた国の中核を形成する地帯であった。国衙そのものは確認されていないけれど、それに付属する施設と考えられる遺跡が点在している。では、この一帯が豊後国の中枢に位置づけられるようになる歴史的過程はどのようなものであろうか。

旧石器時代から縄文時代にかけては、下流域では遺跡がほとんど確認されていない。わずかに縄文時代後期末から晩期になって若宮八幡宮遺跡のすぐ北側の中世大友城下町跡で遺構（土坑）が検出され、さらに海に近い部分では厚い砂層の下部から土器が出土している。このことは、大分川の沖積化の進展に伴って、より海に近い場所へ生活の範囲を拡大していったことを示していよう。

弥生時代になると、刻目突帯文土器が指標になる早期の遺物が出土しているものの、多くは中期以降の遺構・遺物が占める。このことは、早期に一旦水田耕作へ踏み出したものの、沖積化の進展等により撤退を余儀なくされ、中期になってこの地に再進出を果たしたことを示していると考えられる。若宮八幡宮遺跡の上野ヶ丘中学校部分（小字「東横前」の内で、大分市教委の第１次調査地区。以下「中学校部分」とする。）では、時期は不明であるが円形住居跡が１棟確認されている。

この弥生時代には、後期になって豊後一帯に広く分布する「安国寺式土器」の形式を生み出し、型式変化を主導したのが大分平野である可能性が高く、早くも東九州の拠点としての位置を占めていた。

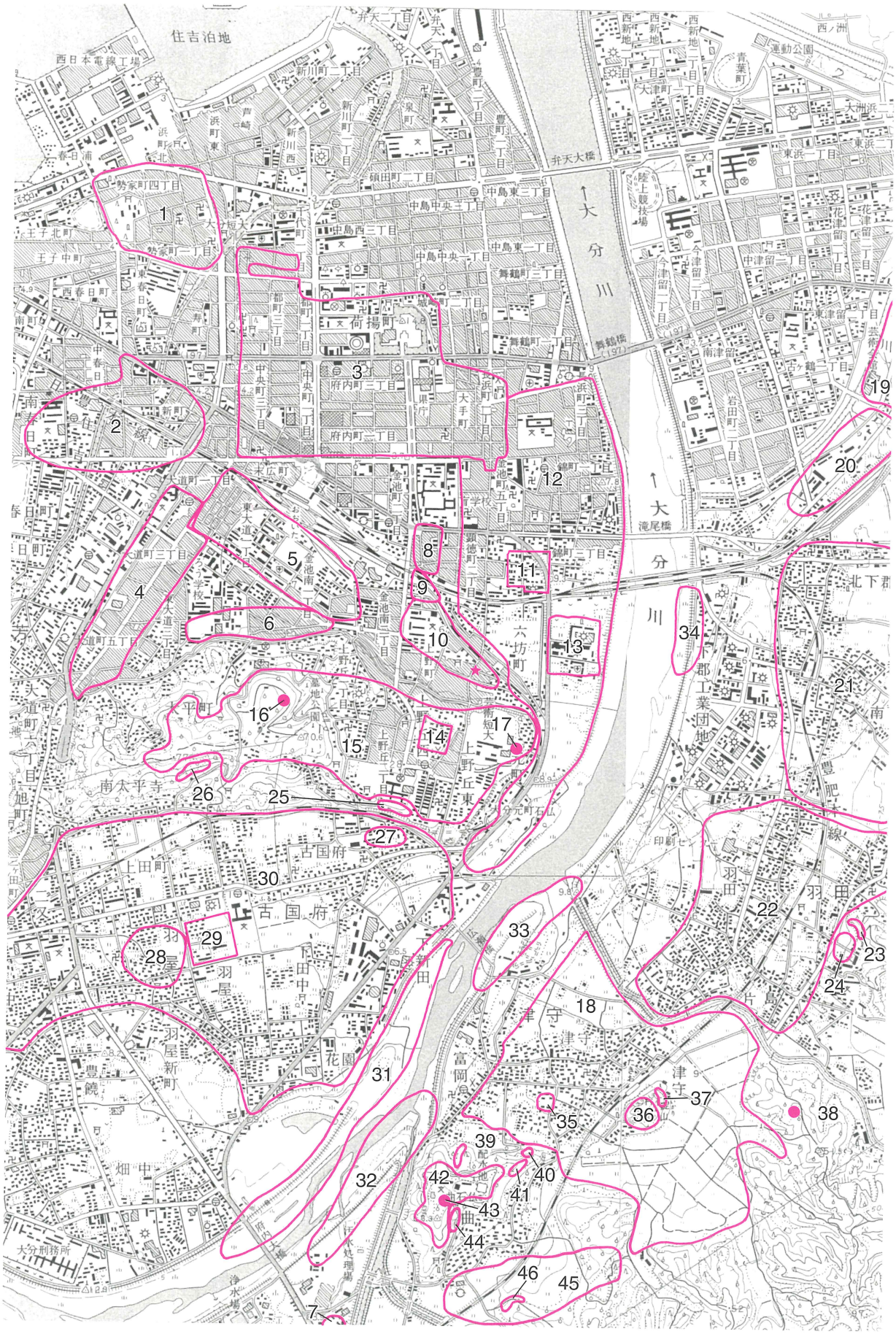
古墳時代になると、中学校部分で多くの溝とともに初頭～前期の竪穴住居跡が３基、後期の竪穴住居跡が11基確認されるなど、断続的ではあるものの居住域としてこの地が利用されたことを示している。特に、古墳時代後期の竪穴住居跡の内２基が玉造り工房であったことがわかり、大分川下流域での優位性を示すものとして注目される。この中学校部分は標高6.5ｍあり、今回の調査区の5.5～6.0ｍに比べ0.5～1.0ｍほど高く、自然堤防上に立地していた。すなわち今回報告の地区の多くが旧河道部分にあたっていたのに対し、中学校部分は一段高かったのである。その地点が居住区として利用されたのは当然と言えば当然のことであった。

古墳時代は、大分川下流域が豊後国の中枢としての位置を固める時期であった。弥生時代を主導した勢力がそのまま力を保持したのかどうかは不明（おそらく後退した）であるが、古墳時代後期になると大分平野に横穴式石室墳が出現し、石棺式石室を持つ古宮古墳に繋がっていく。672年の「壬申の乱」で活躍した大分君恵尺または稚臣の墳墓とされる古宮古墳は、大分川下流ではなく上野丘陵を挟んでその北側にある小さな毘沙門川流域を見下ろす丘陵に築かれているが、このことはなお大分川下流域の沖積化が進行中で、安定的に利用できていなかったことを示していると考えられる。

この不安定さを解消したのが、上野丘陵の南側、現在の古国府から荏隈に至る大分川左岸一帯の条里水田であっただろう。「古国府」という地名から見てもこの一帯のどこかに国衙が存在したのは間違いない。このように奈良時代では大分川下流域、その中でも特に上野丘陵の南側、すなわち今回の調査区とは上野丘陵を挟んで反対側の優位性が明確になっていったのである。また、一方上野の丘陵にも奈良時代の官衙的な遺跡が立地するなど、不安定な沖積地と伴に安定した丘陵上にも拠点を設けていたことが確認できる。

中世になると、上野丘陵の東側を流れ出た大分川の左岸には安定的な自然堤防が形作られるようになってきた。古代にも一部利用されていた微高地上では、中世中頃から万寿寺を中心として「町」が形成されるようになり、戦国期には守護大友氏の「館」を中心とした「都市」へと発展していった。この段階では、上野丘陵の北側は、豊後国はもとより九州随一の都市として活況を呈していた。

遺跡のある若宮八幡宮は、社記によれば建久7年大友能直の代に鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を勧請したものという。度々社地が移動しており、最終的に今の地に遷ったのが大正10年である。ただし、「宮ノ前」の地名でわかるように、元々の故知に還ったのであった。今調査でも中世の遺物が出土しているが、直接神社との関係を示すものかどうかは不明であった。しかし、中世以後この地が府内の町の南端という立地の中で、いわゆる「府内古図」にも描かれる重要な施設であったのは間違いない。



第３図　遺跡位置図及び周辺の遺跡（２万５千分の１）

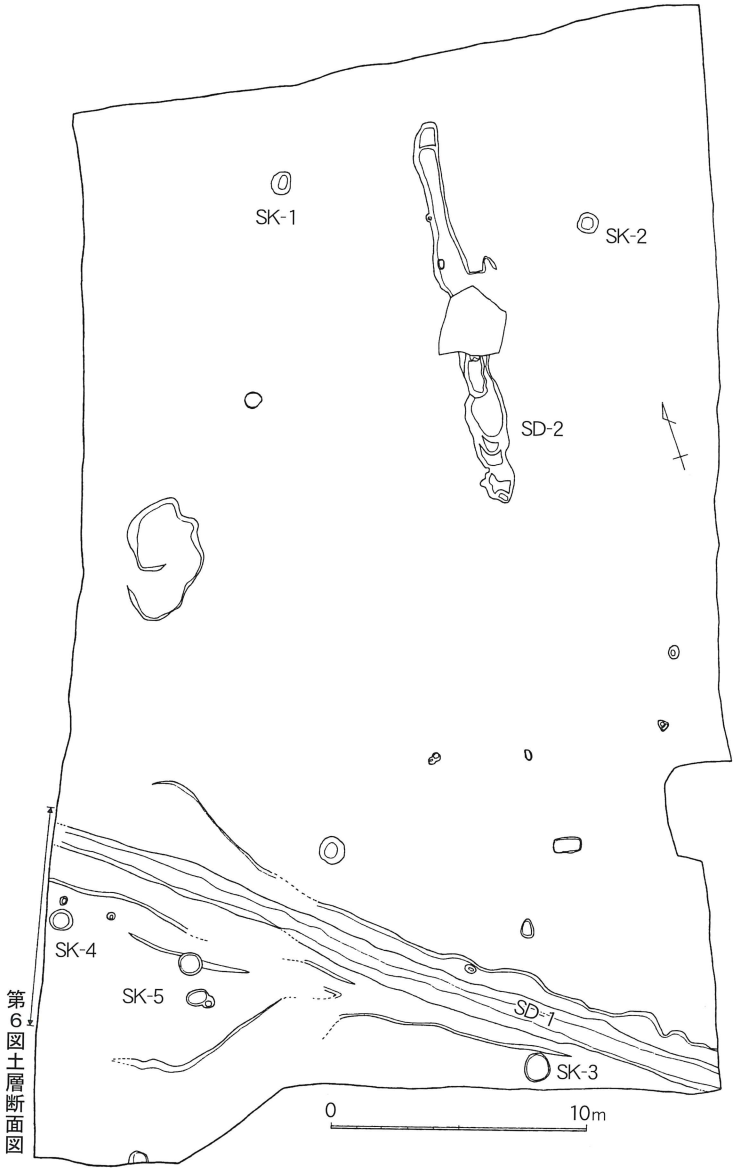
第１表　遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	内容
1	沖浜遺跡	大分市勢家町	中世	集落
2	東田室遺跡	大分市東田室	弥生・江戸	包蔵地
3	府内城・城下町	大分市荷揚町他	江戸	城跡・城下町
4	大道条里跡	大分市大道	古代・中世	条里
5	大道遺跡群	大分市東大道	弥生・古墳・中世	包蔵地・集落
6	東大道遺跡	大分市東大道	縄文・弥生・古墳・中世	包蔵地・集落
7	宮崎遺跡	大分市宮崎	近世	包蔵地
8	南金池遺跡	大分市顕徳町	古墳・古代・中世・近世	集落
9	上野町遺跡	大分市上野町	奈良・平安	包蔵地
10	**若宮八幡宮遺跡**	大分市上野	弥生・古代・中世	包蔵地・集落
11	大友館跡	大分市顕徳町	中世	城館
12	中世大友城下町跡	大分市顕徳町他	中世	包蔵地・城下町
13	万寿寺跡	大分市元町	中世	寺院跡
14	大友上原館跡	大分市上野ヶ丘	中世	館跡
15	上野遺跡群	大分市上野ヶ丘他	弥生～中世	包蔵地・寺院跡・城跡他
16	飯盛塚古墳	大分市上野ヶ丘	古墳	墳墓
17	大臣塚古墳	大分市上野	古墳	墳墓
18	津守遺跡	大分市津守	弥生	包蔵地
19	牧遺跡	大分市牧	弥生	集落
20	牧六分遺跡	大分市牧	縄文	包蔵地
21	下郡遺跡群	大分市下郡	弥生	集落
22	羽田遺跡	大分市羽田	弥生	集落
23	滝尾百穴横穴古墳群	大分市羽田	古墳	墳墓
24	岩屋遺跡	大分市滝尾	弥生	祭祀
25	米竹遺跡	大分市小池原	弥生	集落
26	高城観音院備蓄銭出土地	大分市高城	中世	埋納
27	岩屋寺遺跡	大分市古国府	中世	寺院跡
28	羽屋園遺跡	大分市羽田	古代	集落
29	金剛宝戒寺跡	大分市羽屋	古代	寺院跡
30	古国府遺跡群	大分市南大分	弥生・古墳・中世	包蔵地
31	大分川河川敷１遺跡	大分市古国府	縄文・弥生	包蔵地
32	大分川河川敷２遺跡	大分市曲	縄文・弥生	包蔵地
33	大分川河川敷３遺跡	大分市津守	縄文・弥生	包蔵地
34	大分川河川敷４遺跡	大分市下郡	縄文	包蔵地
35	松平忠直津守館跡	大分市津守	江戸	館跡
36	碇山山頂遺跡	大分市津守	弥生	包蔵地
37	碇山横穴墓群	大分市津守	古墳	墳墓
38	津守古墳	大分市津守	古墳	墳墓
39	滝尾守岡横穴墓群	大分市曲	古墳	墳墓
40	鳥越伽藍石仏	大分市津守	中世	磨崖仏
41	曲迫横穴墓群	大分市曲	古墳	貝塚
42	守岡遺跡	大分市曲	弥生・中世	集落・城跡
43	守岡古墳	大分市曲	古墳	墳墓
44	曲平横穴墓群	大分市曲	古墳	墳墓
45	曲遺跡	大分市曲	弥生・中世・近世	集落・包蔵地
46	一の迫横穴墓群	大分市曲	古墳	墳墓

第３章　東横前ａ地区

第１節　遺跡の概要

東横前ａ地区は若宮八幡宮社殿のすぐ南側の部分で、溝が２条、土坑が５基確認された。調査区は同一レベル（標高5.9ｍ前後）まで掘り下げると、北側３分の１には暗褐色土が、中央付近3分の1には明灰褐色粘質土が、南側3分の1には砂層が広がっていた。さらに断面観察では、北側の暗褐色土は南に行くほど薄くなり、南側３分の1にはほとんど被っていない。調査区の土層を見ると、Ⅰ層はコンクリートブロックが混ざる最近の埋土、Ⅱ層は灰茶褐色を呈する最近まで使われた水田層、Ⅲ層は北側３分の１に広がる暗褐色土、Ⅳ層は調査区中央付近に広がる明灰褐色粘質土、Ⅴ層は灰色を呈する砂層である。溝は水田層と思われる明灰褐色粘質土の下で検出される。この内、第Ⅲ層の起因については不明と言わざるを得ない。弥生土器片が混入しており、あるいは神社地造成に伴って埋められたものとも考えられるが、確証は得られなかった。



16

第４図　遺構配置図（300分の1）

第２節　遺構と遺物

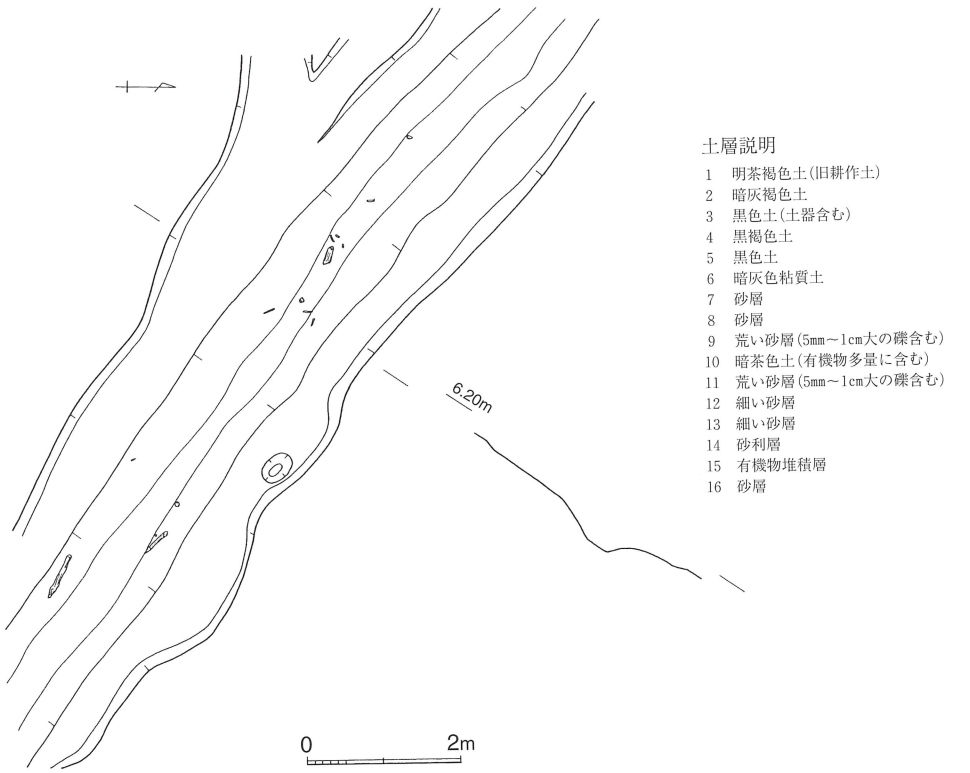
１）弥生時代

ａ　溝と出土遺物

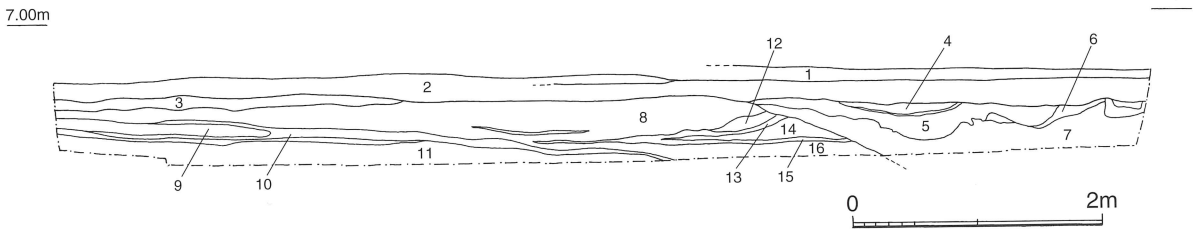
ＳＤ－１（第５図）

調査区の南東角部から西北西に向けて伸びる溝で、幅２～３ｍ、深さ0.3～0.4ｍ、延長28ｍ分を確認している。西側では、枝分かれしており、掘り込みも不明瞭になる。埋土は砂が主体で、流水があったことがわかる。おそらく水路として機能していたと思われる。

遺物は、土器破片が多く出土したが、図示できたものは第８図１から４と６から11である。１は縄文土器で２から４が弥生土器である。２や４からみて、弥生時代中期前半代のものと考えてよかろう。



第５図　Ｓ－１（部分：100分の１）



第６図　調査区西側断面図（60分の１）

ＳＤ－２（第７図）

調査区の北側で南北方向に伸びている溝で、調査区内で南北端が確認されている。幅1.4ｍ、深さ５～10ｍ、総延長15ｍである。遺物は少なく、唯一図示出来たのが第８図５である。５は弥生時代後期の甕と思われる。

ｂ　土坑と出土遺物

調査区内で５基の土坑を検出した（第９図）。

ＳＫ－１

直径0.7ｍ、深さ0.12ｍの円形の土坑である。底面から長さ30㎝程の棒状の木製品が出土した。

ＳＫ－２

長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍ、深さ0.14ｍの土坑である。内部から被熱した礫が出土しているが、土器の出土はなかった。

ＳＫ－３

直径1.0ｍ、深さ0.12ｍの円形の土坑である。出土遺物はなかった。

ＳＫ－４

直径0.9ｍ、深さ0.17ｍの円形の土坑である。出土遺物は弥生土器座部（第10図12）が出土している。

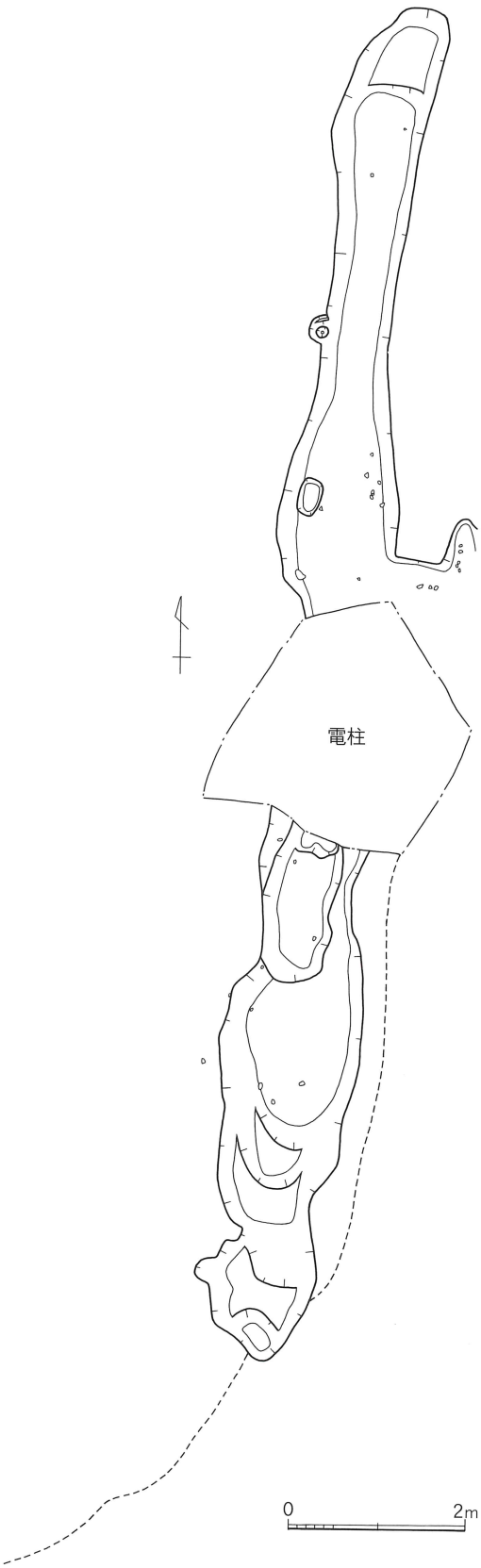
ＳＫ－５

２基の土坑が切り合うが、先後関係は不明である。大きな方の土坑は、長軸0.9ｍ、短軸0.65ｍ、深さは0.2ｍで、遺物の出土はない。

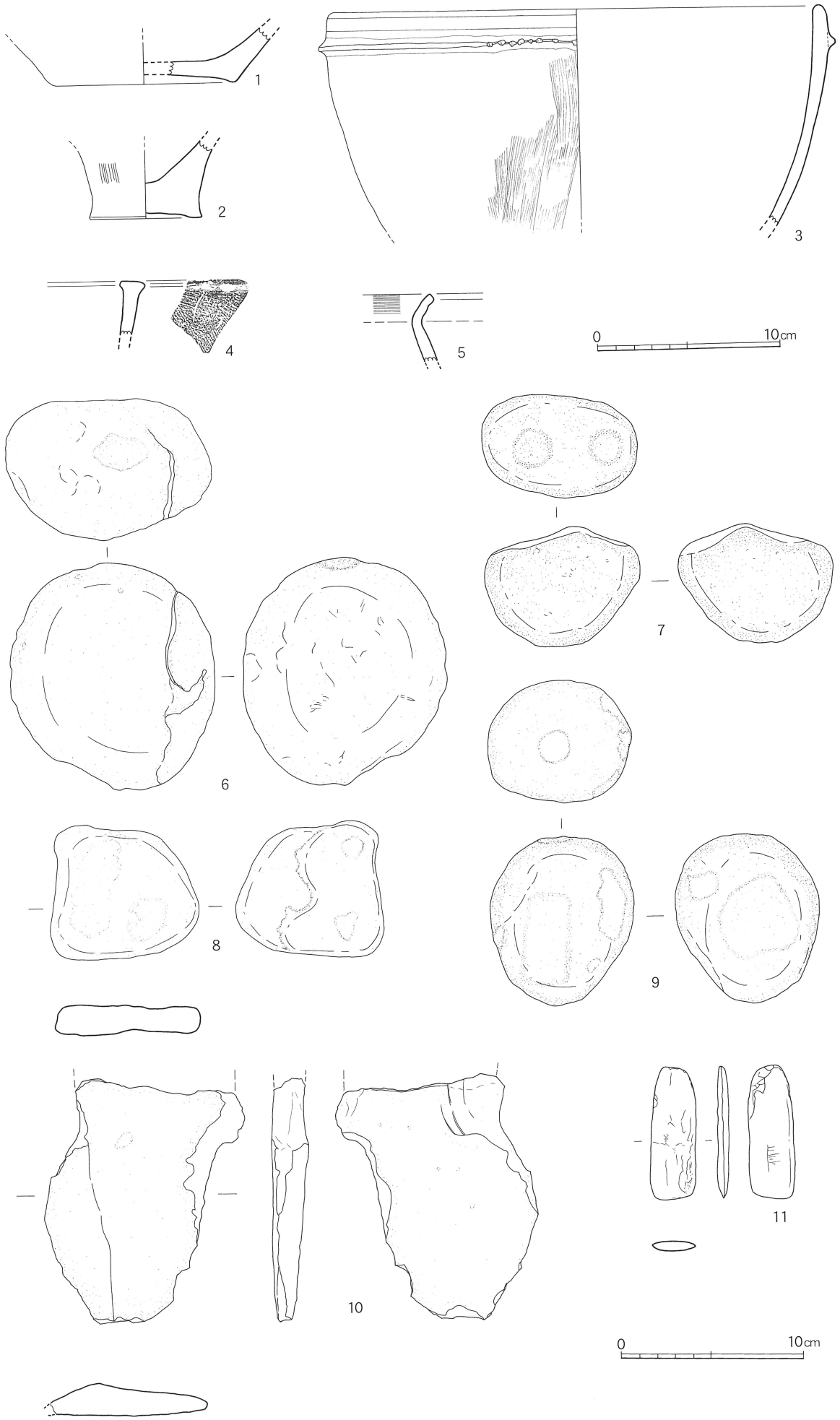
２）その他の出土遺物

調査区中央部に広がる灰褐色粘質土や北側に広がる暗褐色土から土器が出土している。第11図13から15は灰褐色粘質土、第12図16から28は暗褐色土から出土したものである。

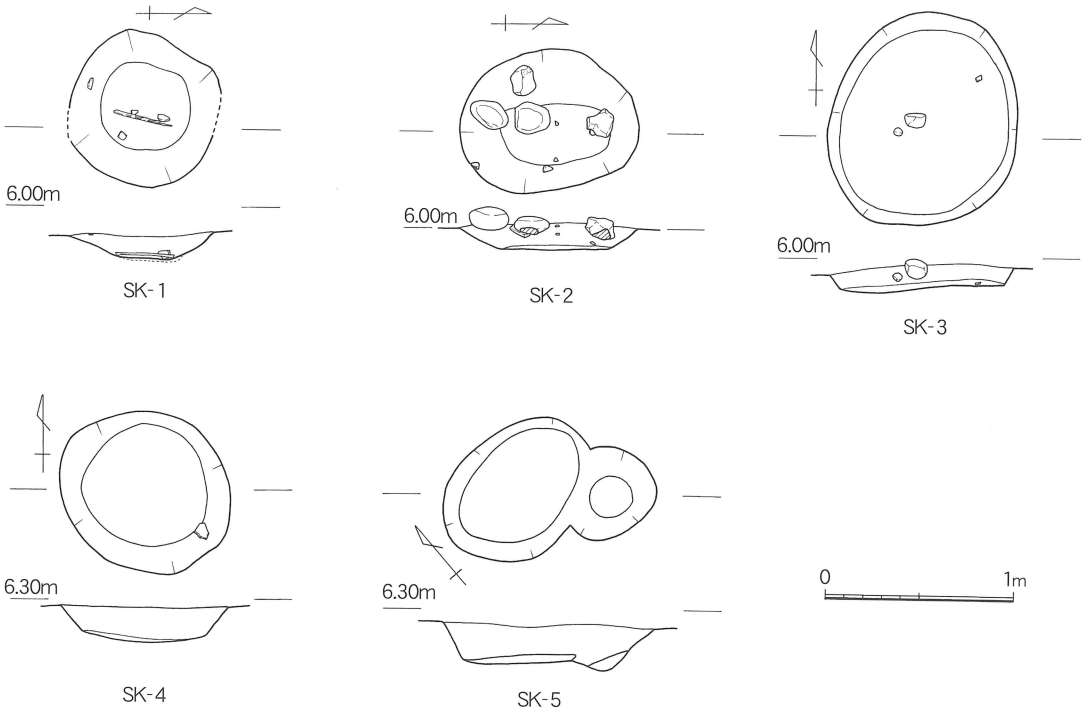
この内15は土師器碗、26と27は須恵器甕、28が備前焼の擂鉢である。他は弥生土器で、後期の前半代のものである。



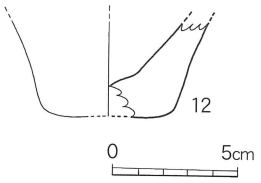
第７図　Ｓ－２（80分の１）



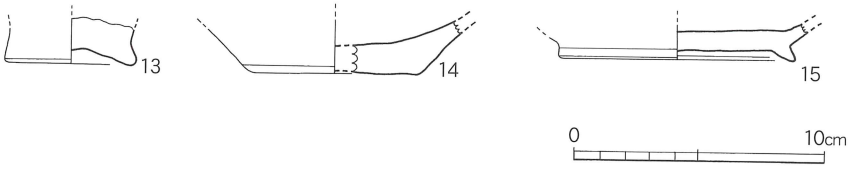
第８図　ＳＤ－１、ＳＤ－２出土遺物（３分の１）



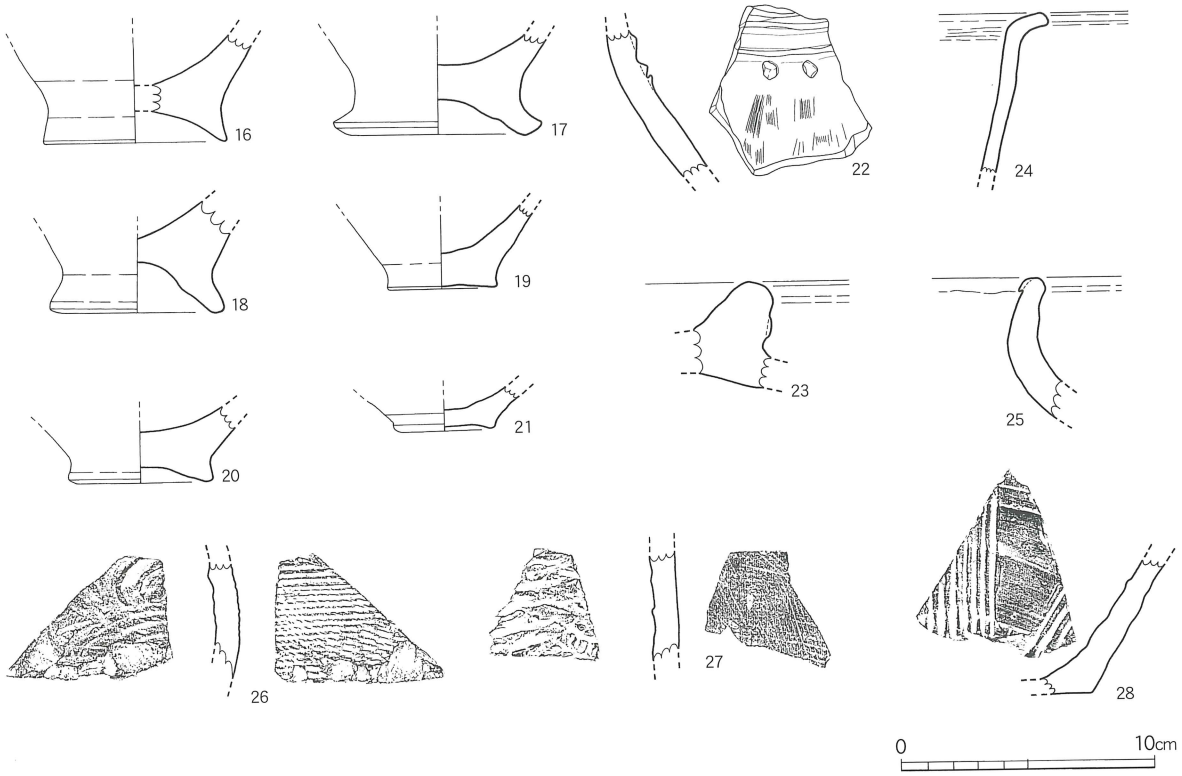
第９図　ＳＫ－１～５実測図（40分の１）



第10図　ＳＫ－４出土遺物（３分の１）



第11図　水田層出土遺物（３分の１）



第12図　その他の出土遺物（３分の１）

第３節　小結

現在の若宮八幡宮社殿の南側に位置する東横前ａ地区は、神社の起源などに迫る成果は無かった。また、「東横前」の地名は、この遺跡の南側の台地上に立地する大友氏の「上野原館」に起源するとも言われており、さらに西にある「西横前」と対照的な地名である。仮に大友氏に係わるとすれば、何らかの施設があったのか、あるいは特別な「場」として認識されていないとこのような地名は生まれてこなかったであろう。

しかし、今調査の結果からはそれを確認することはできなかった。「東横前」という地名自体、広域に渡ることから調査区外での展開も考えられる。調査区の北側の現若宮八幡宮が所在する地点から西側にかけては自然堤防の微高地にあたり、上野丘中学校で確認されたように、弥生時代以降断続的に居住区として利用されていたことを考えれば、仮に何らかの施設があったとすれば、調査区の北西に広がる部分であろうと考えられる。

中世以前の状況としては、弥生時代中期の水路と考えられる溝（SD-1）があり、後期の遺物が検出されている事を考えると、少なくとも中期には水田耕作が行われていたことを想定させるが、水田は確認できなかった。

その後、古代、中世と遺物の出土を見るものの遺構は無く、調査区内において施設等があったという痕跡は無かった。おそらく、水田あるいは沖積化による不安定さから耕地が作れなかったものであろう。

第４章　東横前ｂ地区

第１節　遺跡の概要

本調査区は市道をはさんで、宮ノ前ａ、ｂ、ｄ調査区の対面に位置する。周辺の試掘の結果当該地区のみに遺構と少量の遺物を検出したため、4.5ｍ×９ｍの区画を本調査した。

遺跡の内容は、自然流路および、その縁辺に設けられたドングリピット２基である。本地区の基本土層は以下のとおりである。

基本土層

１層　表土。現代の整地客土。厚さ70㎝。

２層　青灰褐色土：砂質混じりの土層で、弥生中期の土器を含む。厚さ25㎝。

３層　青灰褐色土：２層と同じだが砂を含まず、粘質。厚さ15㎝。

４層　２層と同じだが砂質。中期の下城式土器を含む。厚さ10㎝。

５層　緑灰色砂層：厚さ10㎝。

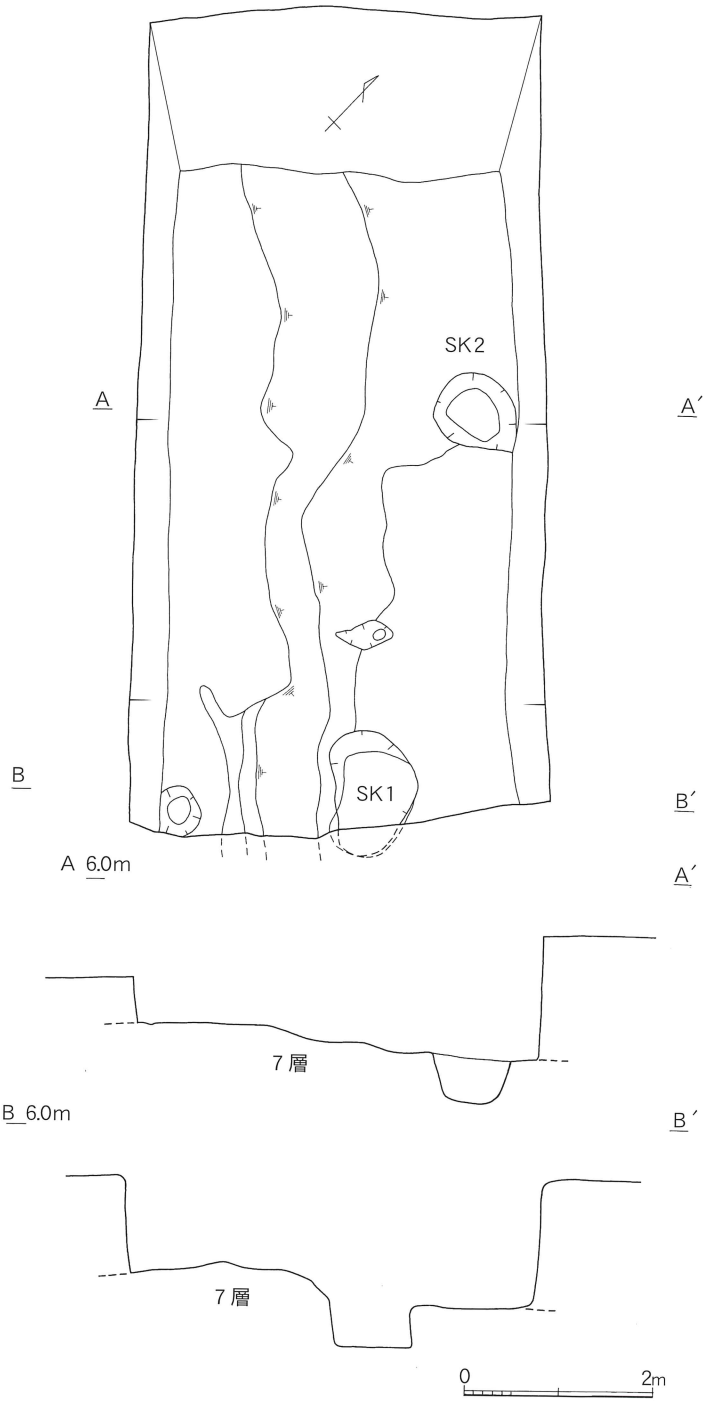
６層　黒褐色土：粘質土で土器片や多量の木片を含む。厚さ20㎝。

７層　地山　：黄褐色の地山で無遺物層。

２層から４層にかけて、弥生時代中期の土器が出土する。

７層の地山は南西から北東方向に向かって緩やかに低くなる。

これは北西から東南方向に流れる自然流路の縁辺部と思われる。

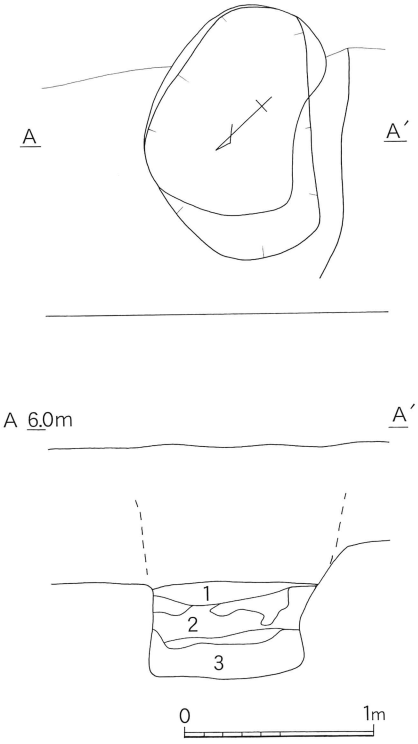


第13図　遺構配置図（80分の１）

第２節　遺構と遺物

○ドングリピット（第13図、14図）

自然流路と考えられる地山の落ち際に設けられた不整楕円形のドングリピット２基を検出した。相互に４ｍほど離れた位置にある。両者ともその底面は地山に掘り込まれており、その底面標高は4.65ｍおよび4.7ｍを測る。水位は高く、両ピットとも内部は湧水で満たされていた。



第14図　Ｓ－１（60分の１）

ＳＫ－１

調査区南東壁際で検出されたもので、平面形は不整の楕円形で、長軸130㎝、短軸80㎝を測る。底面は平坦で、断面箱形を呈する。深さ40㎝ほどが残存。底面は標高4.7ｍで、ピット内は湧水で水浸しの状態であった。本ピットは、３層を切っており、その上面は２層に覆われる。したがって,土層の所見によれば少なくとも弥中期以前(中期も含む)に設けられたものであるとみなされる。

ピットの内部を充填する埋土は、上から順に、１層（灰白色土：きめの細かい砂質）、２層（暗茶褐色土：砂混じりの粘質土）、３層（茶褐色土：きめの細かい砂が混じる）の土層に分別され、最下層の３層には大量のドングリ（櫟の堅果）が含まれている。

ＳＫ－２

１号ピットの４ｍほど北西に設けられたもので、平面形は不整円形で、上面の直径80～90㎝を測る。底面は皿状になっており、深さ50㎝ほど残存。埋土には若干のドングリ（橡の堅果）が含まれていた。

○出土遺物（第15、16図）

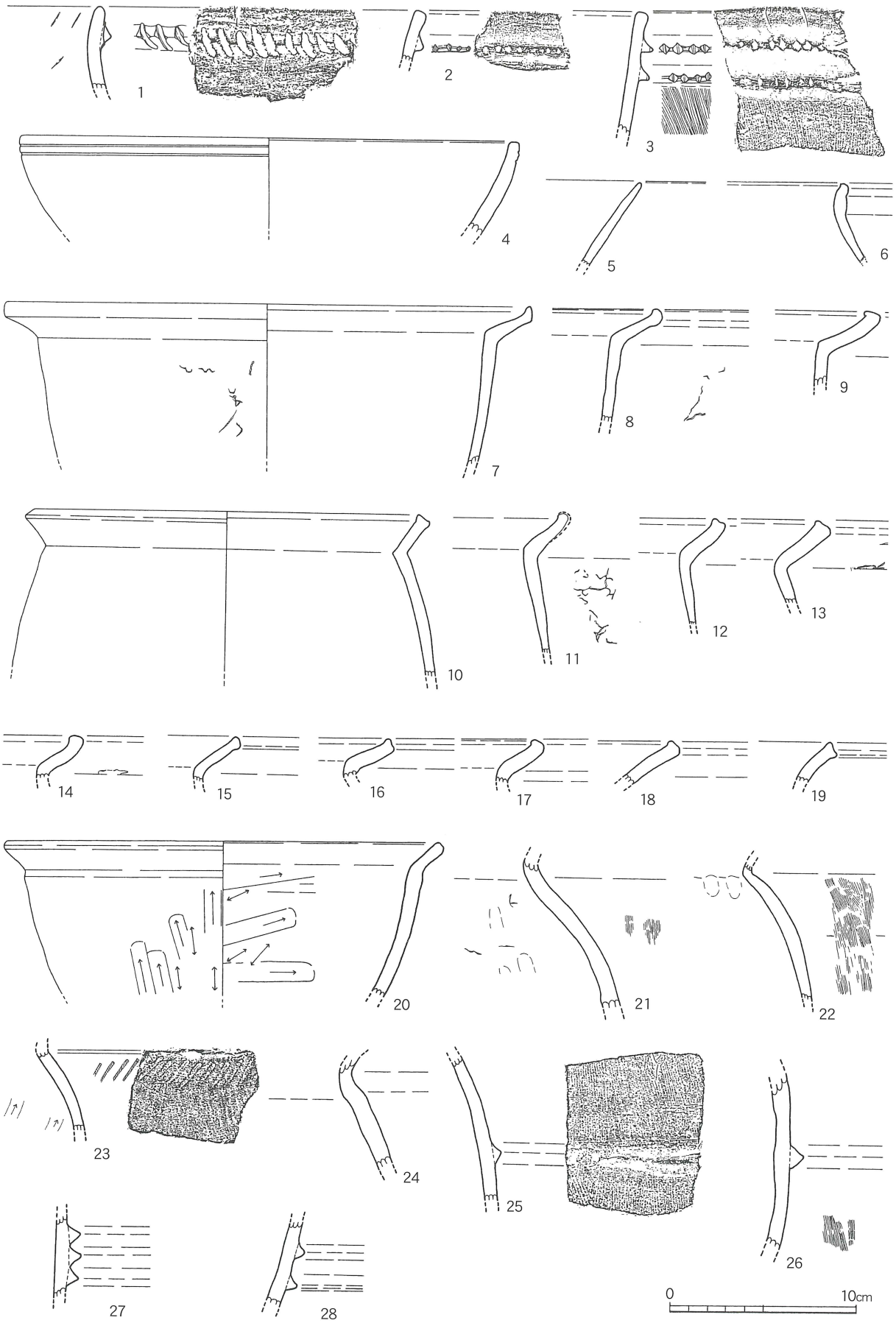
基本土層２～６層の各層から土器片や石器が出土している。土器は30点以上あるが、全て破片である。

土器

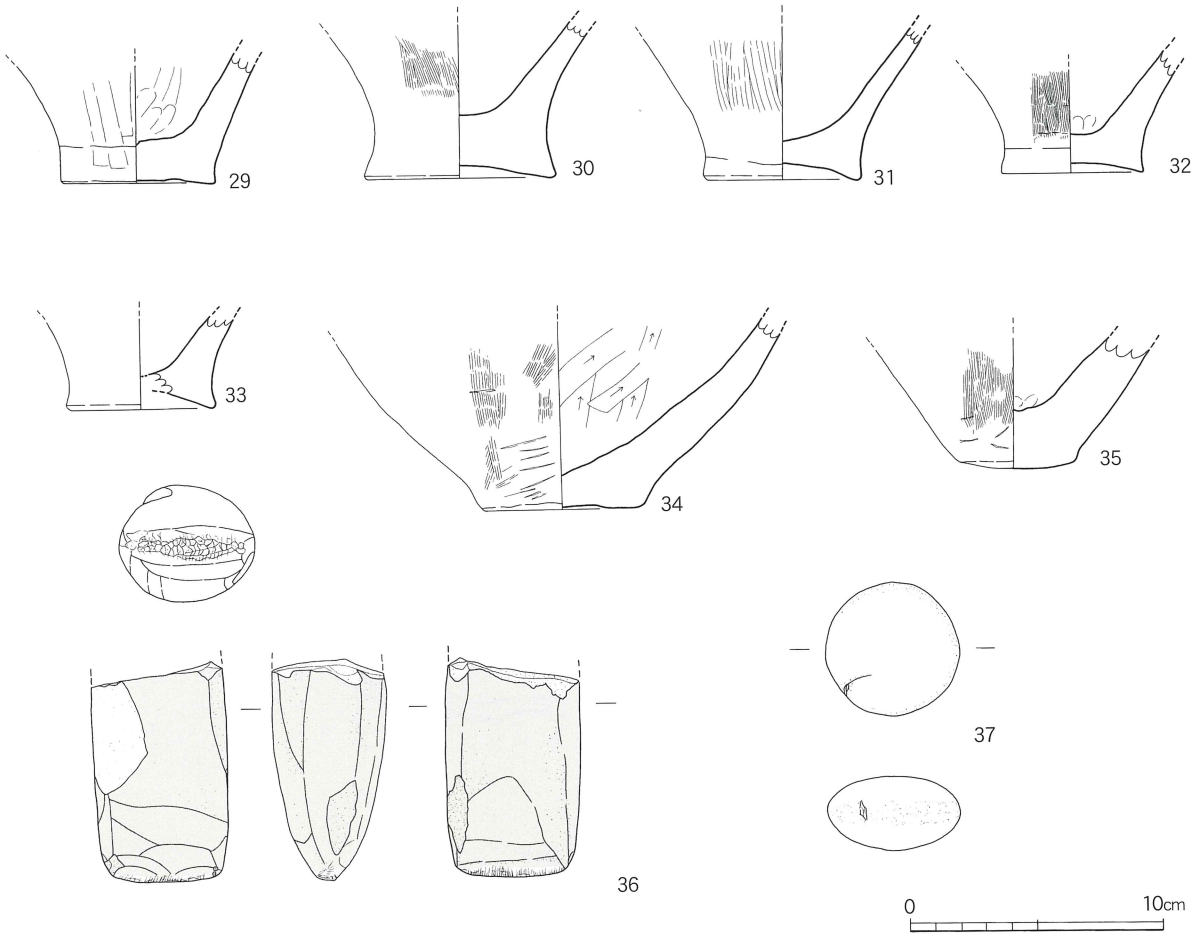
１は１条刻目突帯文土器の口縁部で弥生早期（弥生１期）に比定される（註１）。２，３は下城式土器の甕口縁部で、直線的に外傾する口縁部や口縁端部から下がった位置にある突帯の特徴から弥生時代中期前半に位置づけられる。４，５は精製の鉢で、弥生１期。６は無文の磨研小壺で、弥生１期か。７～19は摘み上げ口縁部を持つ甕形土器で、最大径が口縁部にあるもの（７～４）と、頸部がいったんくびれ、最大径が胴部上半もしくは中央にあるもの（10～13）に大別される。前者は中期前半、後者は中期中葉～後半か。20は胴部内外面に軽い磨きが残る、前期末～中期初頭の甕。21～24は弥生後期の甕形土器頸部付近の破片。25～28は壺形土器胴部片で、１～３条の突帯が巡るもの。後期前半～中頃に比定する。29～35は底部片で、30～33は中期前半に、29、34、35は後期前半～中頃のもの。

石器

36は硬質砂岩製の磨製石斧で、のみに転用している。37は直径5㎝の敲石。硬質砂岩製。



第15図　出土遺物（１）（３分の１）



第16図　出土遺物（２）（３分の１）

第３節　小結

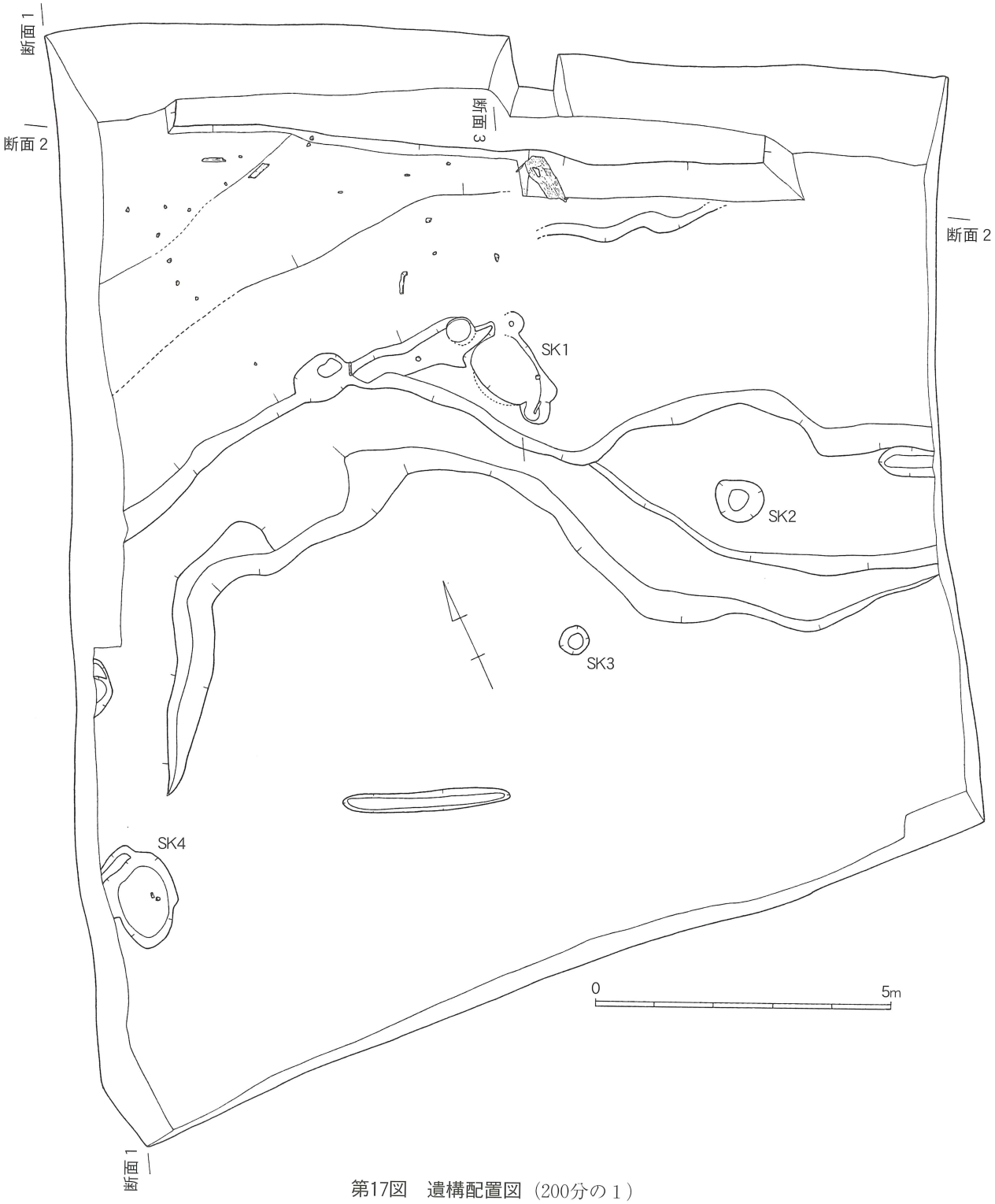
自然流路の縁部に４ｍの間隔で設けられたドングリピット２基（ＳＫ１、ＳＫ２）を検出した。青灰褐色の第３土層上面を穿って掘りこまれたもので、ピット内面に編みかご等の有機物は確認できなかったが、湧水が激しく、その有無については断定しがたい。１，２号ピットとも、内部からドングリ（櫟の堅果）が検出されている。ピットが設けられたのは弥生時代後期以前であり、出土した土器を勘案すると、その所属時期は弥生早期～弥生中期（前半・後半）の巾の中であろうとしか言えない。縄文後・晩期、弥生前期に九州を含め、西日本にみられるドングリピットの類例は増加している。本例が弥生早期・前期のものか、中期まで降った例なのかについては今後の課題としたい。

（註１）高橋徹「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立歴史博物館研究紀要』２、2001、Ｐ１～Ｐ32

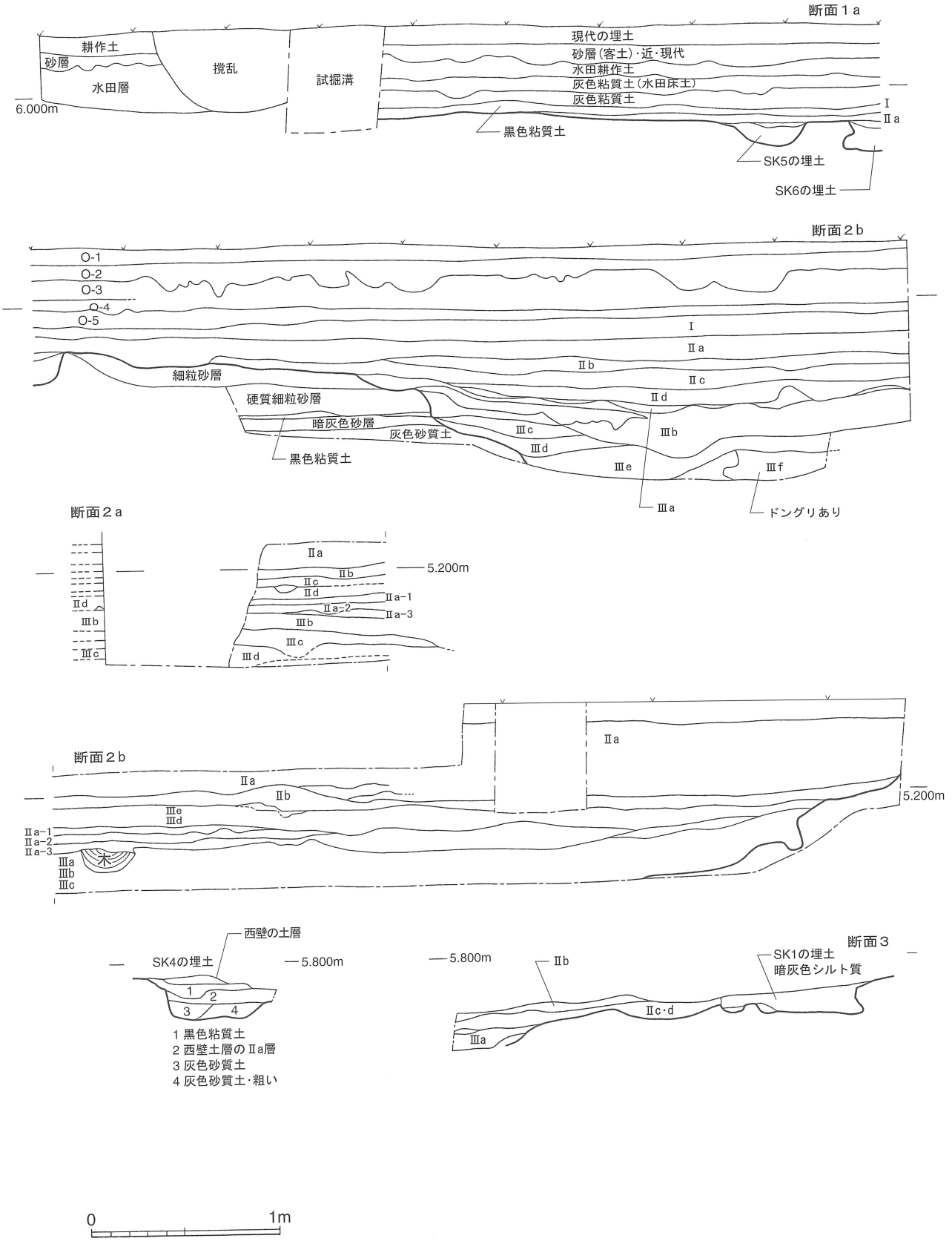
第５章　宮ノ前ａ地区

第１節　遺跡の概要

調査区は市道東へ延びる里道南側隅部にあたり、約243㎡を調査している。まず地表下約－110cm まで重機で掘削する。この面で遺構検出作業を行い、西壁と東壁の中央間を蛇行する線が検出された。宮前ａ地区の北側に里道を挟んで位置する宮前ｂ地区は調査が若干先行しており、ここの調査で南側に泥炭質土壌が堆積していた旧河道が検出されていた。したがってａ地区で検出されたラインもｂ調査区の旧河道の北岸に相当するものと推定した。旧河道検出面は標高約5.40ｍ前後である。遺構は旧河道の泥炭質土壌を掘り下げ、河道内斜面で検出された土坑７基だけである。



第17図　遺構配置図（200分の１）



第18図　土層断面図（100分の１）

第２節　遺跡の層位

０層は近年の層である。0-1層は現代の埋め土。0-2層は水田の上に人為的に敷いた砂層である。0-3･0-4層は水田層とその床土。0-5層は灰色粘質土。

Ⅰ層は黒色粘質土。

Ⅱａ層は白色粒を含む黒褐色粘土。Ⅱｂ層は黒褐色粘土。Ⅱｃ層は暗灰色粘土でⅡｄ層との境界にブロック状の砂層がある。Ⅱｄ層は暗灰色粘土。

Ⅲａ層は3枚に細分でき、a1層：白灰色砂層･a2層：粘土と砂混土茶褐色層、a3層：暗灰色砂礫層である。a2層には大量の植物遺存体がある。

Ⅲｂ層は茶褐色粘土で大量の植物遺存体がある。

Ⅲｃ層は暗灰色砂層。

Ⅲｄ層は茶褐色粘土層で、その下層にⅢｄ′層として砂礫層がある。Ⅲｄ層には大量の植物遺存体がある。

Ⅲｅ層は灰色砂質土層。

Ⅲｆ層は黒色粘質土層でドングリが混入する。

Ⅲａ層～Ⅲｆ層が旧河道の堆積物である。

ｂ地区との対比は難しいが概ねｂ区10層（第１黒土層）がａ区のⅡａ層～Ⅱｄ層に相当し、ｂ区３層（第２黒土層）に相当する。

第３節　遺構と遺物

ａ調査区では地表下－110cm で遺構検出面となる。この面での精査の結果、調査区の北半で蛇行する旧河道を検出した。検出面から最も深い所で－120cm である。堆積物は黒色の粘土層や白色のシルト層、礫層、砂層が堆積しており、細かく分ければきりがない状況である。この旧河道は調査時点において、地下水脈として生きていたようで、堆積層に多量の植物遺体が保存されていた。多量の植物遺体とともに、弥生時代人の食料残滓や木器等も含まれていた。

旧河道は北側に位置するｂ調査区の南半にも観察されており、旧河道の幅を示している。位置関係からするとａ調査区の旧河道検出部部分は右岸ということになる。右岸から旧河道底までの間に大きく２段の段があるが、これは水の最大流量を示すとともに汀線を示すものだろう。遺構はこうした汀線付近に位置しているものと、その外側に位置するものがあった。

SK1　SK １は下段の岸直下で蛇行ラインが外側に向かった場所にある。水流の影響を受けたのか多少変形しているが、長軸130cm、短軸95cm、深さ35cm の規模で、隅円方形を呈する。岸に平行し、水の影響を受ける土坑のせいに西壁は外側へ10cm 以上もオーバーハングしていた。土坑内堆積物は暗灰色シルト質土で、白色粒や木質片･種子（センダン）が混在していた。これらの木質片･種子については人為的な可能性は低い。

SK2　SK ２は上段の岸と下段の岸間に部分的に形成された小規模な岸の内側に位置している。大きさは概ね85cm ～70cm、深さ15cm の規模で、ほぼ円形を呈する。やはり水流の影響か、東半部が浸蝕されて浅くなっている。

SK3　SK ３は岸の外側の遺構検出面上に位置する。大きさは直径50cm、深さ７ cm である。遺構検出面は削られているので、本来は深かったのであろう。

SK4　SK4は調査区の西壁付近で、旧河道の外側に位置する。規模は長軸178cm、幅105cm、深さ37cm であり、平面形は楕円形である。埋土は、西壁の１層：黒色粘質土が最上部に位置し、土坑１層が黒色粘質土（白色粒なし）、２層：黒褐色土（白色粒が多い）、３層：灰色砂質土（しまりなし。部分的に粘質土を含む）、４層：灰色砂質土（粗く、部分的に粘質土を含む）である。このうち、土坑１層は西壁のⅡａ層に連続する。遺物は土坑１層･２層から弥生土器が出土している。

第4節　遺物

Ⅱa層　第20図1は3条突帯を持つ壺の胴部破片である。第20図2は胴が張る甕で、弥生時代中期か。第20図3は須玖Ⅱ式の甕である。第20図4は胴長に立ち上り、頚部が軽くしまり、口縁が緩く外反する。第20図5は下城式土器の甕で、口縁下に突帯が付く。第20図6も胴長に立ち上り、口縁部がくの字状に開く。端部は上方に跳ね上げ状となる。第20図7は大型の石錐で、重さ134.9gである。

Ⅱb層　第20図8は12世紀頃の玉縁の白磁である。第20図9は鍋か。第20図10は10世紀頃の土師器の碗の底部で、底径は9cmである。

Ⅱc･d層　第20図11は二重口縁の壺の破片で弥生後期後半。外面に波状沈線である。第20図12は甕の口縁部破片。第20図13は鋤先口縁の壺の破片で、弥生中期後半の小川原(ここばる)式土器である。口縁上に円形浮紋、端部には鋸歯紋。14は鋤先口縁の壺の破片で、弥生後期前葉と考える。15も「くの字」状に外傾する壺の破片で弥生後期か。端部は上方に跳ね上げ風となり、頚部には刻み目突帯が廻る。16は下城式土器の甕で、口縁下に二条刻み目突帯が付く。17は「くの字」状に短く「くの字」状に外傾する甕の破片で弥生中期。端部は上方に跳ね上げ状となり、頚部には突帯が廻る。18･19は甕の底部破片で、弥生後期か。

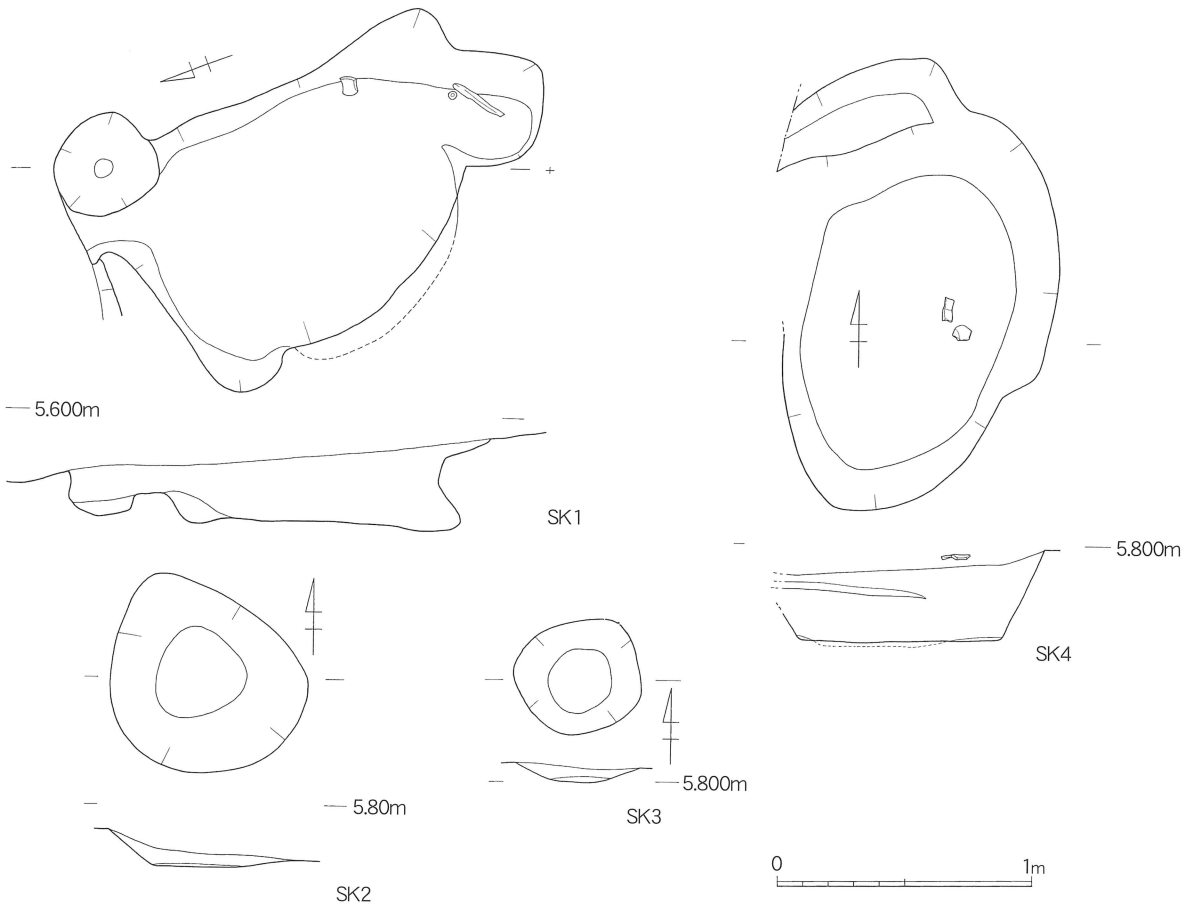
第21図20は弥生時代早期の浅鉢。21は縄文時代後期の三万田式土器の深鉢。深鉢の胴部に張りがほとんどなく、頚部と一体化している。口縁部に凹線を三条廻らせている。22も縄文時代後期の三万田式土器の粗製深鉢か。28は直口する口縁部の甕。30は弥生中期後半の須玖式土器の高坏である。31は黒曜石の剥片である。弥生時代早期か縄文時代後期の土器に伴うものであろう。

Ⅱd層　23は甕底部で弥生後期か。

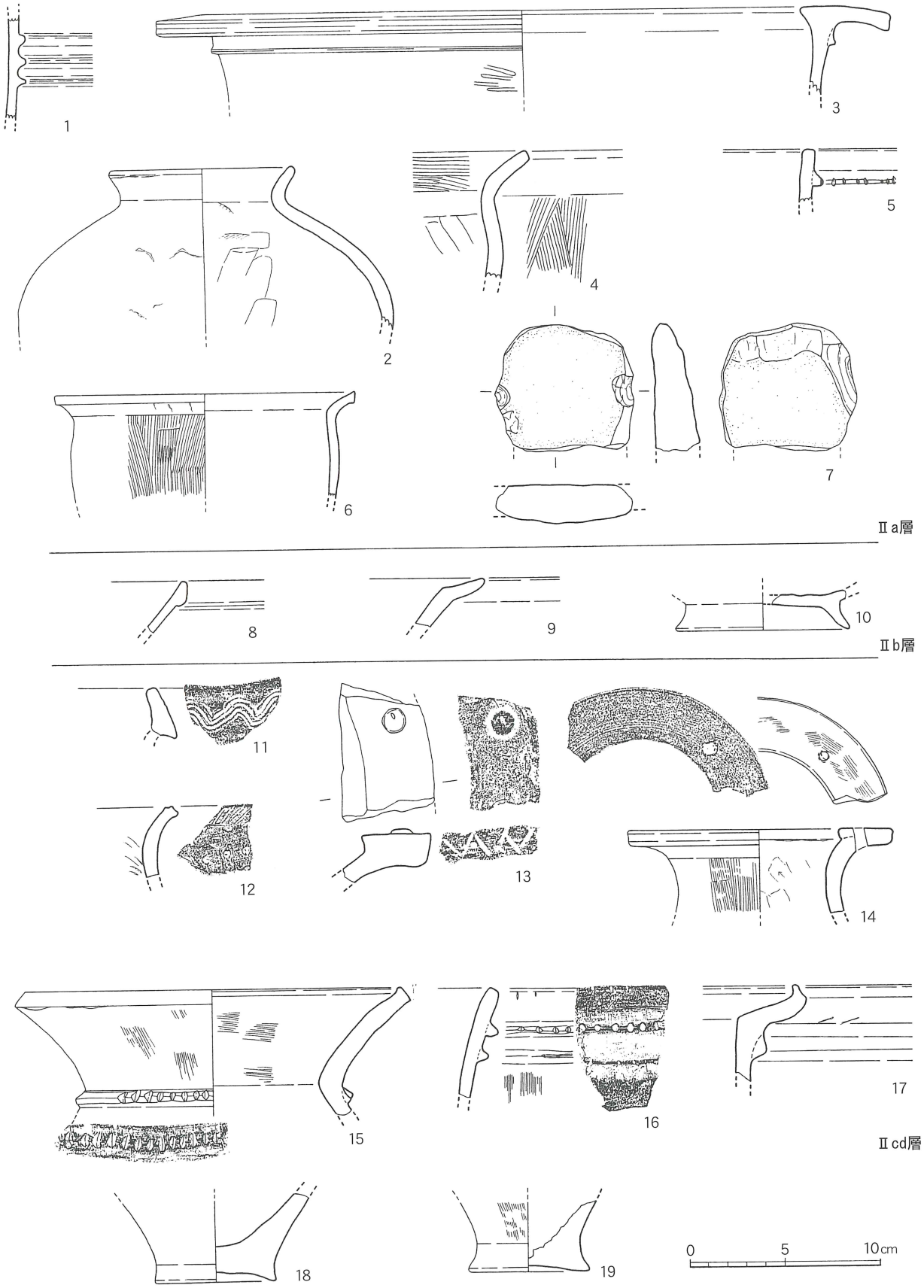
Ⅲa層　24は球状の胴部で、胴部の上部がしまり口頚部が弧状に外反する。口縁端部外面と胴部に縄文を施紋。また口縁の上端部に直交するように短い刻み目を6，7の単位で施している。縄文時代後期菊水町式土器･辛川1式土器前後の時期と考えられる。

Ⅲb層　25は弥生前期の小壺の破片。算盤玉状の胴部で,上部に鋸歯紋を施す。26は壺の破片。27は上げ底の甕底部であり、弥生中期か。

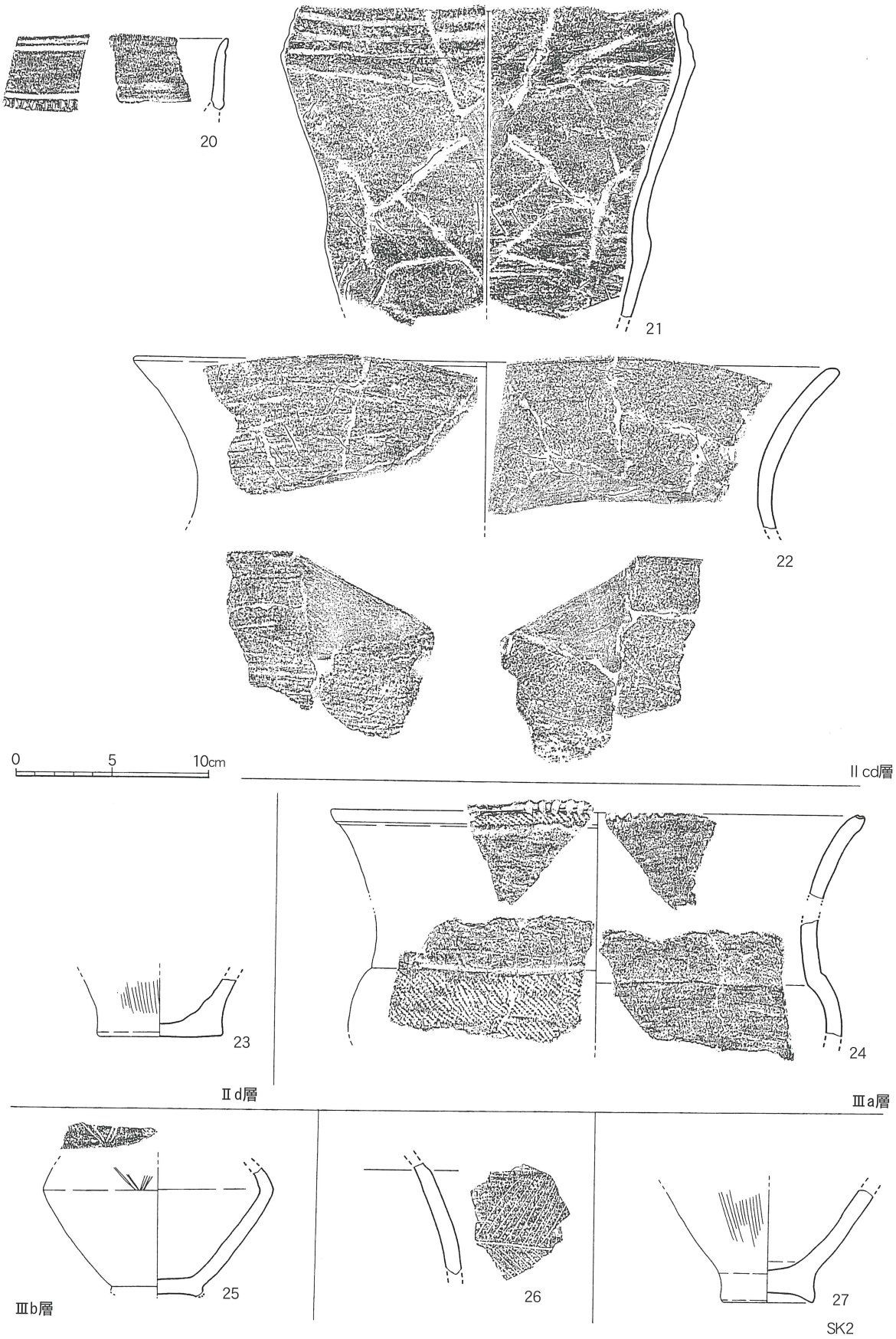
木器　32は木器である二又鍬と考えるが、右半分と枘穴の下の部分が欠けている。層位はⅢa～Ⅲb層から出土している。この層位は遺物は少ないが弥生後期の遺物は検出されておらず、弥生中期に遡る可能性がある。



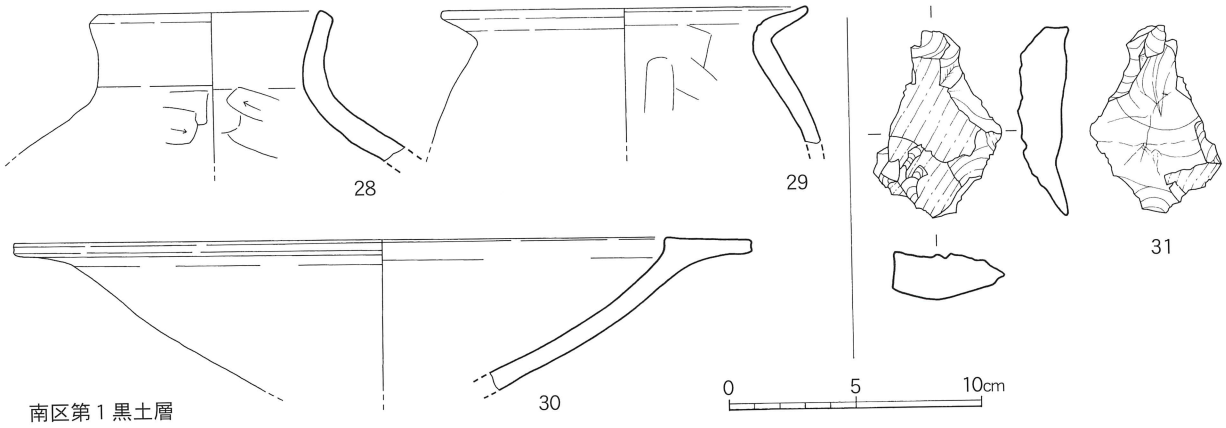
第19図　遺構実測図（60分の１）



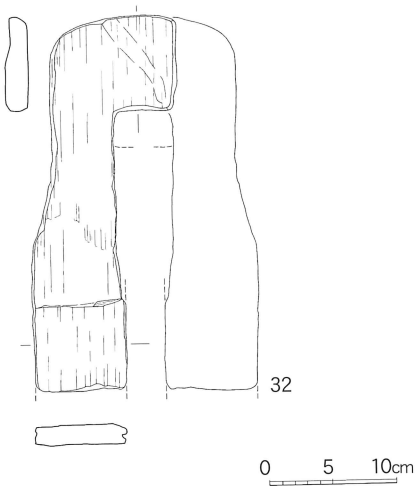
第20図　ａ地区、Ⅱａ層、Ⅱｂ層、Ⅱｃｄ層出土遺物実測図（３分の１）



第21図　ａ地区、Ⅱcd 層、Ⅱｄ層、Ⅲａ層、Ⅲｂ層、SK2 出土遺物実測図（３分の１）



第22図　ａ地区　南区第１黒土層出土遺物実測図（３分の１）



第23図　ａ地区Ⅲａ層・Ⅲｂ層　出土木器（３分の１）

第６章　宮ノ前ｂ地区

第１節　遺跡の概要

調査区は市道から東へ延びる里道北側隅部にあたり、約170m²を調査している。まず地表下約90cm の10層まで重機で掘削する。更に12層上面で遺構検出作業を行い、東壁のやや北側からと南壁西隅付近を斜めにとおる線を検出した。なお宮ノ前ａ地区の泥炭質土壌が堆積していた旧河道が検出されており、宮ノ前ｂ地区で検出されたラインは宮ノ前ａ調査区の旧河道の南岸と推定される。旧河道の検出面は標高5.50ｍ前後で、遺構は旧河道の泥炭質土壌を掘り下げている。河道内斜面で検出された遺構は土坑10基・溝１条・流路２条である。

第２節　土層の堆積状況

旧河道と隣接する層位については以下のとおりである。

１ａ層：黄白色　客土･盛り土整地層。礫･砂からなる。

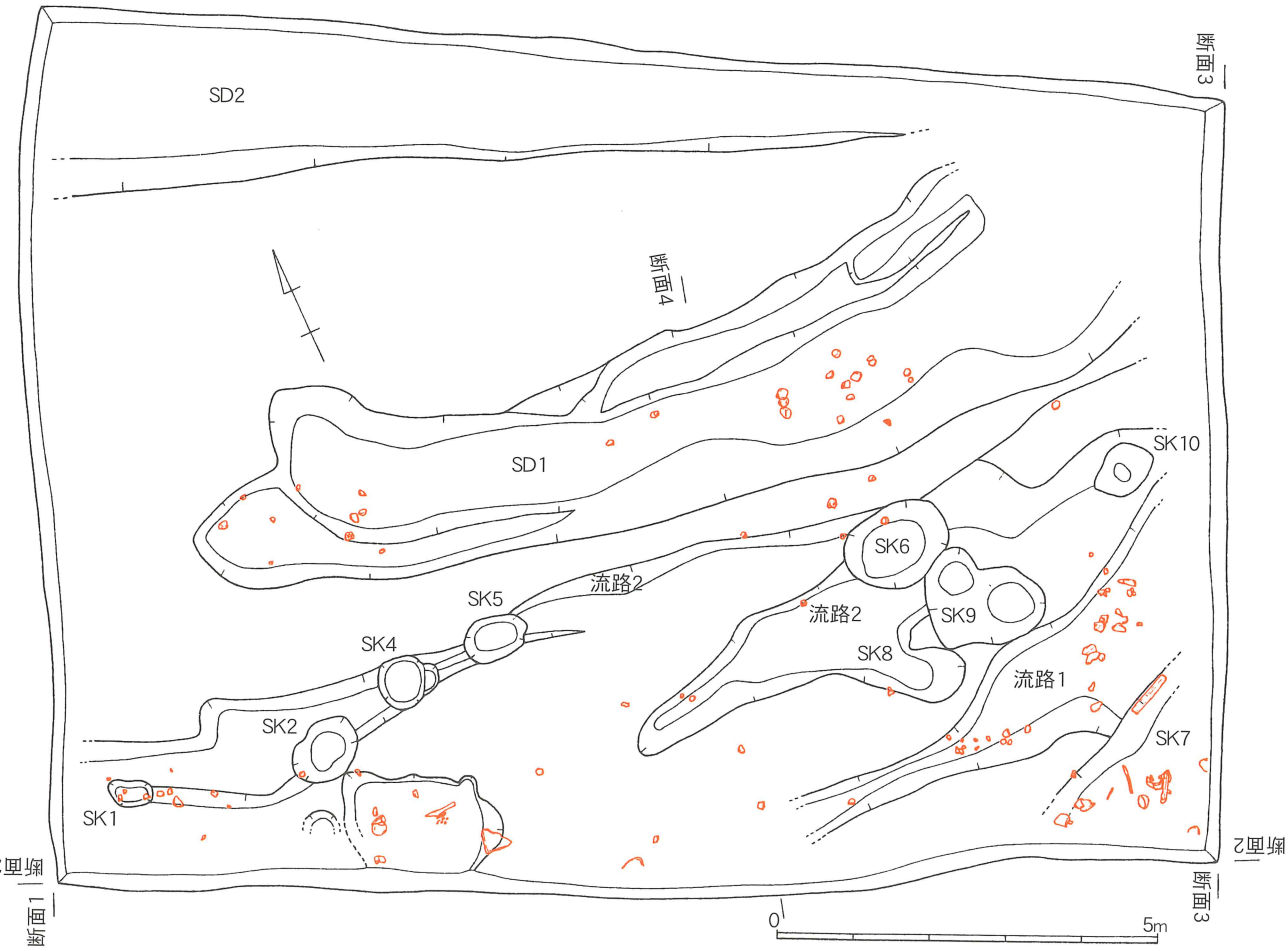
１ｂ層：黄灰色　客土･盛り土整地層。神社用の方柱状石、セメント･ブロックが多量に混在する。

２層：暗灰色　客土で耕作土。

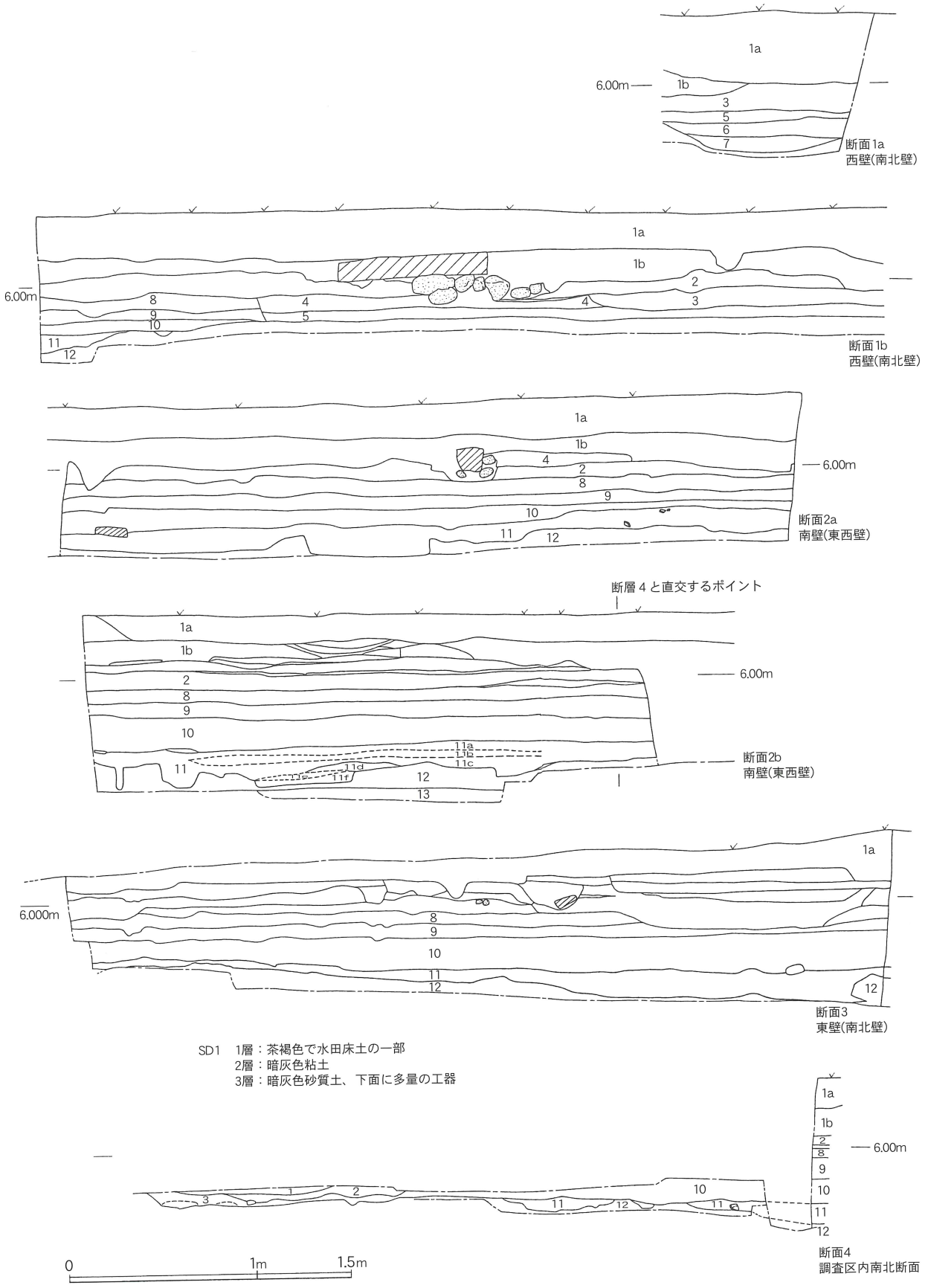
３層：黄燈色　整地層。上面に燈色の酸化鉄が沈着しており、水田として使われた時期が存在するのかもしれないが、極めて不明瞭。

４層：青灰色　整地層。上面に燈色の酸化鉄が沈着している。砂質。

５層：青灰色　水田整地土。粘質土。５層の下面は自然の砂層であるが、12層と接する部分のみ酸化鉄が沈着し、床土となっている。



第24図　ｂ地区遺構配置図（200分の１）



第25図　ｂ地区土層断面図（100分の１）

6層：黄燈色　整地層。砂質。
7層：暗灰色　溝内の堆積物か。
8層：青灰色　砂質。客土か自然か明確でないが、広範囲に見られるため、洪水による堆積か。
9層：青灰色　粘土。客土か自然か明確でないが、広範囲に見られるため、洪水による堆積か。
10層：暗褐色　第1黒土層。粘土。上面に近代の遺物を含む。
11層：黒色　第2黒土層。黒色土と青灰色の砂層が混在する。弥生土器を包含。
12層：暗青色　砂層

第3節　遺構

遺構は幅100cm前後で深さ30cm前後の小流路と小土坑が連結した流路1･2がある。それ以外の小土坑も流路に隣接しており、関連があると見做せる。

流路1（第24図）は調査区の東南部にあり、C区方向に向けて延びる。西側の上流方向から続く可能性が高く、SK 3の南側を流れていたと推定する。流路1は宮前C区に近いところで大きく開き、弥生土器が多量に分布していた。

流路1内の遺構は以下のとおりである。SK 7は調査区の東南隅部を塞ぐように位置している。平面形は方形と推定される。内部には弥生土器の大型破片や流木などが散乱していた。深さ30cmである。SK 3は調査区西南部に位置する。平面形は方形で、断面観が逆台形である。長軸210cm・短軸約140cm・深さ35cmで、流路内に位置する。土器片等が出土している。土坑中央部に十数個のクヌギのドングリが集中的に遺存していた。

流路2（第24図）は調査区の西南隅部から東壁中央付近に延びるが、中央付近で乱れる。溝内には小土坑が連珠状に連なっている部分がある。小土坑内に僅かながらクヌギのドングリも散見されることから、アク抜きに関わる水さらし場と推定する。西側の道路挟んで隣接する東横前ｂ地区では多量のクヌギのドングリを貯蔵した数基みつかっている。

流路2内の遺構は以下のとおりである。SK 1は調査区西南隅部に位置する。長軸57cm・短軸35cm・深さ10cmで、流路の右岸側に位置する。SK 2は調査区西南部に位置する。長軸85cm・短軸74cm・深さ16cmで、流路の右岸側に位置する。土器片等が出土している。SK 4は調査区のSK 2の東側流路内に位置する。ほぼ円形で直径67cm・深さ26cmで、流路の右岸側に位置する。土坑内は平らである。SK 5は調査区の中央部に近く流路内に位置する。西南部に位置し平面形は楕円形である。長軸90cm・短軸52cm・深さ20cmで、流路の右岸側に位置する。土坑内は平らである。SK 6は楕円形で長軸142cm・短軸102cm・深さ42cmの規模を有し、調査区の西半部中央付近に位置する。平面形は楕円形である。SK 9は土坑2基が連結し、平面形がハート形をなす。楕円形で長軸164cm・最大幅108cm・深さ27cmと44cmの規模を有し、調査区の東半部中央付近に位置する。平面形は楕円形である。SK10は平面形が菱形で、長軸90cm・短軸72cm・深さ14cmの規模を有し、調査区の東端部中央付近に位置する。断面系は皿状である。

第4節　遺物

1は高坏の脚部破片である。2は布目のある丸瓦の破片である。3は周防系緑釉陶器の底部破片で、高台内に糸切り痕がある。5は石鏃で、本遺跡で出土している縄文時代後期・弥生時代早期にともなうものか。6は近世の煙管。7は16世紀頃の京都系のかわらけ。8～14はヘラ切りによる土師質の坏である。15は8世紀頃の碗である。16～19、20～30は土師質の碗と坏で、10世紀頃のものか。31～35は表面に格子目叩き痕と内面に布目痕が観察される古瓦。32の小口には瓦当を接着していた痕跡がある。年代はっきりしないが、ヘラ切りの坏や高台のある碗と同じ10世紀頃のものか。36は須恵器の坏である。

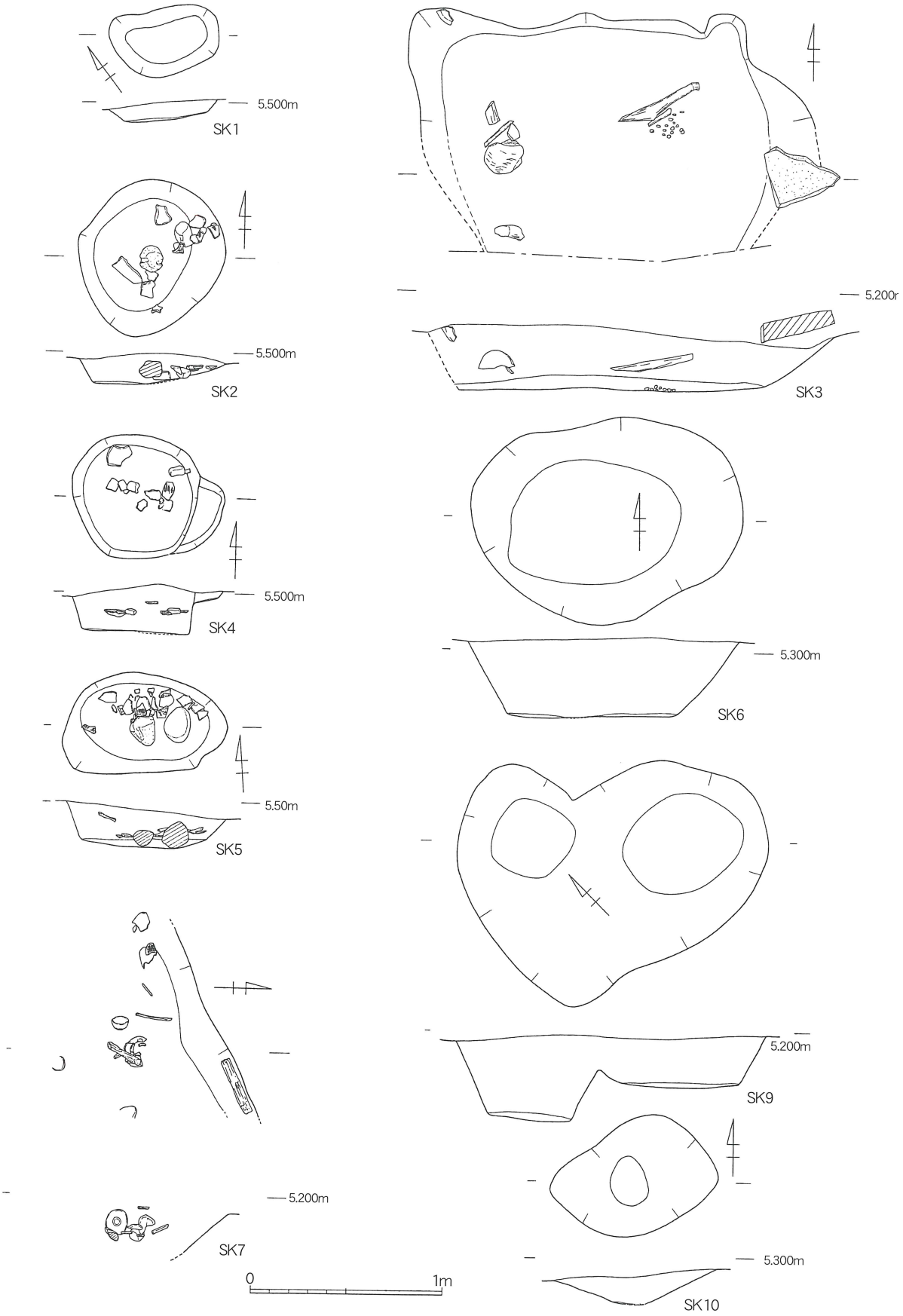
37は朝顔形に口縁部が開き、端部で肥厚させている。口縁の側面には波状沈線を引く。胴部ははっきりしないが、小川原式土器の壺破片で、弥生時代中期後半か。38～44までは安国寺式土器系の土器。38も朝顔風に口縁部が開く例で、端部を肥厚させている。上面に竹管文、口縁の側面に鋸歯文を引く。39・40も同様な土器で、口縁部外面に鋸歯文を施す。40は上面に浮文がある。41・42は外面が内傾しはじめた頃の古い安国寺式土器系の壺で、浮文がある。弥生時代後期前葉か。43･44は口縁部が直立する二重口縁の壺である。外面に櫛歯波状文を施す。弥生後期中葉か。46～48も二重口縁壺の破片で弥生時代後期後葉。46は直立し、外面に櫛歯波状文を施す。47は外側に外反し、外面に櫛歯波状文。50～54は弥生時代後期後葉の土器破片か。55～64は弥生時代後期の甕。61は弥生時代後期前葉か。62は口縁部の端部上面が跳ね上げ状で、あるいは中期までさかのぼるか。63は凹線文土器である。67～69は高坏の坏部破片と脚部破片である。70は高坏の坏部破片であり、弥生中期であろう。77～79は砥石である。80は直径約1.5cm 前後、厚さ0.5cm で、表面を粗く研磨している。81は打製石鏃で、82は磨製石鏃である。弥生時代中期から後期初頭の事例か。

83は縄文時代後期中頃の西平式土器前後の土器である。84～87は縄文時代晩期または弥生時代早期にの浅鉢で、器面調整は磨き。88～90は刻目突帯文土器の深鉢である。器面調整は横方向の条痕・ナデで、弥生時代早期に位置付けられる。91は磨製石斧の刃部破片である。

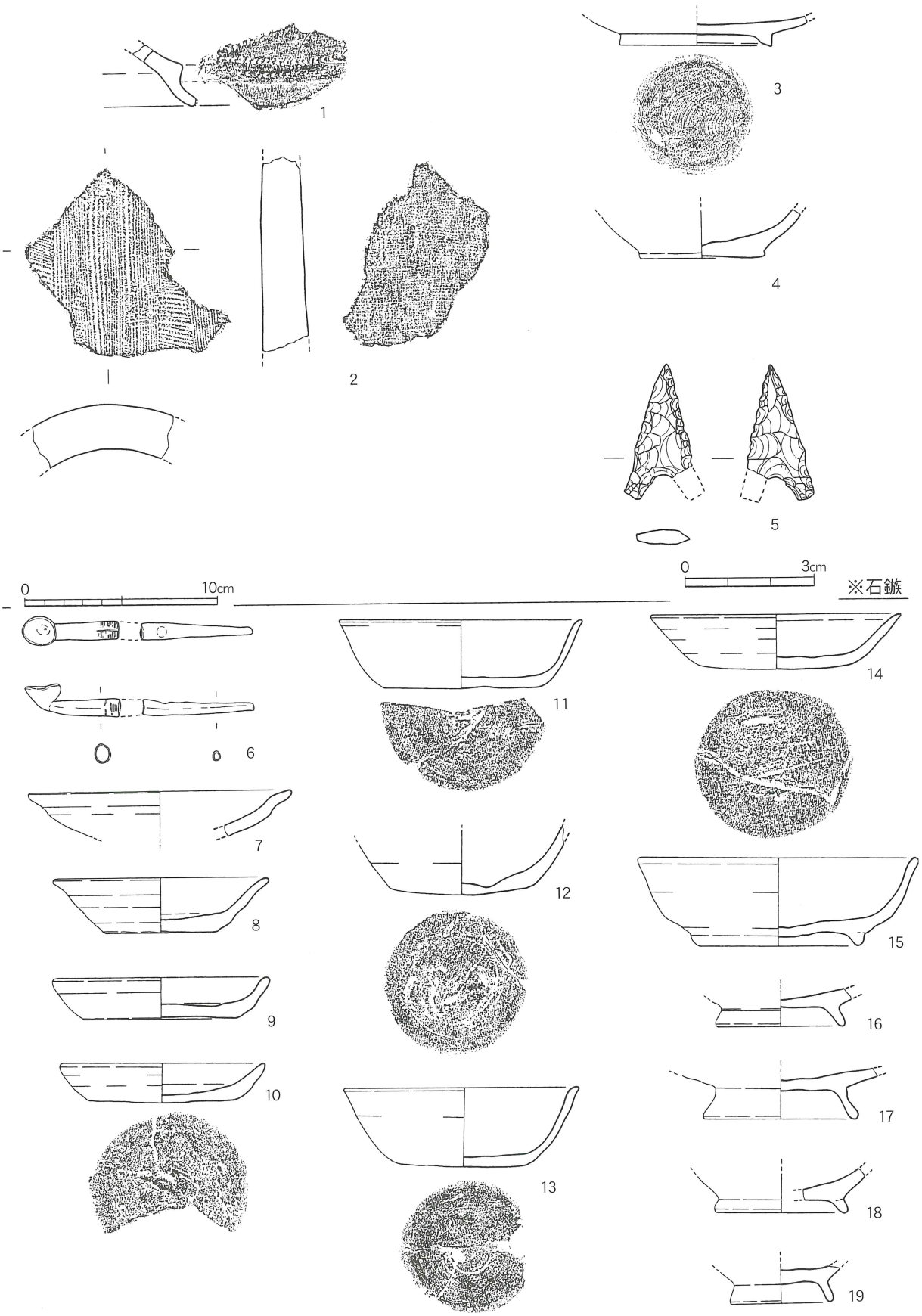
92～94は土師質でヘラ切りの坏。95は土師質の碗。これらは10世紀頃の位置付けができる。96も同じ頃の壺か。97は古瓦の丸瓦である。外面にはかき目状の調整が加えられ、内面には布目痕が観察される。98は甕の胴部破片であり、外面にハケメの後、ナデ調整をほどこした例。弥生時代後期末～古墳時代前期の西新式土器系統の甕か。

99は朝顔形に開き、端部を肥厚させた壺であり、外面端部に刺突状の短沈線を施している。弥生後期前葉か。100は二重口縁化した口縁部で内傾している。外面に櫛描き波状文。101は複合する口縁で直口する。弥生時代後期末～古墳時代前期の西新式土器系統の甕か。104～106は土師質の碗で、10世紀頃か。107は瓦器質の破片。110～112、120は弥生時代後期の甕の口縁部と底部破片。121･122は敲石。123は砥石。

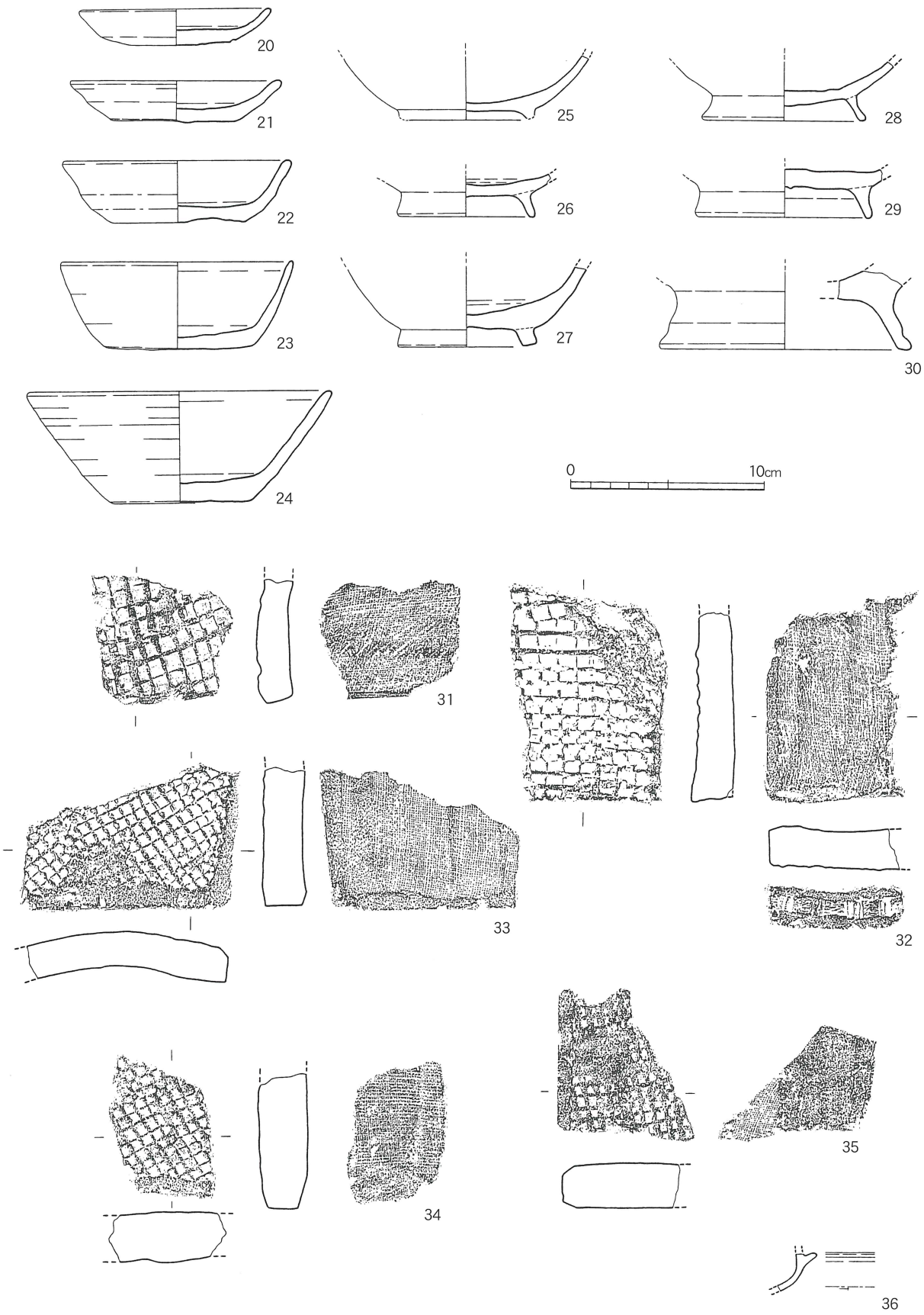
124は球形の胴部にＭ字突帯を廻らせた中期前半の壺である。126は凹線文土器で後期中葉瀬戸内系か。127は安国寺式系の壺の胴部破片。131は弥生中期前半の甕。136・137は刻目突帯文土器で弥生早期に位置付けられる。139･140は口縁部が内傾する安国寺式土器系の複合口縁の壺で、弥生後期中葉。147は台付鉢の脚部で弥生中期または後期。149･150は刻目突帯文土器で弥生早期に位置付けられる。151はタタキ痕のようであるが、ハケメのある甕破片である。152は球形の胴部から口縁が直口する壺で、弥生中期。153は安国寺式土器系の複合口縁壺の胴部破片。162は弥生前期の壺破片で、ヘラ磨きによる器面調整。160は直口して、大きく外湾する弥生後期後半の高坏。166は小型の砥石。167は石錘。169は安国寺式土器系の複合口縁の壺。176は口縁部が大きく外側へ反る高坏で弥生後期後半。180は台石で、表裏両面に受けによるアバタ状の打痕があり、重さは404ｇ。181は大型の石錘で、1730ｇである。182は弥生中期の甕で、胴部は球状、頸部が締まり、口縁部が外へ外湾する。外面タテハケ。184は口縁部がＬ字状に開く甕で、端部上面を跳ね上げる。186は台付の鉢。187は直口する壺で、胴部が球状に張る。外面に文様的な縦方向のヘラ磨き。191は複合口縁の壺で、直口する。192は瀬戸内系凹線文の壺である。195は台付の鉢で、口唇部周辺に丹を塗る。200～209は装飾器台で同一個体の破片と思われる。同様の破片は宮ノ前ｃ地区でも出土している(第62図)。200は口縁部破片で、凹線文が施されている。210は頸部が直口するように立ち上がり、口縁部が外反する。端部が上下に肥厚する。上面に２個単位の浮文を付ける。213は小型の鉢である。


5.500m
SK1
5.500m
SK2
5.200r
SK3
5.500m
SK4
5.300m
SK6
5.50m
SK5
5.200m
SK9
5.200m
SK7
0
1m
5.300m
SK10

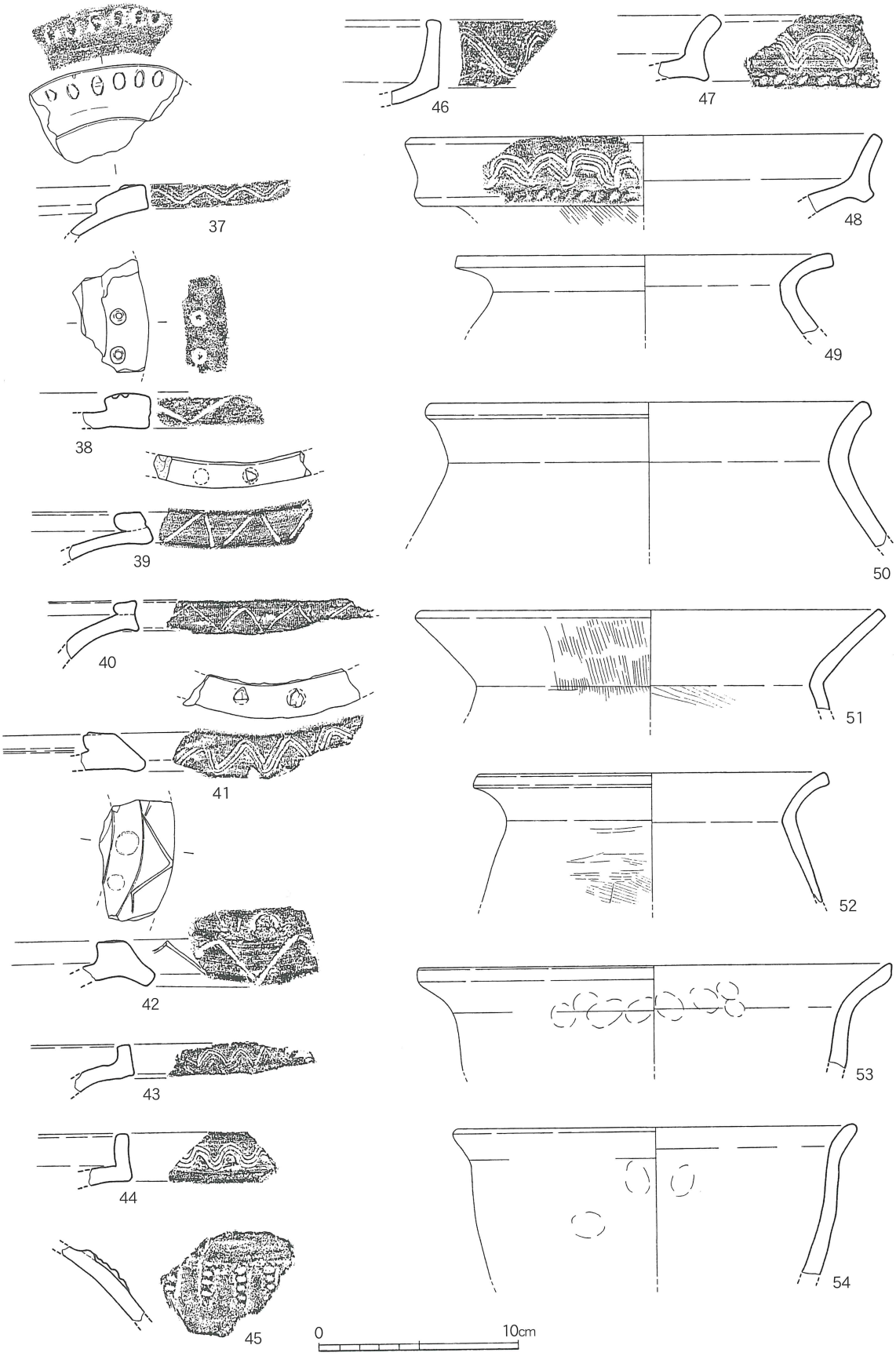
第26図　遺構実測図



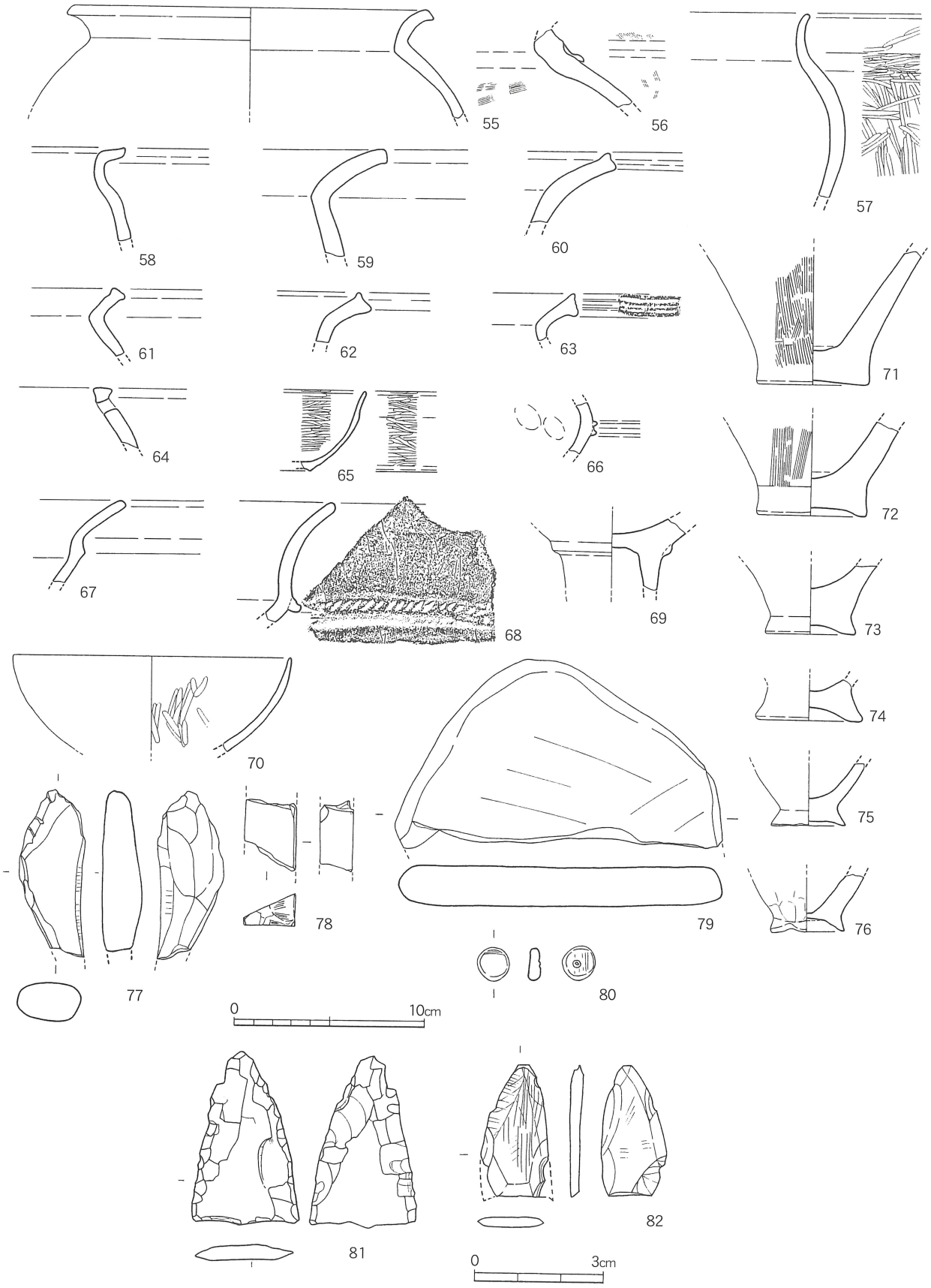
第27図　第一黒土層およびその他の土層出土遺物実測図



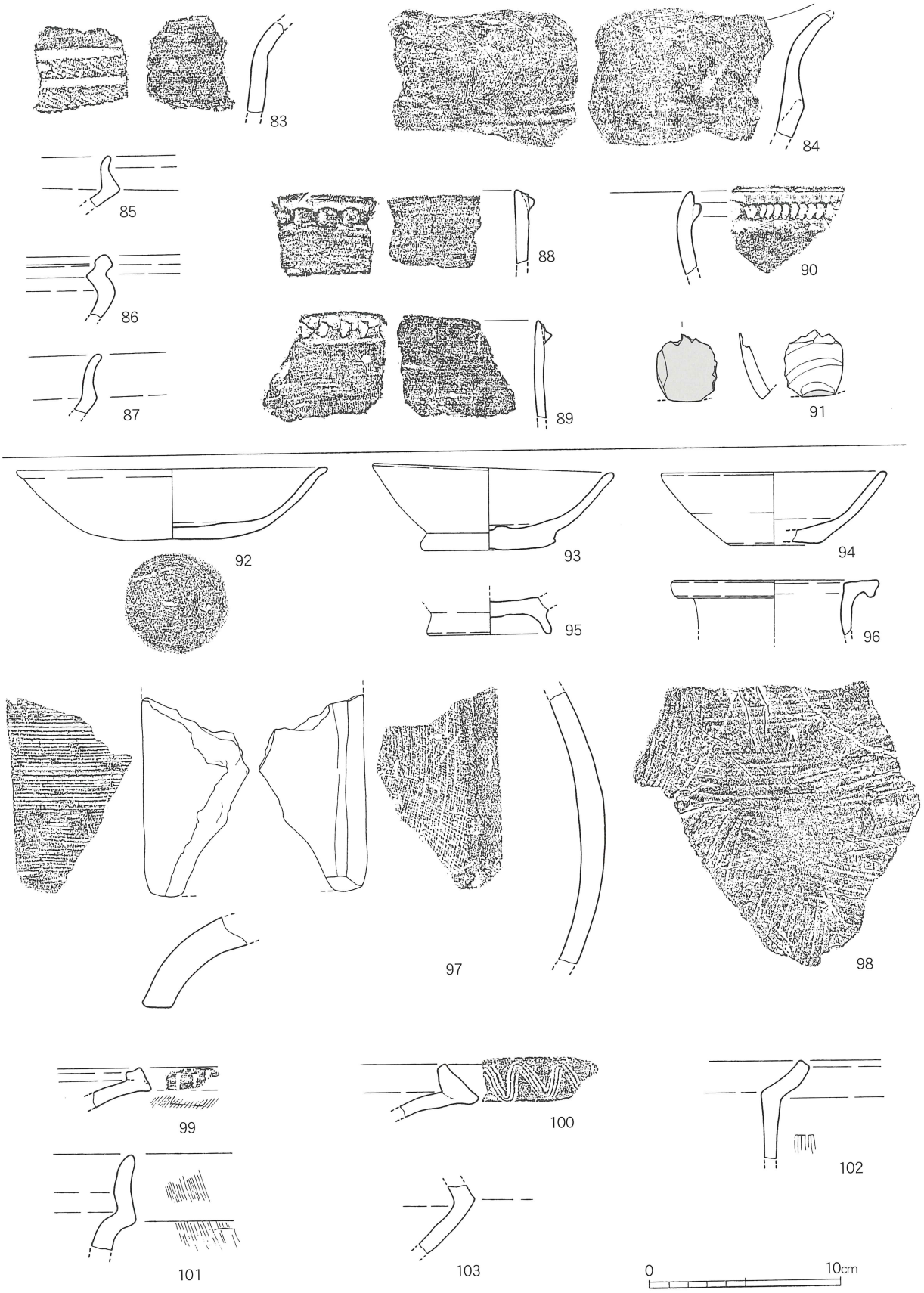
第28図　第一黒土層、黒土層出土遺物実測図



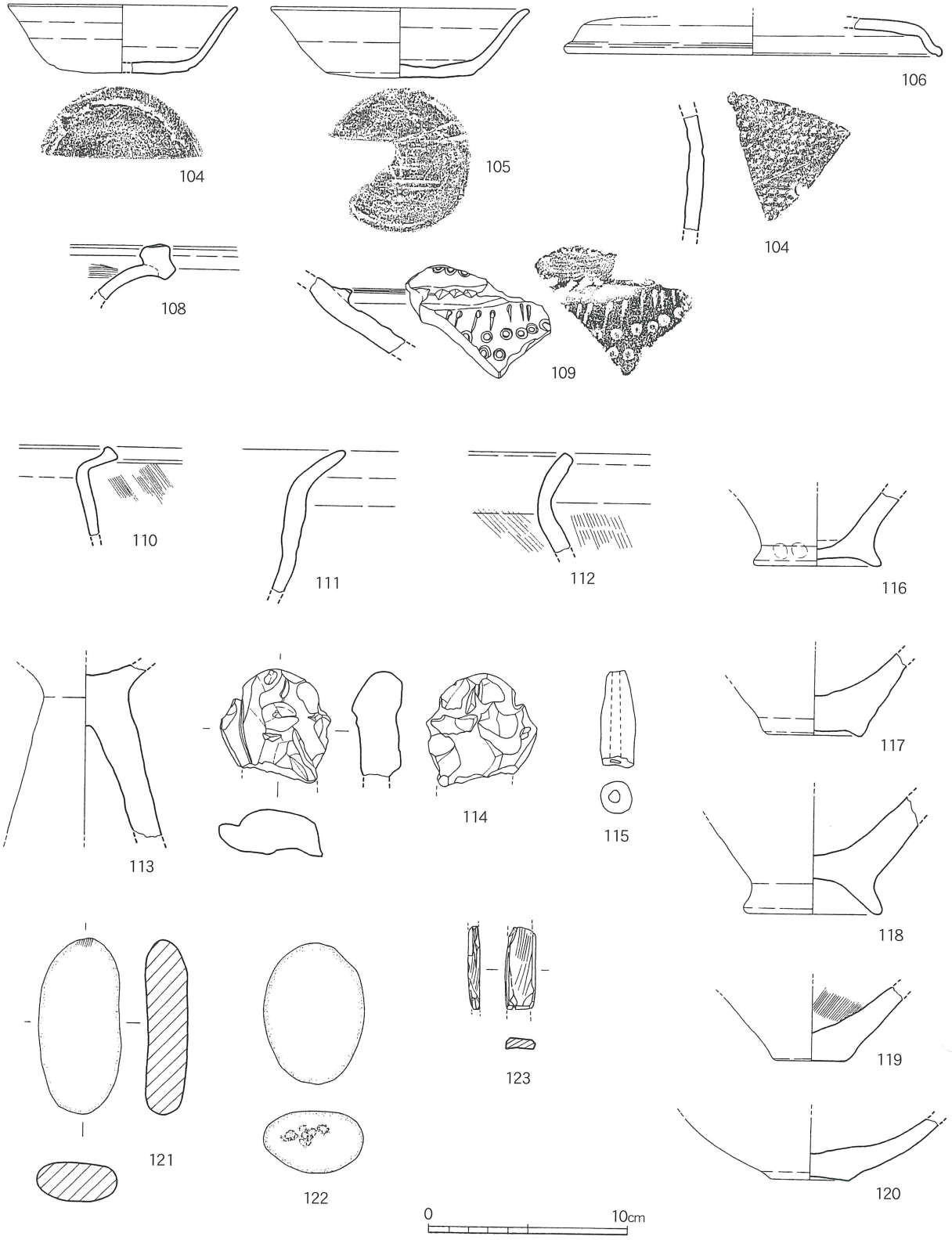
第29図　第一黒土層・黒土層出土遺物実測図



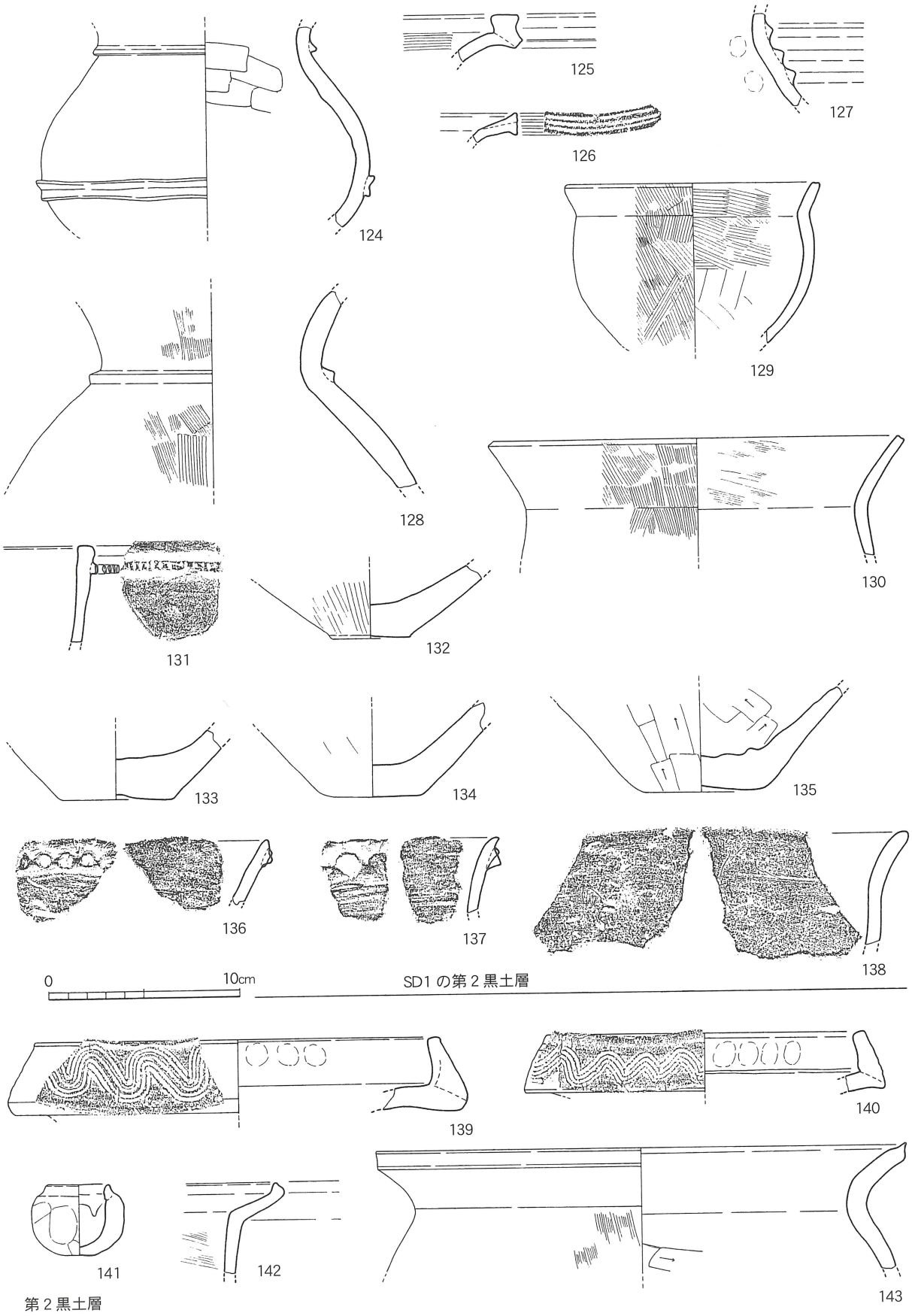
第30図　第一黒土層・黒土層出土遺物実測図



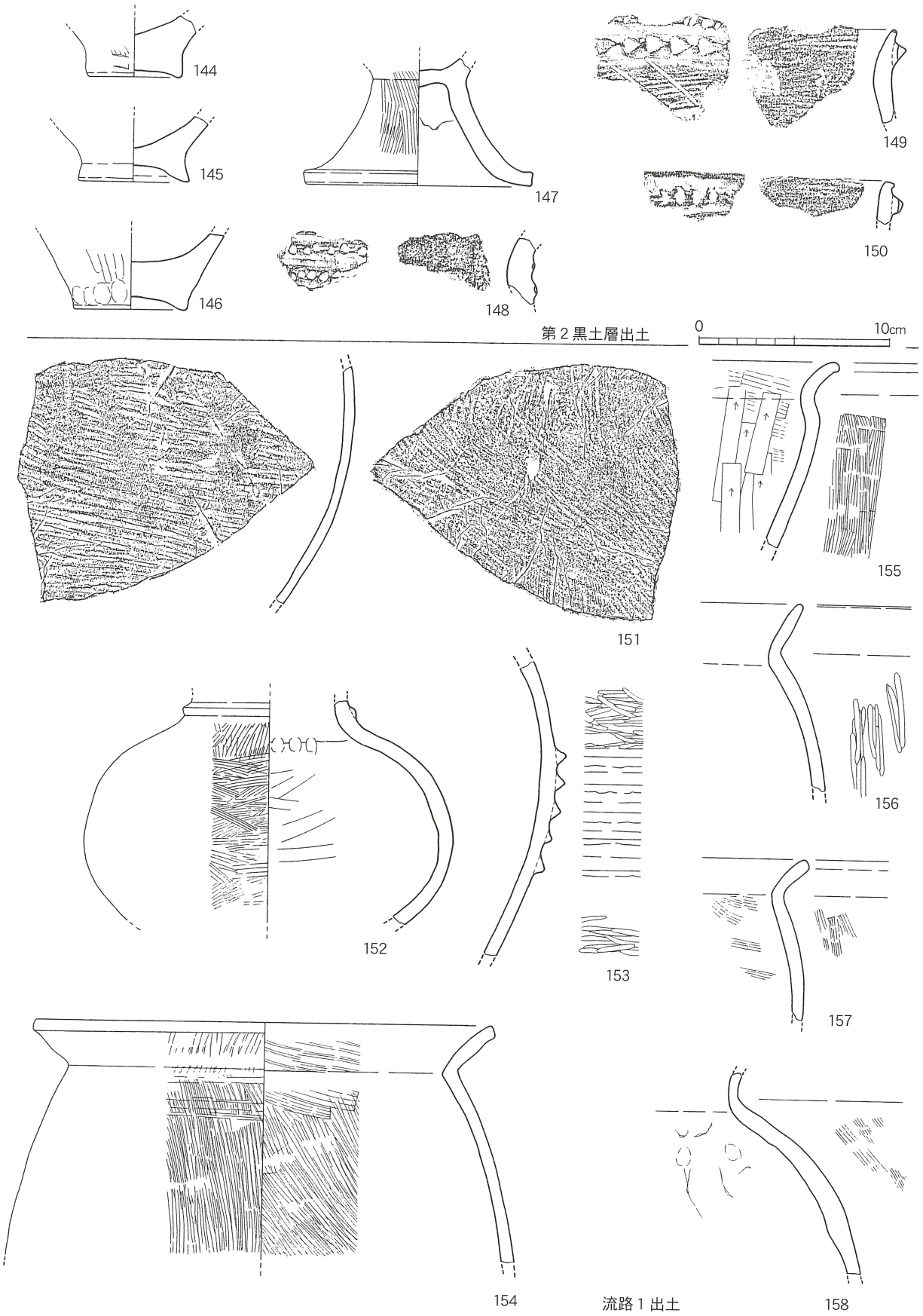
第31図　第一黒土層・黒土層（上段）・ＳＤ１上面・黒土層（下段）出土遺物実測図



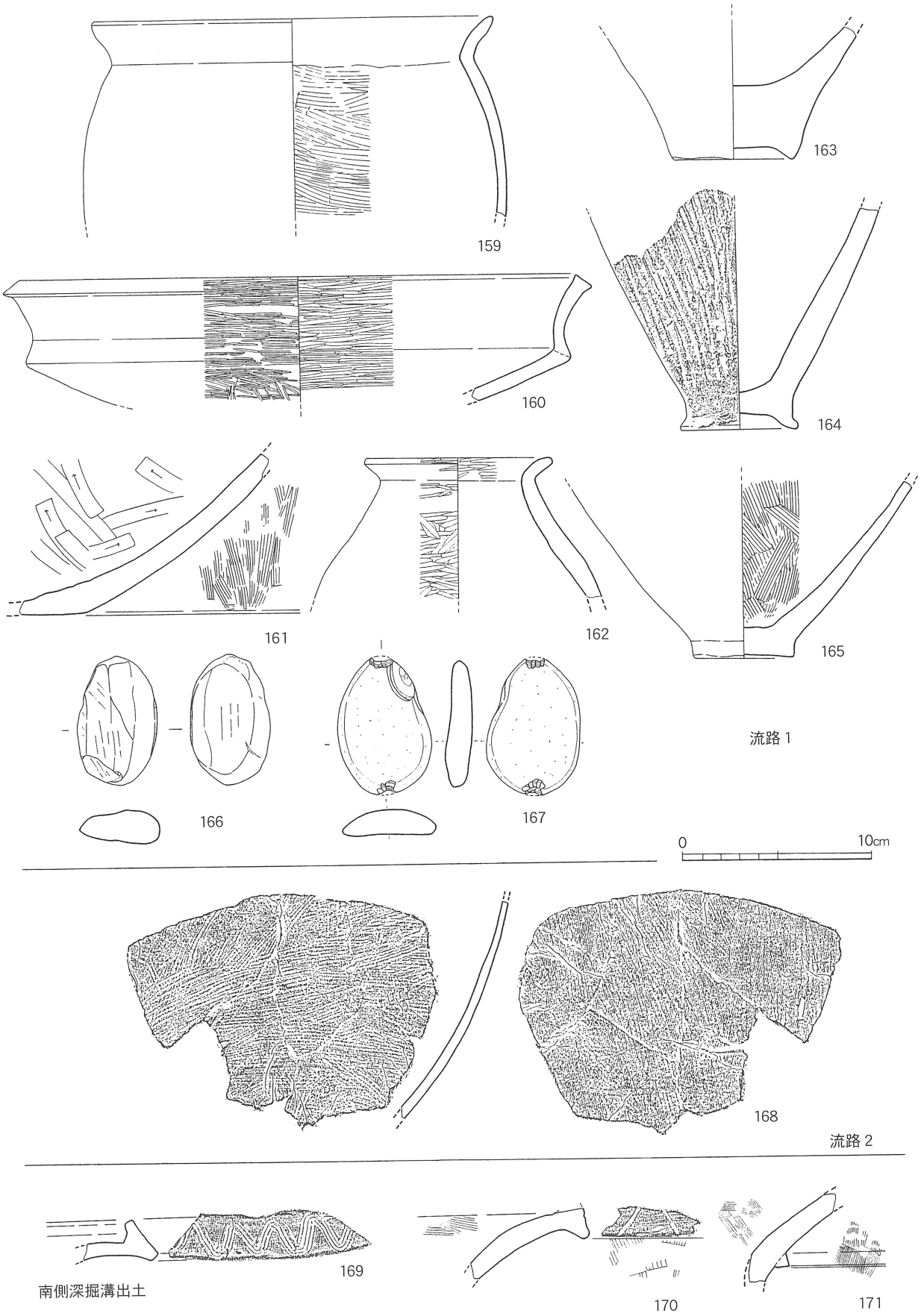
第32図　ＳＤ－１、第一黒土層出土遺物実測図



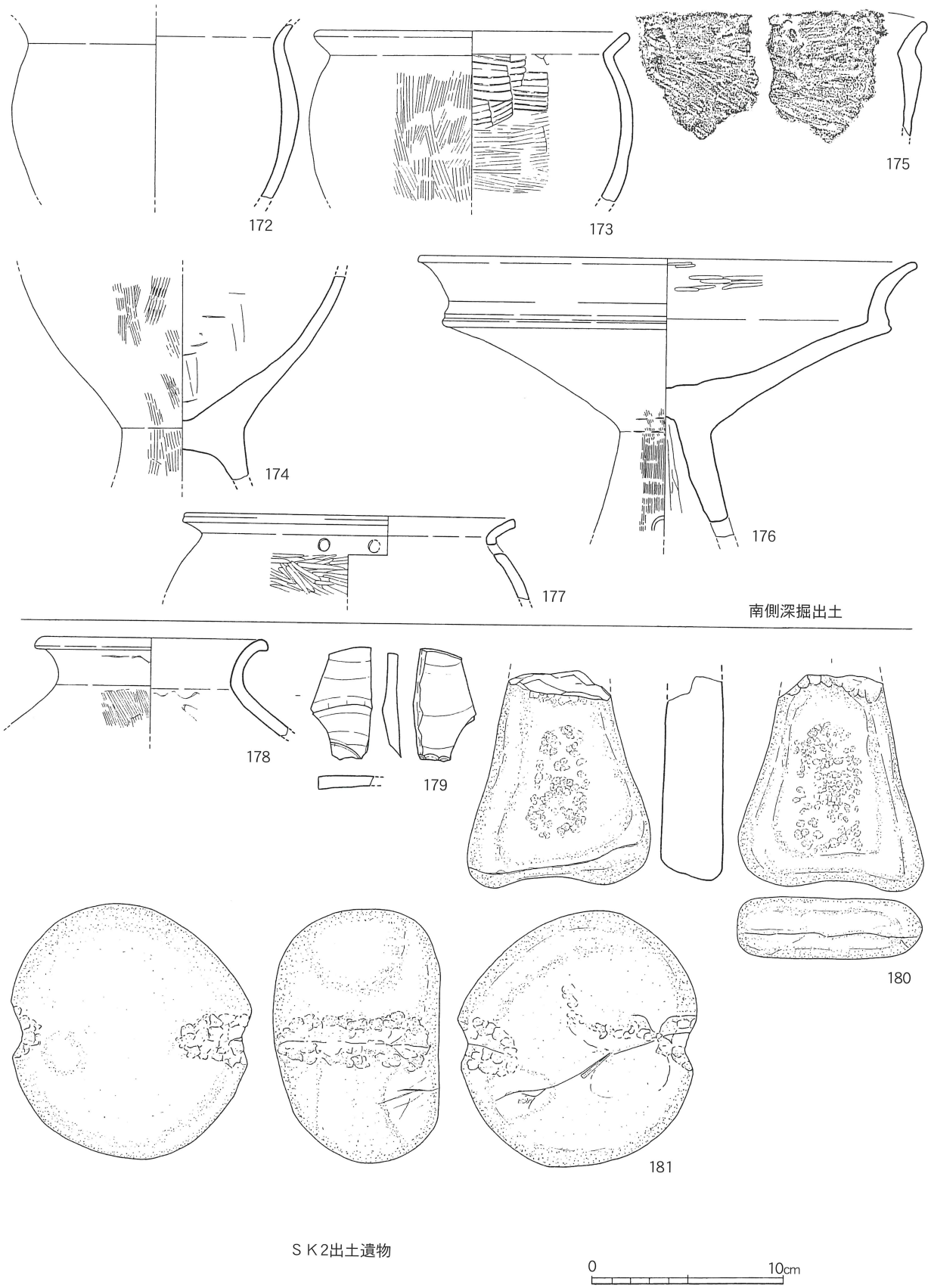
第33図　ＳＤ－１、第２黒土層出土遺物実測図



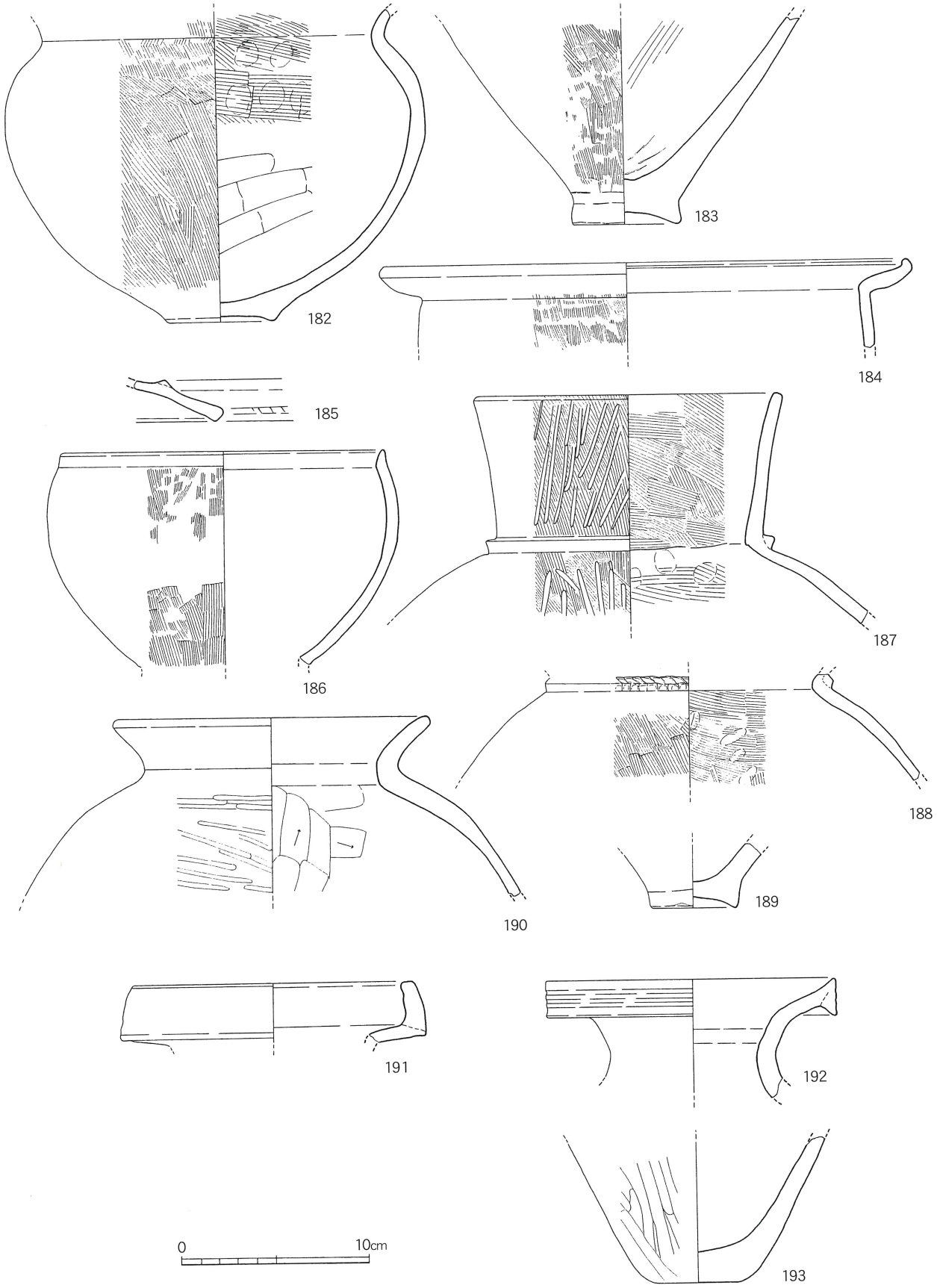
第34図　第２黒土層、流路１出土遺物実測図



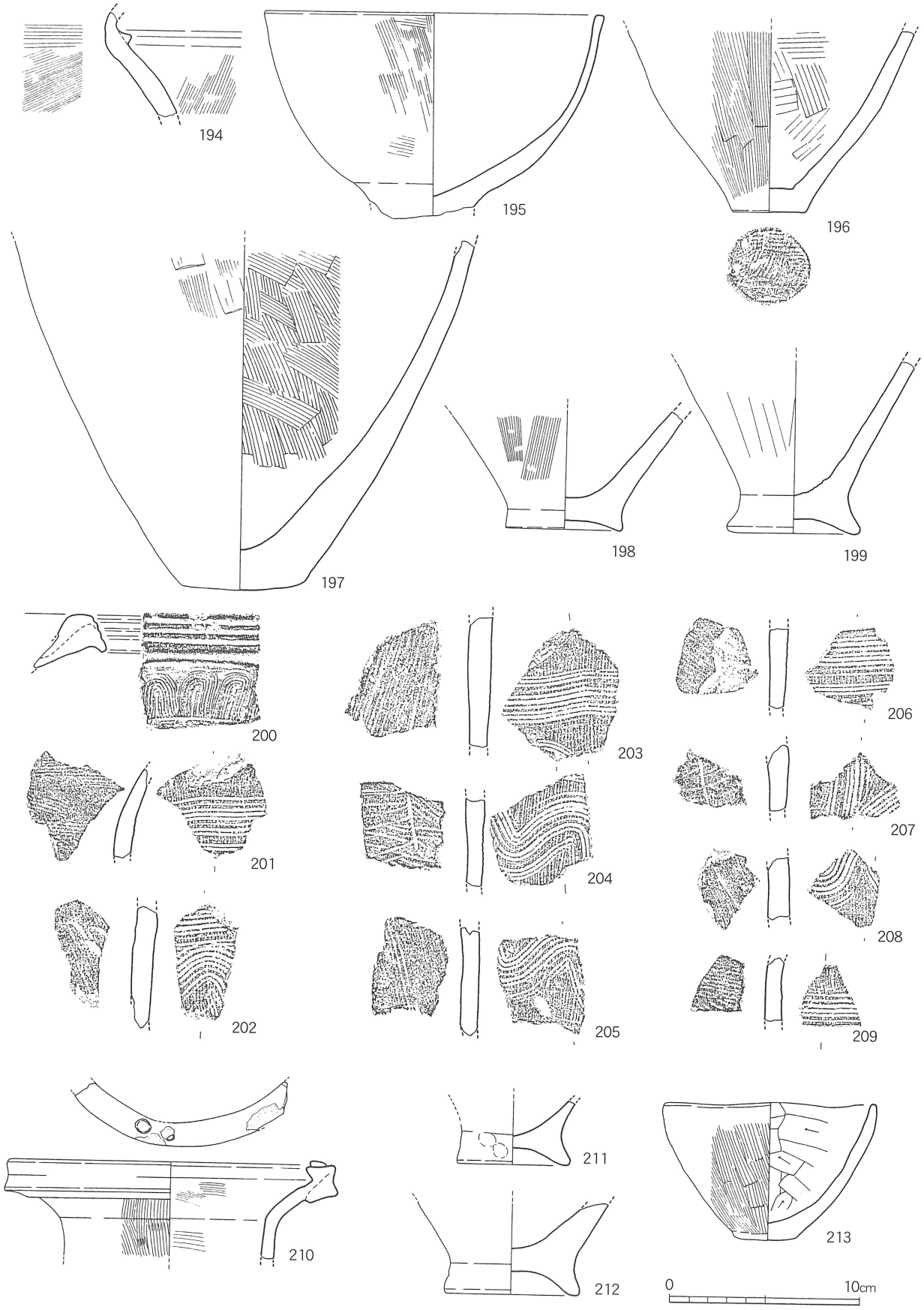
第35図　流路１、流路２　南側深掘出土遺物実測図



第36図　南側深掘・ＳＫ－２出土遺物実測図



第37図　ＳＫ２、ＳＫ４、ＳＫ５、ＳＫ６、ＳＫ10、ＳＫ11出土遺物実測図



第38図　ＳＫ７、第一黒土層、南側排水溝、表採出土遺物実測図

第７章　宮ノ前ｃ地区

第１節　遺跡の概要

１）経緯

本調査区は、2005年度調査区宮ノ前ｂ地区の東側に隣接する位置にある。遺跡としては同一のものである。調査区は民家の宅地跡で、調査時には家屋の類は撤去され更地になっていた。前調査の知見を踏まえながら、周辺も含め数箇所に重機による試掘溝を設け、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、当該区は水位の高い地勢で、表土以下は黒褐色の粘質土からなっており、確実な遺構の存在は確認できなかった。結果的には、2005年度（宮ノ前ｂ地区）の続きである本地区でのみ、遺物が検出されたため、本調査の対象とした次第である。

調査区をⅠ～Ⅳの４区画に分け、掘下げ、遺物の取上げ等を行った（第39図）。

２）基本土層

調査区内数カ所で土層観察を行った（第41図）。そのうち、西壁、北壁、中央ベルトの土層の詳細については後述のとおりである。観察した箇所で多少の異同はあるが、本調査区の基本土層は以下のとおりに整理できる。

１層：表土層で、暗灰色の整地土層である。厚さ20～30㎝。近現代のもので無遺物層である。

Ⅱ層～Ⅲ層：暗茶褐色の土層で、Ⅱ層は粘質が強く、Ⅲ層はやや砂混じりの粘性が弱い土質であるが、大きな違いはない。水平堆積の土層で、Ⅱ層とⅢ層の境面は多少不整合となっている。両層あわせて厚さ70㎝～90㎝を測る。現地表面から標高６ｍ前後までの下位には、本土層内に数枚の水田層を含む箇所もある。この水田層の最下位はおよそ標高5.5ｍ前後である。本土層には縄文時代～中世・近世までの遺物が包含されている。

Ⅳ層～：上記のⅡ、Ⅲ層以下は入り乱れたブロック状の粘質もしくは砂混じりの黒褐色系土や砂層からなる水平堆積土層が最多の場所で10数枚続く。本土層からも土器片や木器、木材等の遺物が出土する。

最下層：遺物を含まない砂層で、いわゆる地山として本土層上面をもって掘下げを停止した。この地山は第Ⅰ、第Ⅱ調査区北西部から第Ⅲ、Ⅳ調査区の東壁部へ向かってなだらかに下がっており、第Ⅰ、第Ⅱ調査区北西部では標高５ｍ、第Ⅲ、Ⅳ調査区の東壁部では標高およそ４ｍとなる。このような西側から東側へ傾斜した本来の自然地形上に、縄文時代以来、洪水他の流土によって堆積が進んだわけである。

なお、西壁、北壁、中央ベルトの土層の詳細は以下のとおりである。

北壁 土層図（Ａ－Ａ’）

１層　暗茶褐色土：きめ細かく粘質

２層　暗茶褐色土：ややきめが粗く粘性弱い

３層　茶褐色土：砂混じりできめ粗い

４層　黄灰色土：砂混じりできめ粗い

５層　暗灰色土：砂混じり。やや粘質

６層　茶褐色土：砂質土と粘質土混じり。木片を含む

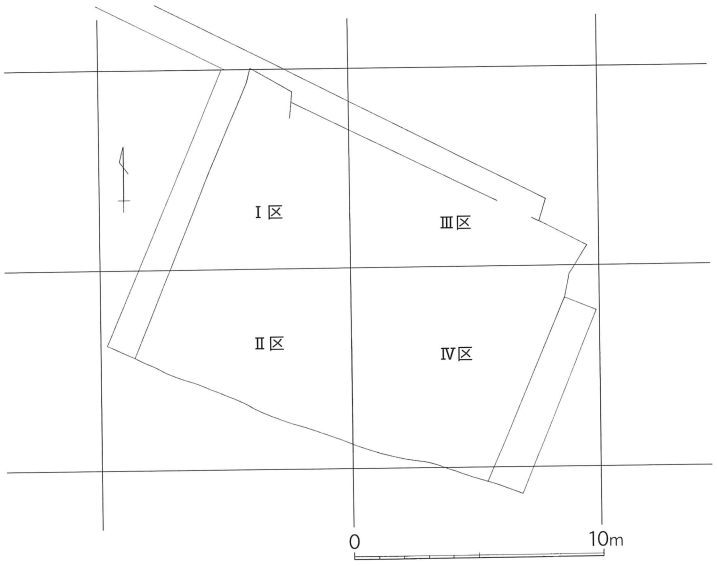
７層　黄褐色土：きめの粗い砂質土

８層　明茶褐色土：黄褐色ブロック、２～３㎝大の小礫、土器片を含む

９層　８層と同じ。

10層　青灰色土：きめのやや粗い砂質土。

11層　青緑灰色土：きめの粗い砂質土。固くしまる。



第39図　調査区位置図（300分の１）

12層　青灰色土：砂質土。

13層　黒灰色土：きめの粗い砂質土。しまりなく、もろい。

14層　暗茶褐色土：きめ細かく粘性強い。

15層　黒青灰色土：きめの細かい砂質土。

16層　黒青灰色土：１５層と同じ。やや粗い砂が混じる。

17層　黒褐色土：きめ細かく粘性強い。

18層　明茶褐色土：きめのやや粗い砂質土。２～３㎝の小石を含む。

西壁土層図（Ｂ－Ｂ’）

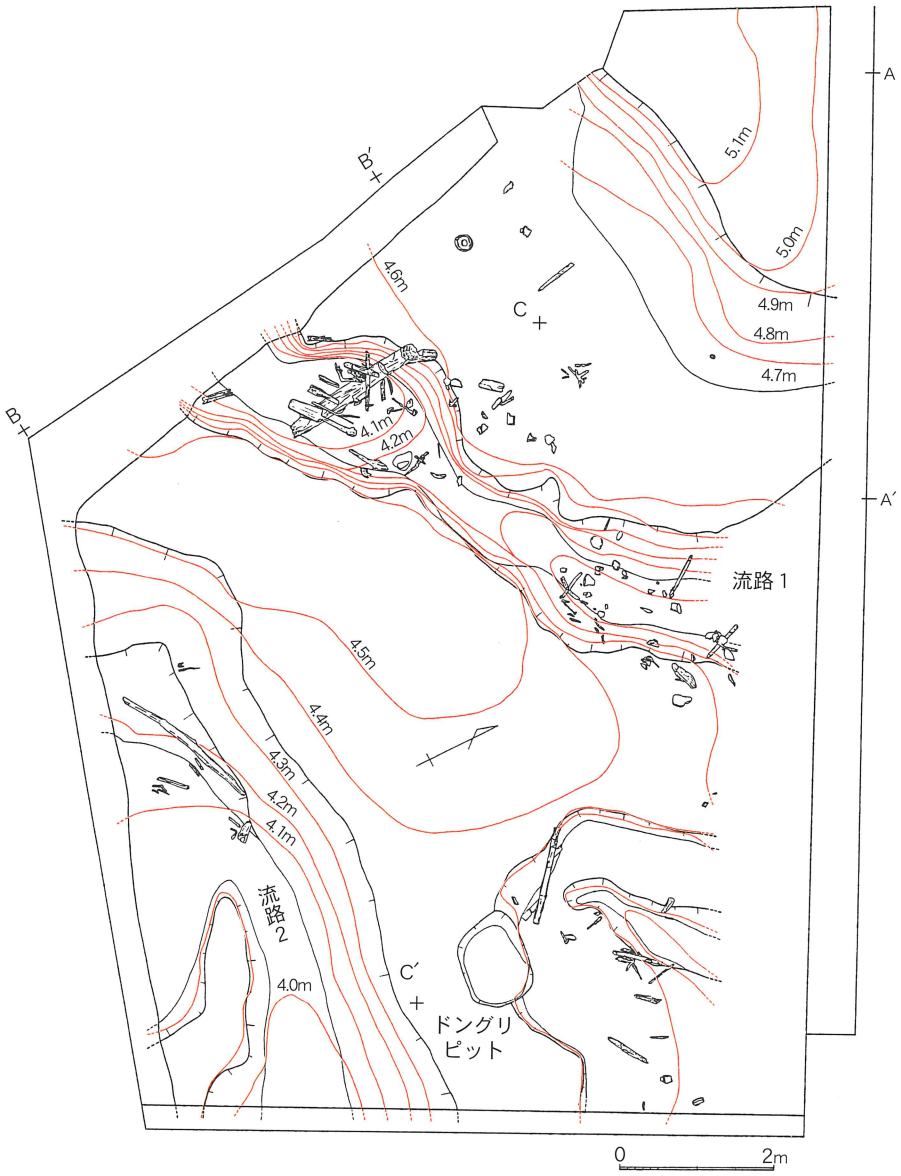
１層　明茶褐色土：きめ細かくよくしまっている。

２層　赤褐色土：やや固い。

３層　明茶褐色土：やや粘質。

４層　暗茶褐色土

５層　黒褐色土：砂混じり。やや粘質。



第40図　Ⅱ区遺構配置図（100分の１）

6 層　赤茶褐色土：5 層より砂質の度合いが強い。

7 層　明黒褐色土：きめの粗い砂質土混じる。中央土層の 1 層に対応。

8 層　茶灰色土：摩滅した土器片と小礫を大量に含む。

9 層　明黒褐色土。

10層　小さな黄褐色ブロック混じりの黒褐色土。やや粘質。

11層　明黄褐色土と茶褐色土の混和土。きめの細かい砂質土。

12層　茶褐色と黄灰色土の混和土：きめの細かい砂質土で、黄灰色の砂質土が混じる。

13層　黒灰色土：きめが細かく粘質強い。

14層　黒灰色土と黄褐色の混和土。

15層　緑灰色土：ややきめの細かい砂質土。

16層　青灰色土：やや粗い砂が混じる。

17層　緑灰明黄褐色土：固くしまった砂質土。

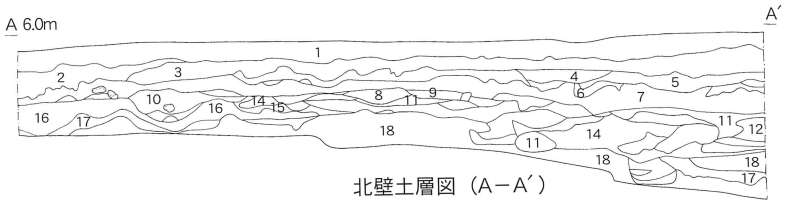
18層　青灰色土：きめの粗い砂質土。しまり無い。

中央ベルト 土層図（C－C’）

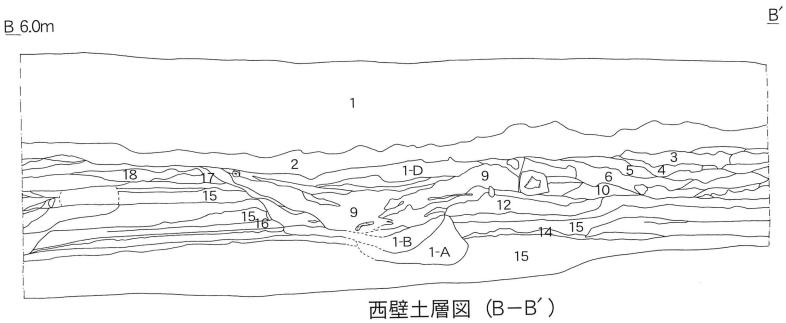
1 層　青灰黒色土：砂質を含まない泥状の粘質土。

2 層　暗青灰色土：1 層に微粒の砂が混じった砂層。

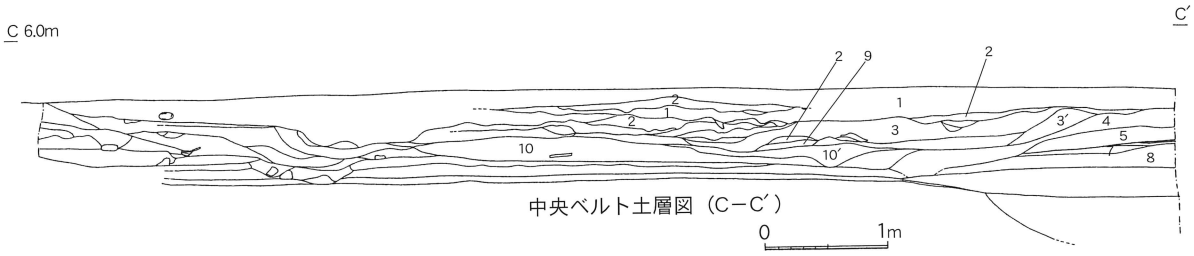
3 層　暗青灰色土：1 層よりやや明るい土層。茶褐色土。



北壁土層図（A－A′）



西壁土層図（B－B′）



中央ベルト土層図（C－C′）

第41図　土層断面図その２（60分の１）

3’層　3層よりさらに砂質。

4層　黄灰色土：砂混じりできめ粗い。

5層　暗灰色土：砂混じり。やや粘質。

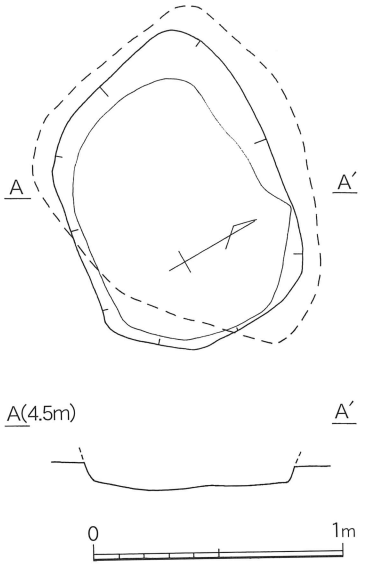
6層　茶褐色土：砂質土と粘質土混じり。木片を含む。

7層　黄褐色土：きめの粗い砂質土。

8層　明茶褐色土：黄褐色ブロック、2～3㎝大の小礫、土器片を含む。

第42図　主要部遺物出土状態

9層　8層と同じ。
10層　青灰色土：きめのやや粗い砂質土。
11層　青緑灰色土：きめの粗い砂質土。固くしまる。
12層　青灰色土：砂質土。
13層　黒灰色土：きめの粗い砂質土。しまりなく、もろい。
14層　暗茶褐色土：きめ細かく粘性強い。
15層　黒青灰色土：きめの細かい砂質土。
16層　黒青灰色土：15層と同じ。やや粗い砂が混じる。
17層　黒褐色土：きめ細かく粘性強い。
18層　明茶褐色土きめのやや粗い砂質土。２～３㎝の小石を含む。



第43図　ドングリピット（30分の１）

３）遺構他（第40，41，42図）

本調査区で検出した遺構は溝状の遺構２とドングリピット１基のみである。第40図には地山上面の等高線と遺構、遺物を表示している。調査時の所見を踏まえ、溝状の遺構は人為的なものではなく自然流路と判断している。

流路１：流路１はⅡ区南西からⅢ区北東に向かって流れており、西壁の土層図に見られるように、第Ⅲ土層以下の土層を切っており、その上面はⅡ層によって覆われている。流路１自体も一回きりのものではなく、少なくとも４以上の流路が複合したしたものである。最古段階のもの（流路１－Ａ）は標高4.15ｍを底面とするもので、幅70～80㎝の不整箱型断面をなす。第40図はこの流路１－Ａ段階の地形を表示している。次の段階に、これを切り込んで上面幅２ｍの浅い皿状の断面をもつ流路（流路１－Ｂ）が形成されており、以後同Ｃ，Ｄと大きさと底面の標高を増しながら皿状の流路が同一地点に形成されていく。Ⅱ層以下の土器包含層を切り込んで形成されている流路Ｂ～Ｄは弥生中期後半～後期で、 流路Ｃはこれ以前のものと推測される。後述するように、流路１から出土する土器は中期後葉～後期前・中葉が主体で、他には古代の土器が極く少量混じる。

流路２：これははⅡ、Ⅳ調査区の南側を西から東方向に流れるもので、岸が立ち上がらず上面形も不定のものである。自然流木が流れに沿った状態で検出されている。

ＳＫ－１（ドングリピット）（第42，43図）Ⅳ区北東部でドングリピット１基を検出した。この掘り込み面は不明で、地山の無遺物砂層に掘り込まれた底部付近がわずかながら残っていた。底面形は不整の楕円形で、短径80㎝、長径120㎝を測る。深さは10㎝ほど残存。ピット内には細かい砂を含む黒灰色の埋土があり、これに多量のドングリ（橡の実）が混じっていた。

４）出土遺物

出土状況

出土遺物は表土層を除き、Ⅱ層以下の各土層に包含された状態で土器片や木材、木製品が出土した。Ⅰ調査区南西側からⅡ調査区の北西側にかけてやや遺物の集中する箇所がある。

流路１－Ａに属す遺物や流木の類は殆ど無く、流路Ｂの上面，もしくは流路Ｃに属すると考えられる木製品や流木、土器片が比較的多く検出された。これらは図示したように流路に沿った状態で出土しており、この流路に流れ込んだものとみて間違いなかろう。

その他にはⅣ調査区のドングリピット付近の浅い溝状部に流木や土器片がややまとまった状態で出土している。これも自然堆積したものであろう。

土器（第44図～第65図）

１，２は弥生中期前半の甕形土器。３、５、６は外面縦刷毛目、内面軽い削り調整の弥生後期中ごろの甕。４，７は後期前葉の甕。８～10は壺形土器で、８は弥生後期前半、９，10は後期前葉。11は外面磨き、内面軽い板撫で調整の小型鉢で、中期末か。12，13は小型の鉢で、後期前葉。14，15は鋤先口縁部を持中期中葉～後葉の高坏。16は半球状の坏部とずんぐりと太い脚部からなる高坏で、後期前半。20は中世の土師甕。21はへら切り離し底部の土師器坏で古代。 以上は層位不明のもの。

22～27はⅠ区３層出土。22はいわゆる袋状口縁壺で、稜のついた形状から後期前葉に比定する。

23は直立口縁壺，24はくの字状口縁甕で両者ともに後期前葉のものである。25，26は中期末の小型鉢。29はⅠ区５層出土の鉢で後期前半。31～41はⅠ区６層出土。31、32、33は後期前葉。33は長頸の壺。34～36、38は後期中頃の甕形土器。37は中期後半の高坏。

42～47はⅡ区黒土層～６層出土土器。43は内傾する頸部からソロバン球状の胴部に続く箇所に３状の浅い沈線（凹線？）を巡らし、その下部にも崩れた長方形状の文様を施す小型精製土器である。縄文晩期～弥生早期の東北系の土器か？44～47は外面に磨き調整が見られ、中期に比定される。48～81はⅢ区４層出土の土器である。48～49は中期前葉の下城式の甕で、50は前期末。52～56は跳ね上り口縁端部を持つ甕で、54には胴部との境に１条の断面三角突帯が巡る。これらは中期前葉に比定されよう。58、59、61、63は後期中頃の甕。60は不安定なレンズ底が特徴的で、後期前葉から中頃の土器。62は外面、磨き調整の壺で平行沈線と連続三角文沈線が施されている。弥生前期のものである。64は中期前葉の肥厚口縁壺。65、66は中期中葉から後半の鋤先口縁壺。67は肥厚口縁部の外面に１条の連続三角文を施したを後期中葉後半に属す。68は朝顔状に開く口縁部と肩の張る球状胴部を持つ壺で、内外面は磨き調整。中期の中葉～後葉のものか。

70～75は鉢形土器で、後期前葉～中葉のもの。81はおそらく中期前葉に位置づけられる蓋。82，83はⅢ区６層出土で、後期前半に想定。84～107は水路出土品。中期後葉の鋤先口縁壺(84)や長頸壺(94)、後期前葉～中葉古段階の鉢形土器(85)　後期前半の甕(86)、中期前葉の下城甕および跳ね上り口縁甕(102～107)、古代の坏(87、98)等がある。99は白磁で、12世紀のもの、100は緑釉陶器で８世紀後半のものである。

108～145は調査区周囲に設定した、排水用溝の掘下げ時に出土したものである。108は弥生後期前葉～中葉の高坏。112は12世紀の土器。113～116は回転ヘラ切り離し底部を持つ古代の坏で９～10世紀に比定される。120～122は内面に布目、外面に格子叩のある古代瓦。124は弥生前期末～中期初頭の甕。125～127は弥生後期前葉の壺。128は口縁外面に凹線文を巡らした瀬戸内系の土器で、中期末ないし後期初頭のものか。130～132、137～141は弥生中期の甕。136は縄文後期の深鉢。

142は弥生中期後半の鋤先口縁壺。146～161は北東壁出土品。146、147、149は弥生中期後半。148、150、161は後期前葉の甕。151～153は弥生後期後半か。156、158は中期末もしくは後期初頭の高坏。162～164は西壁出土土器。後期中頃か。169は中央ベルト出土の弥生時代後期の磨製石鏃。170～177は試掘トレンチ出土品。170は縄文後期、176は古代の坏。178～182は調査区各所から出土したもので、瀬戸内系の大型器台の破片である。183は木の葉状の線刻を持つ大型土器（？）の破片。201～203は表面採集の銅銭で、201は天禧通寶、202は寛永通寶、203は不明銭である。

205は中世、おそらく16世紀の蝋燭立て用土製品。206、207は16世紀の京都系土師器。209、213、214は平安時代（９世紀）の内黒土師器碗。208、217、218は土師小皿で、14世紀代のものか。219は輸入陶磁器。

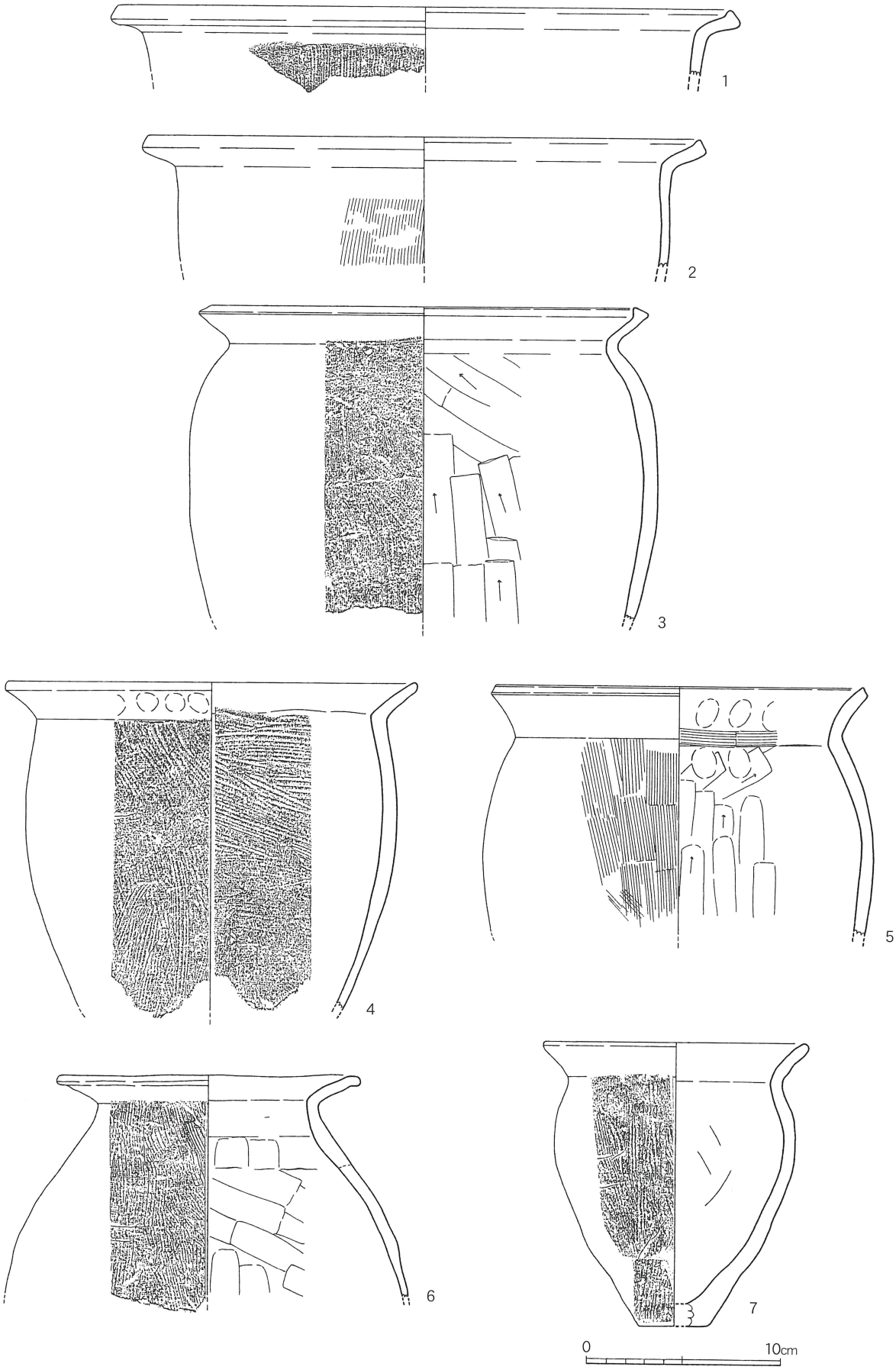
木器（第66図～第70図）

流木状の木材および木製品が出土している。加工痕跡のあるものや木製品とみなすことのできるものは、数は多くない。未加工の木材はかなりの点数出土している。

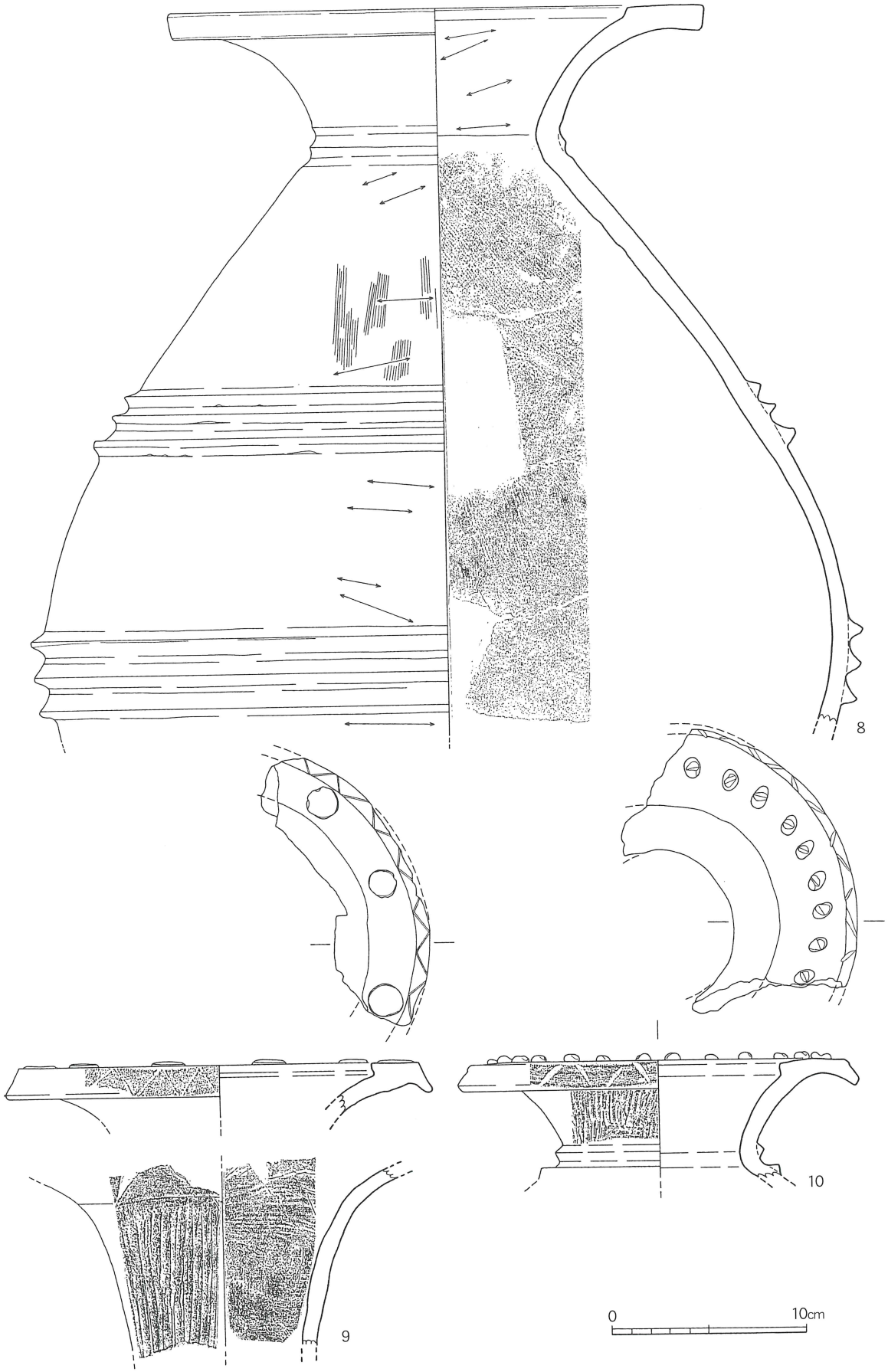
221は朱塗りの木製品である。流路１（第42図No.221）で出土した。まるで荒縄を三本束ねて、ブーメラン状に屈曲させたような形状で、一方の端部は一段高く方形に成形され、裏側まで貫通した釘孔のような小孔が穿たれている。その外端は出っ張りを設け、他の部材のほぞ等に挿入できるようになっている。もう一方の端にも方形の段部を設け、その先はやはり、他の部材と組み合わされるように拵えている。全面に鮮やか朱塗りが施されている。本製品と同様のものを寡聞にして聞かず、用途は不明といわざるを得ないが、朱塗りといい、各組み合わせ部品からなる製品の一部と想定されることから、家具もしくは祭祀品の可能性を指摘するに留めたい。なお、厳密な分析は行っていないが、朱色は水銀朱ではなく、ベンガラを用いたものと考えている。流路１からは弥生中期後葉～後期中葉の土器が出土しており、放射性炭素年代測定の結果（第９章）を勘案すれば中期後半に締り込むことができよう。

222はスコップ状の鋤である。230はⅣ区北壁17層あたりから出土した二股の茄子状鋤先で、一部欠損しているが、丁寧なつくりのものである。231と232は曲げ物で、232には墨書（のぎへん＋□）がある。

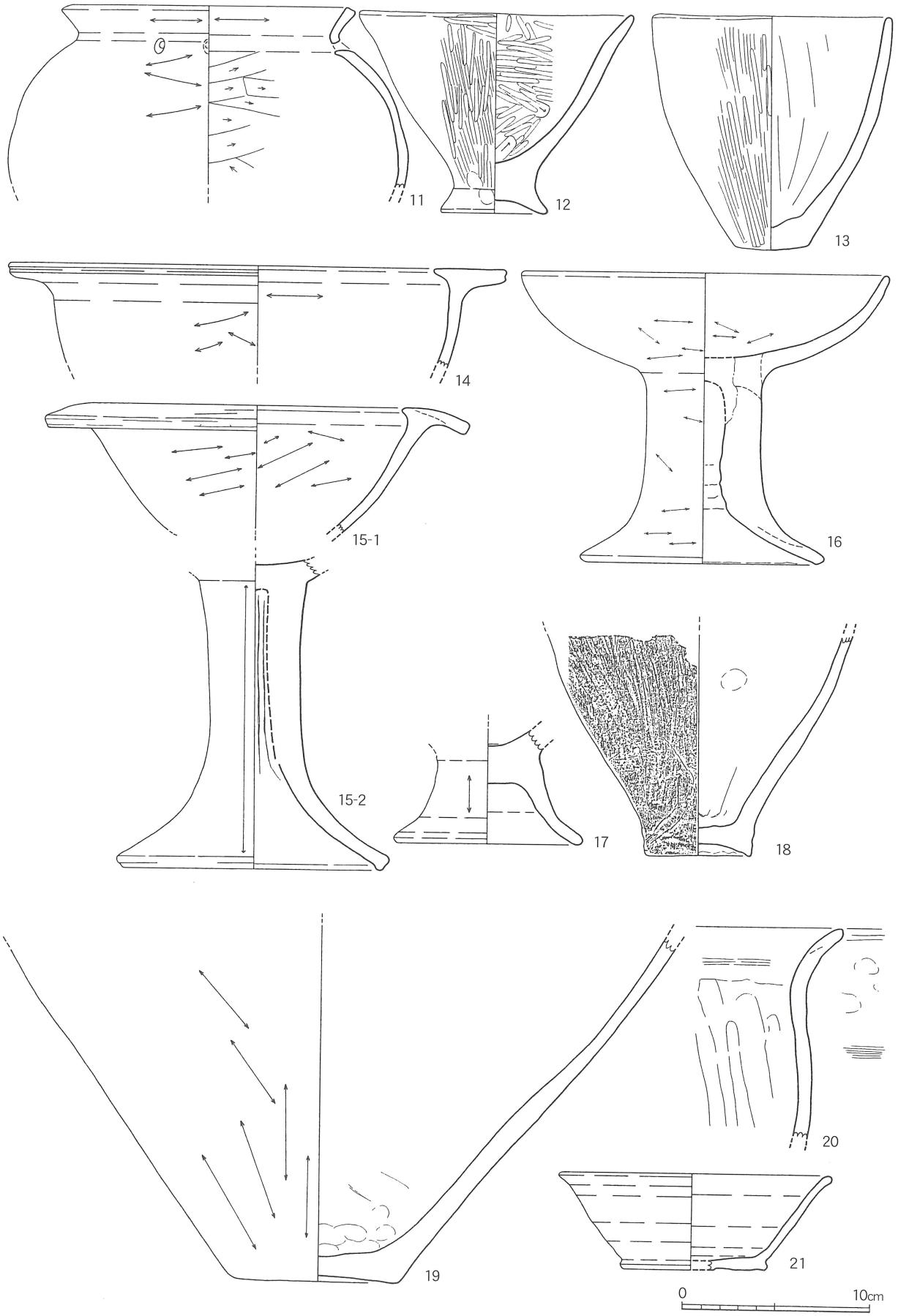
他に加工痕跡のある杭状のものや用途不明の木材が出土している（223～228）。



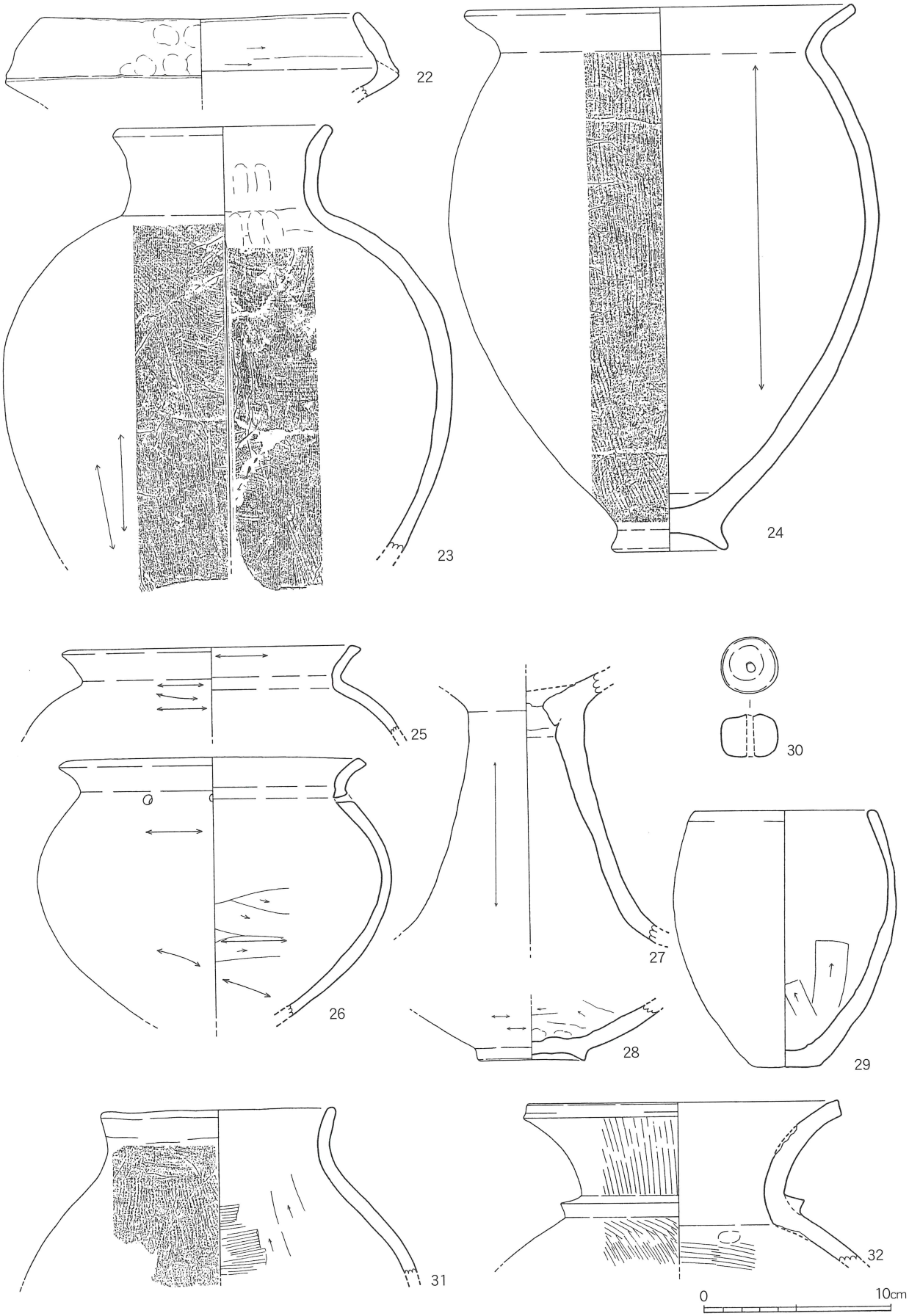
第44図　出土遺物（1）（3分の1）



第45図　出土遺物（２）（３分の１）

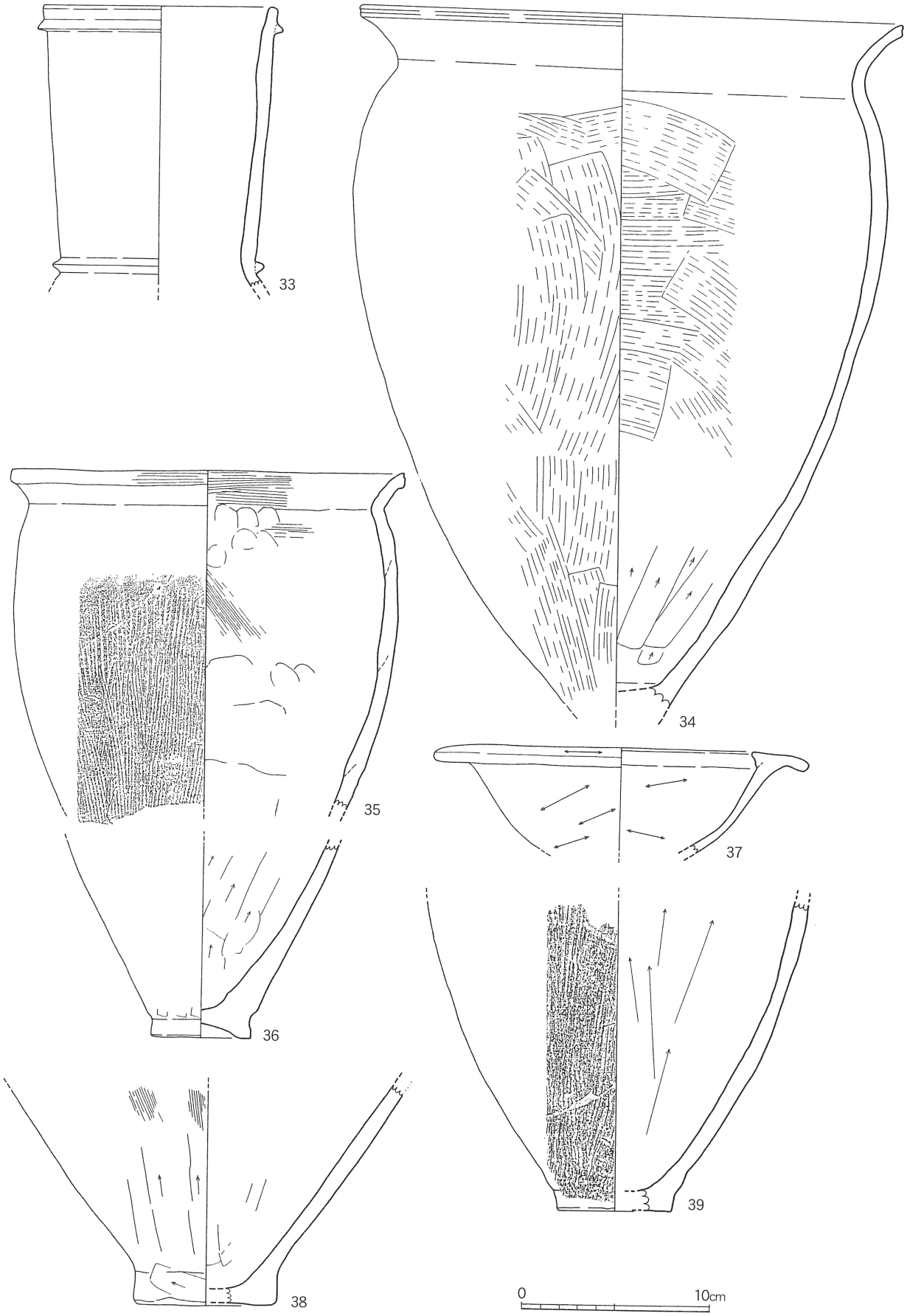


第46図　出土遺物（３）（３分の１）



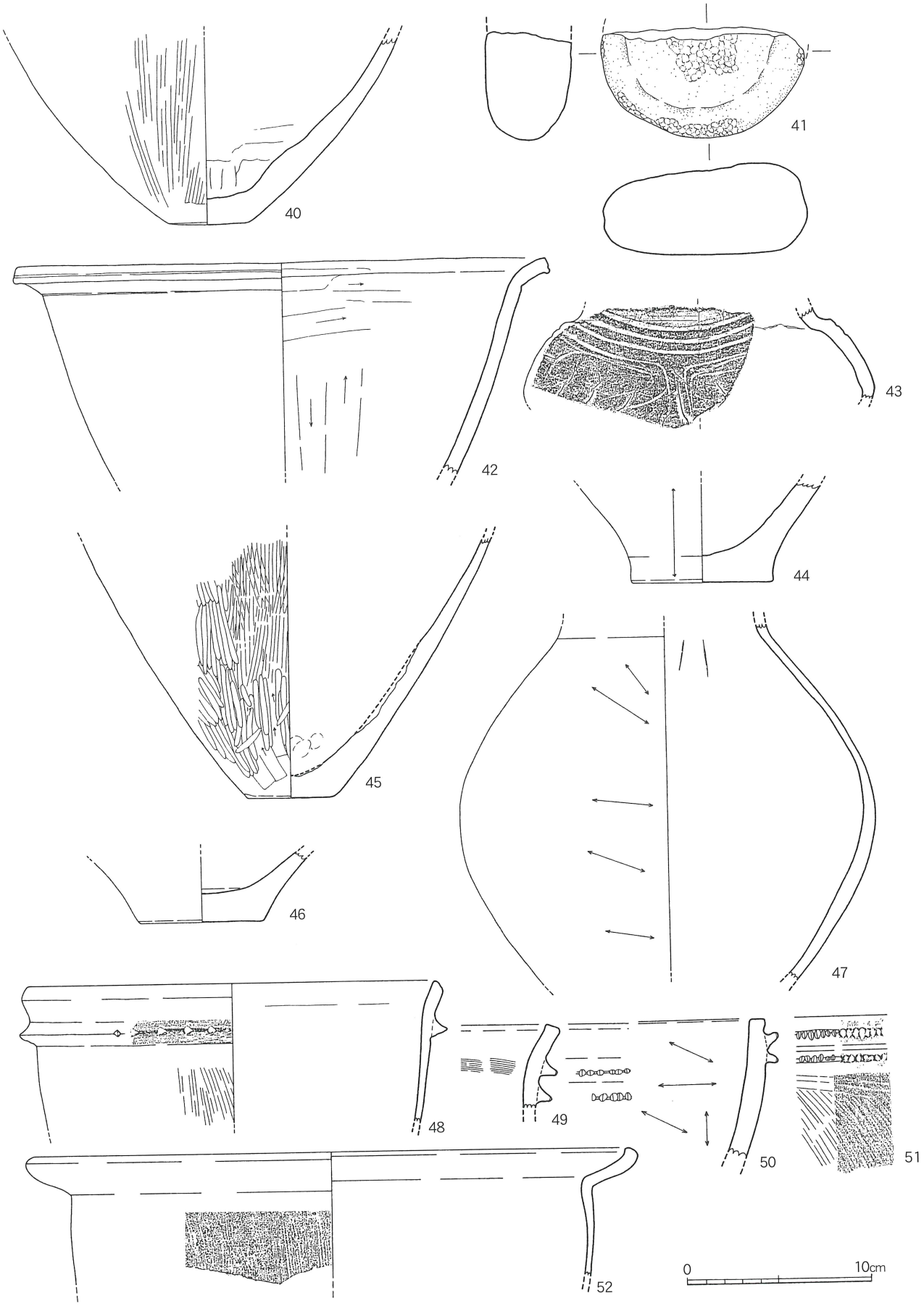
22～32　１区出土

第47図　出土遺物（４）（３分の１）



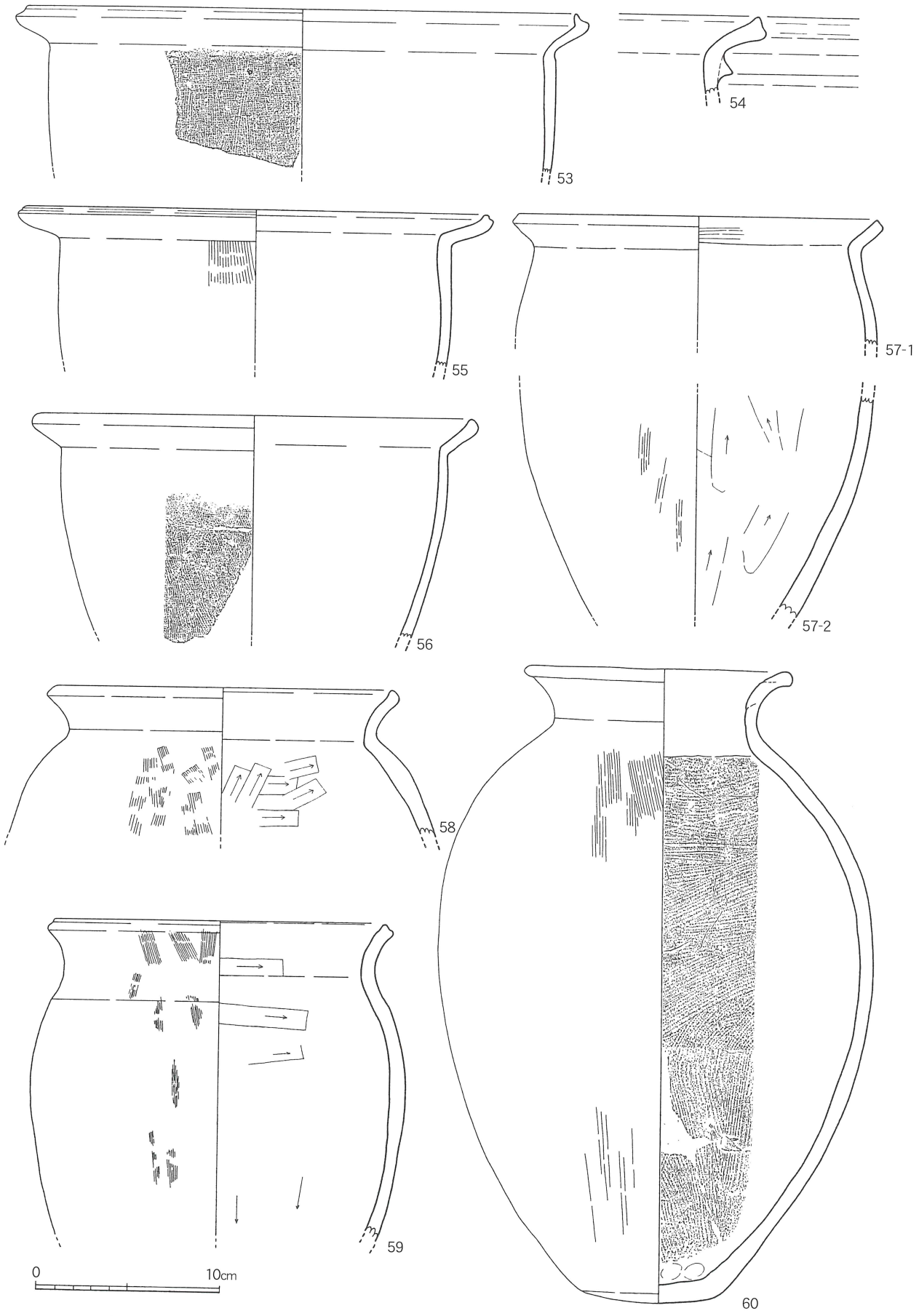
33～39　１区出土

第48図　出土遺物（５）（３分の１）



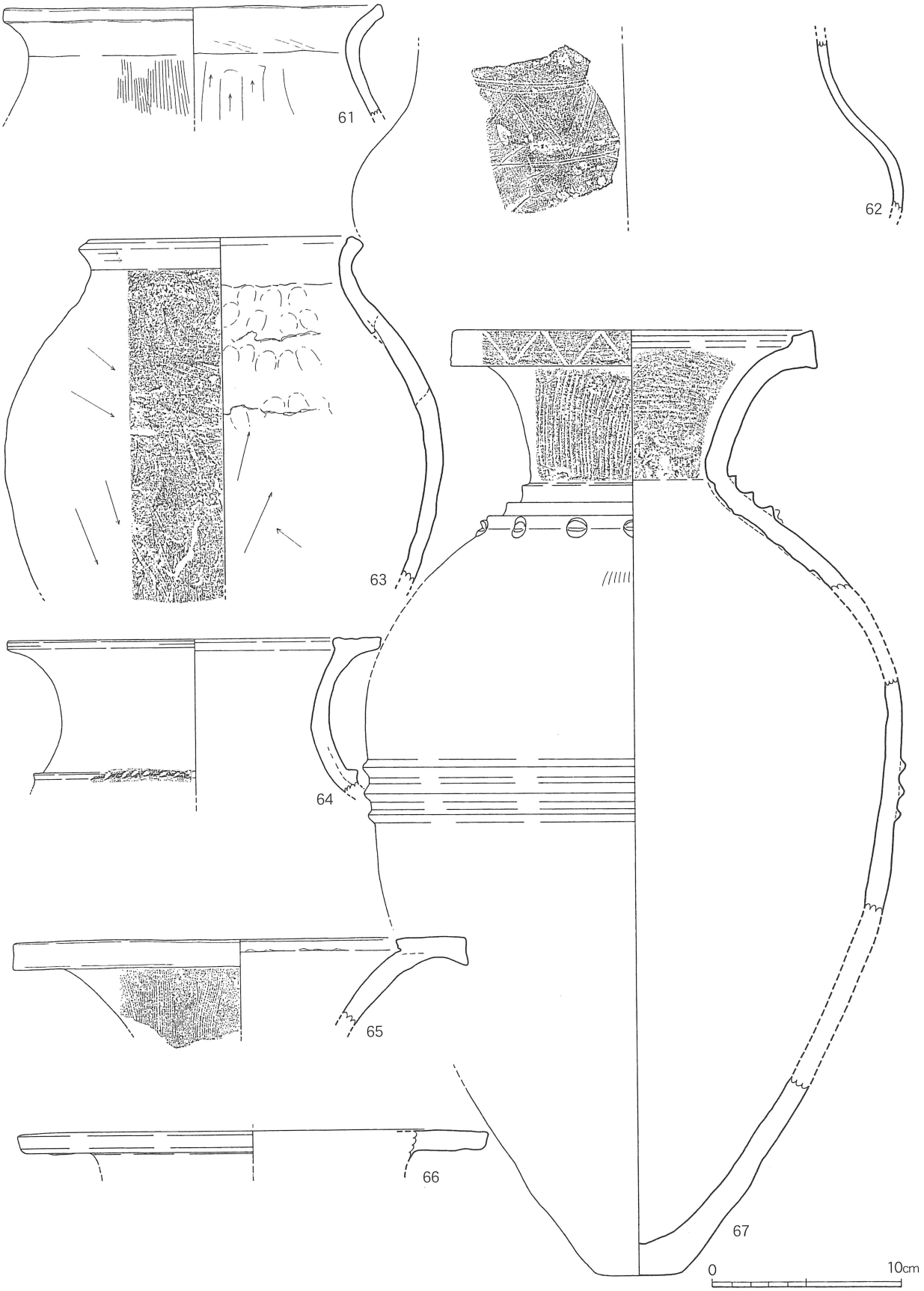
40、41　1区
42～47　2区
48～52　3区

第49図　出土遺物（6）（3分の1）

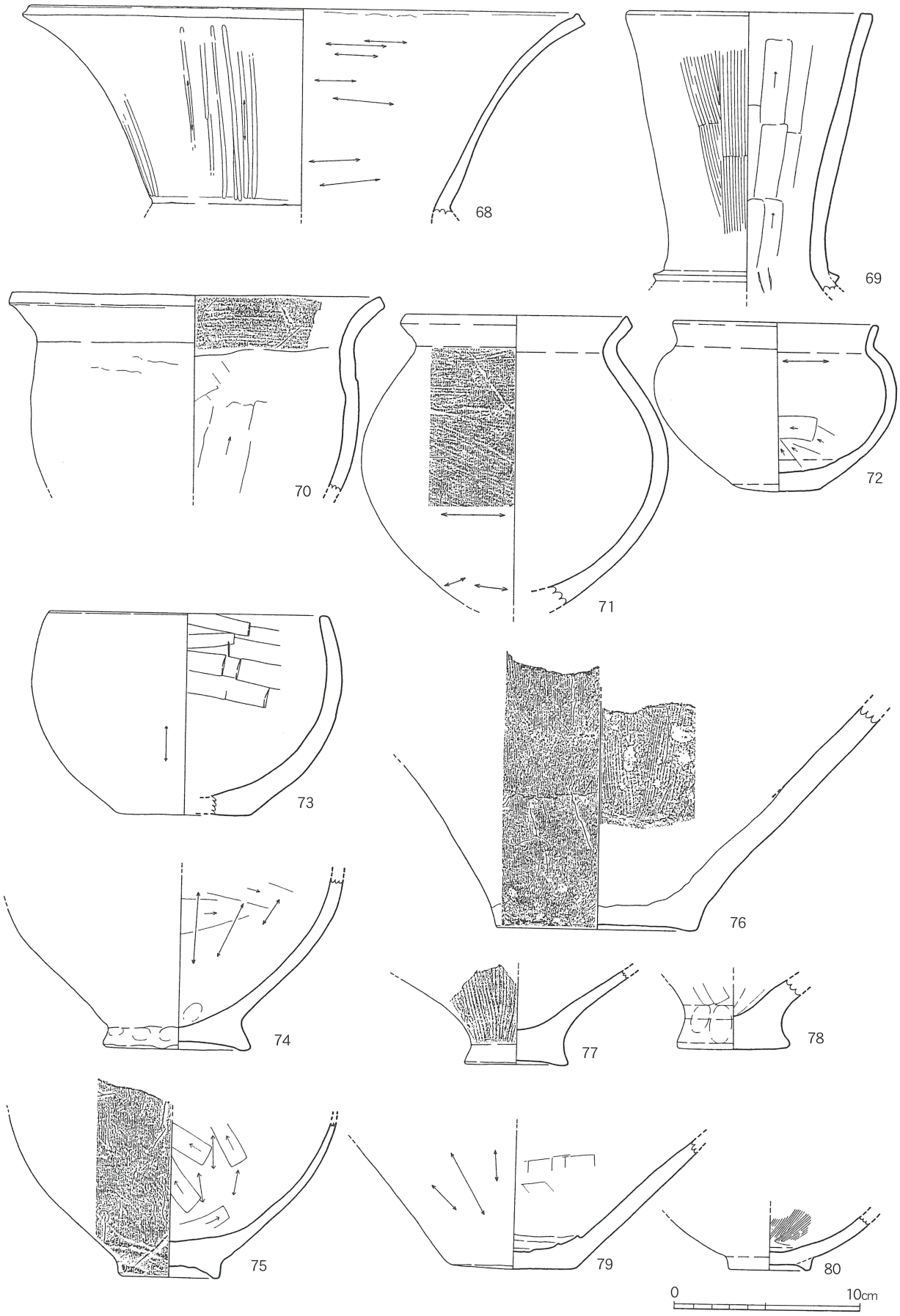


53～60　３区第４層

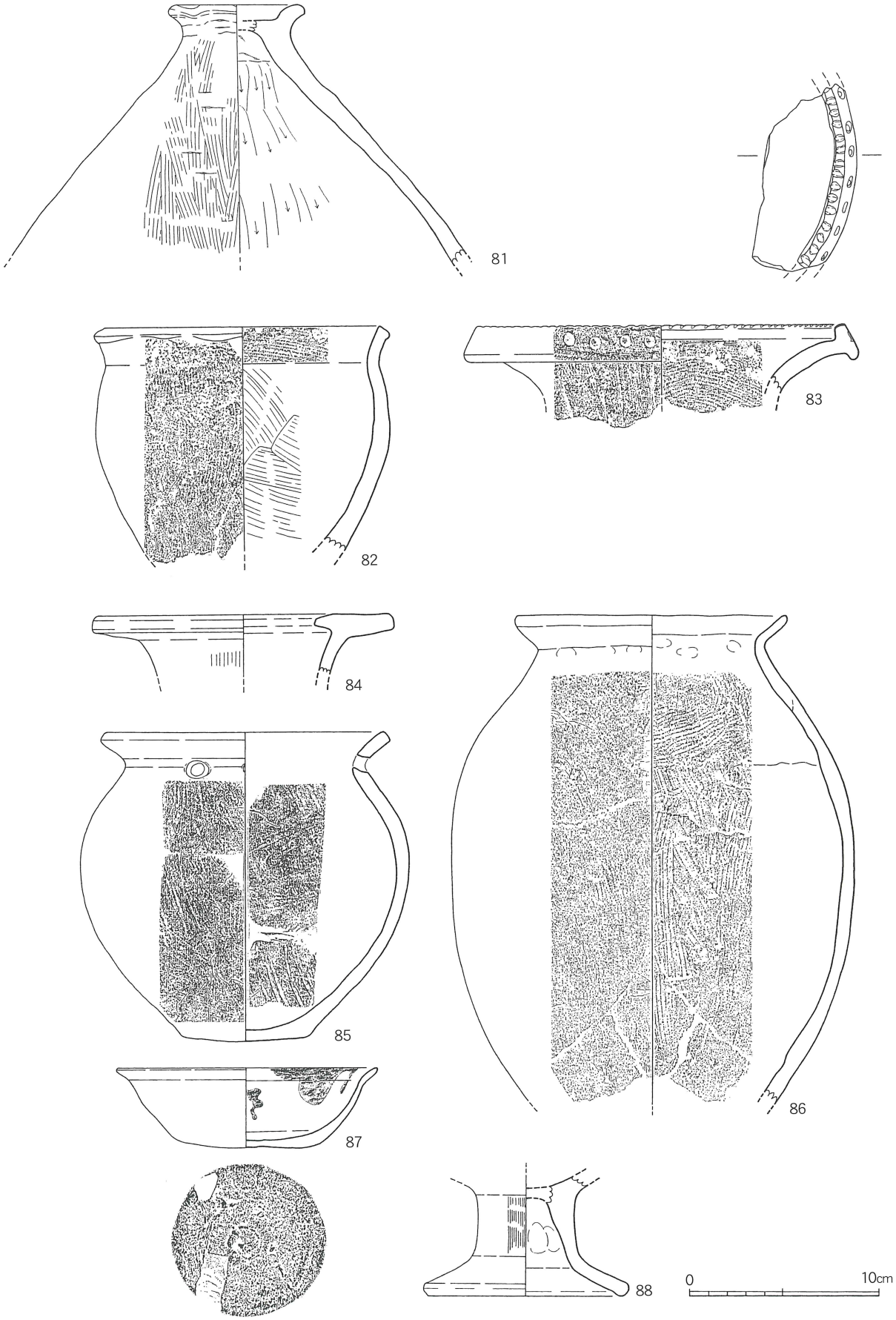
第50図　出土遺物（７）（３分の１）



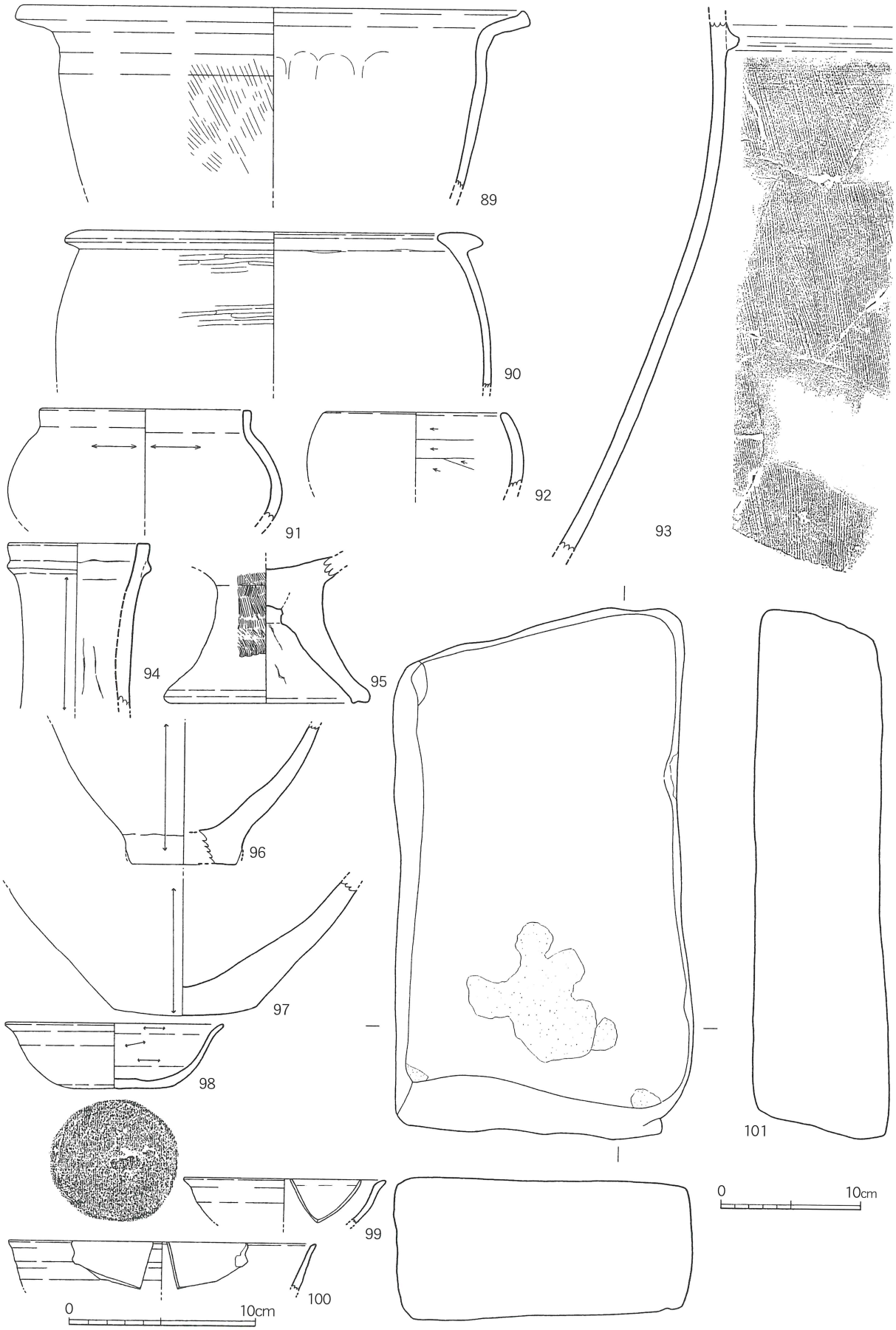
第51図　２次　３層、４層出土遺物（３分の１）



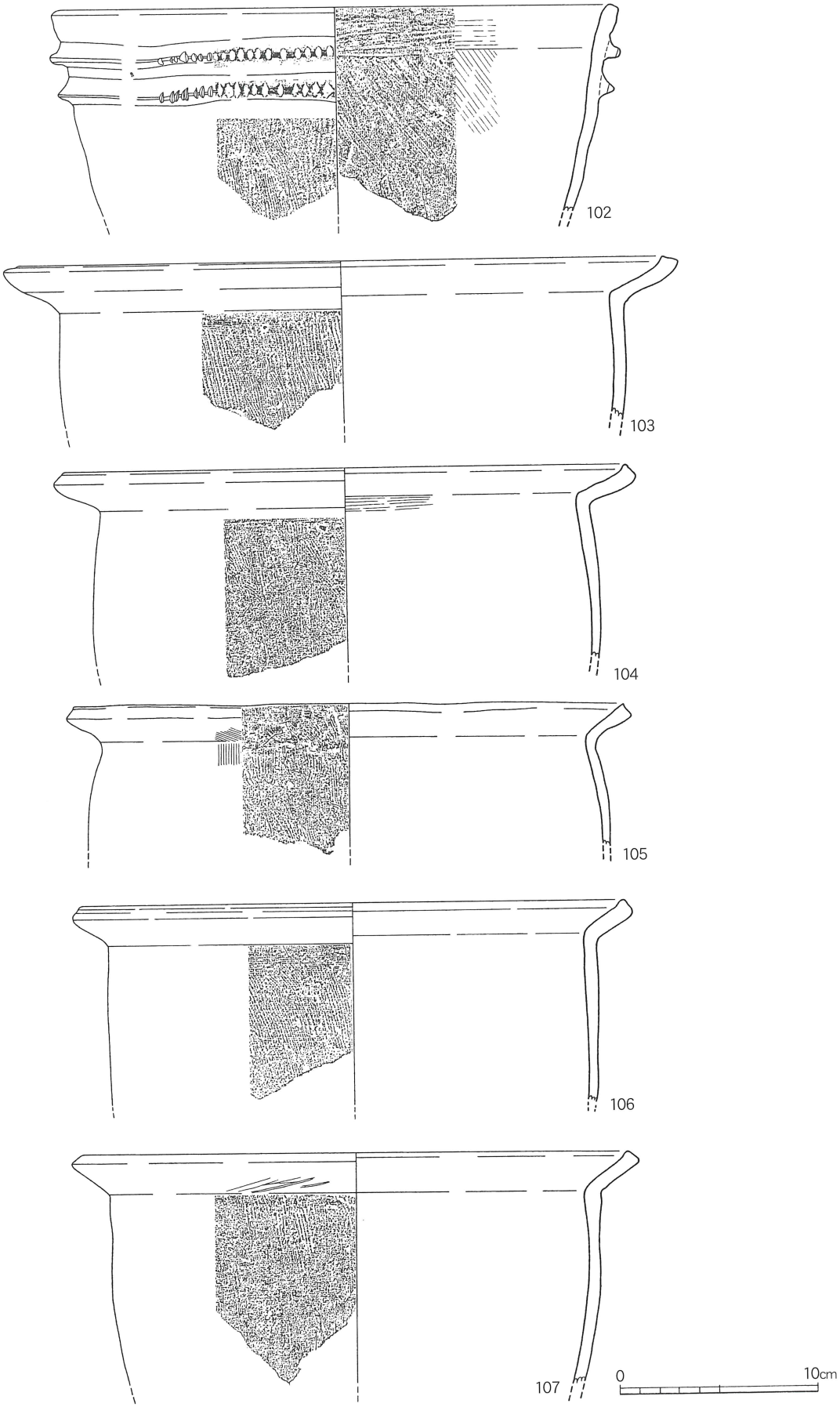
第52図　２次出土遺物（３分の１）



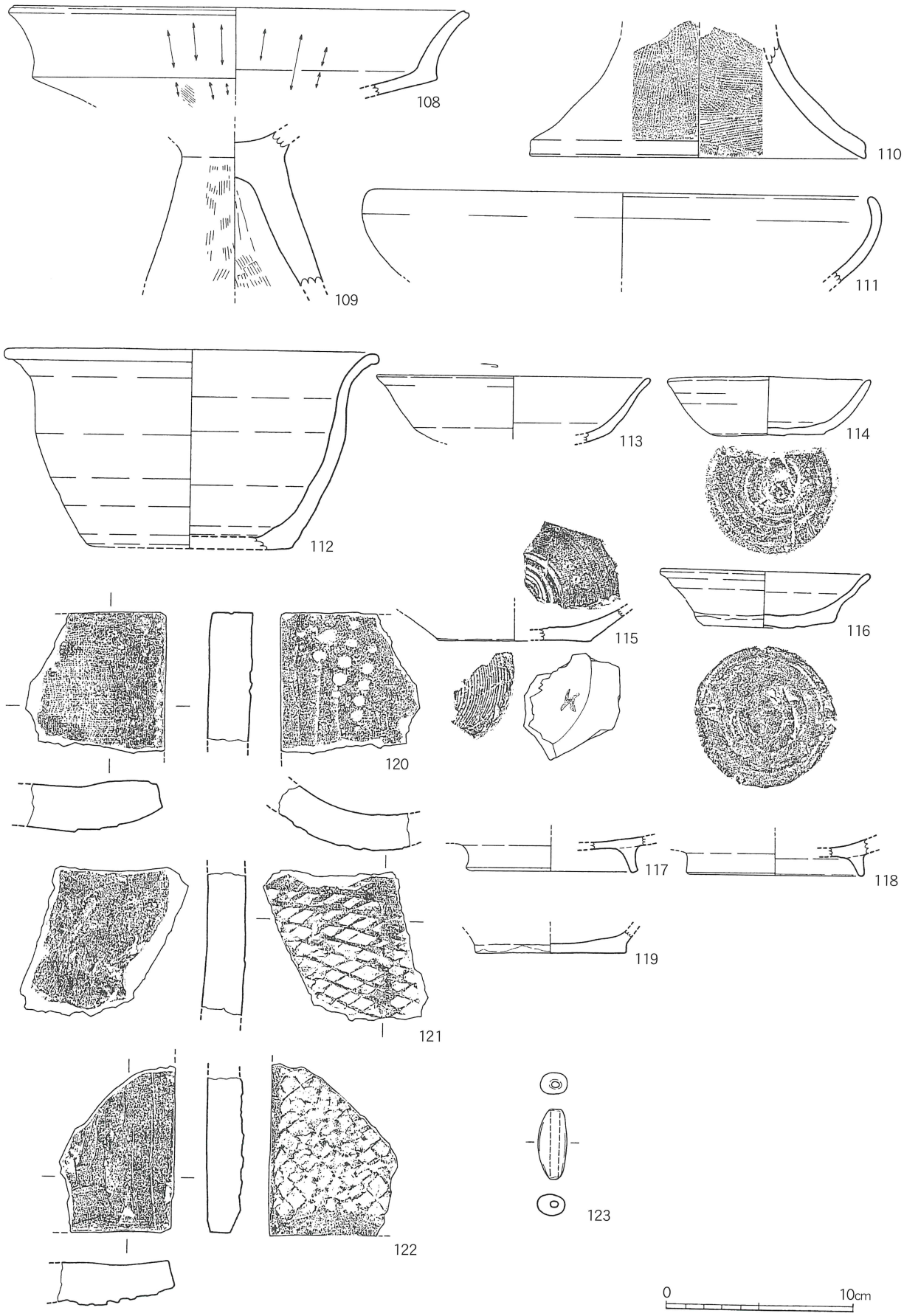
第53図　２次出土遺物（３分の１）



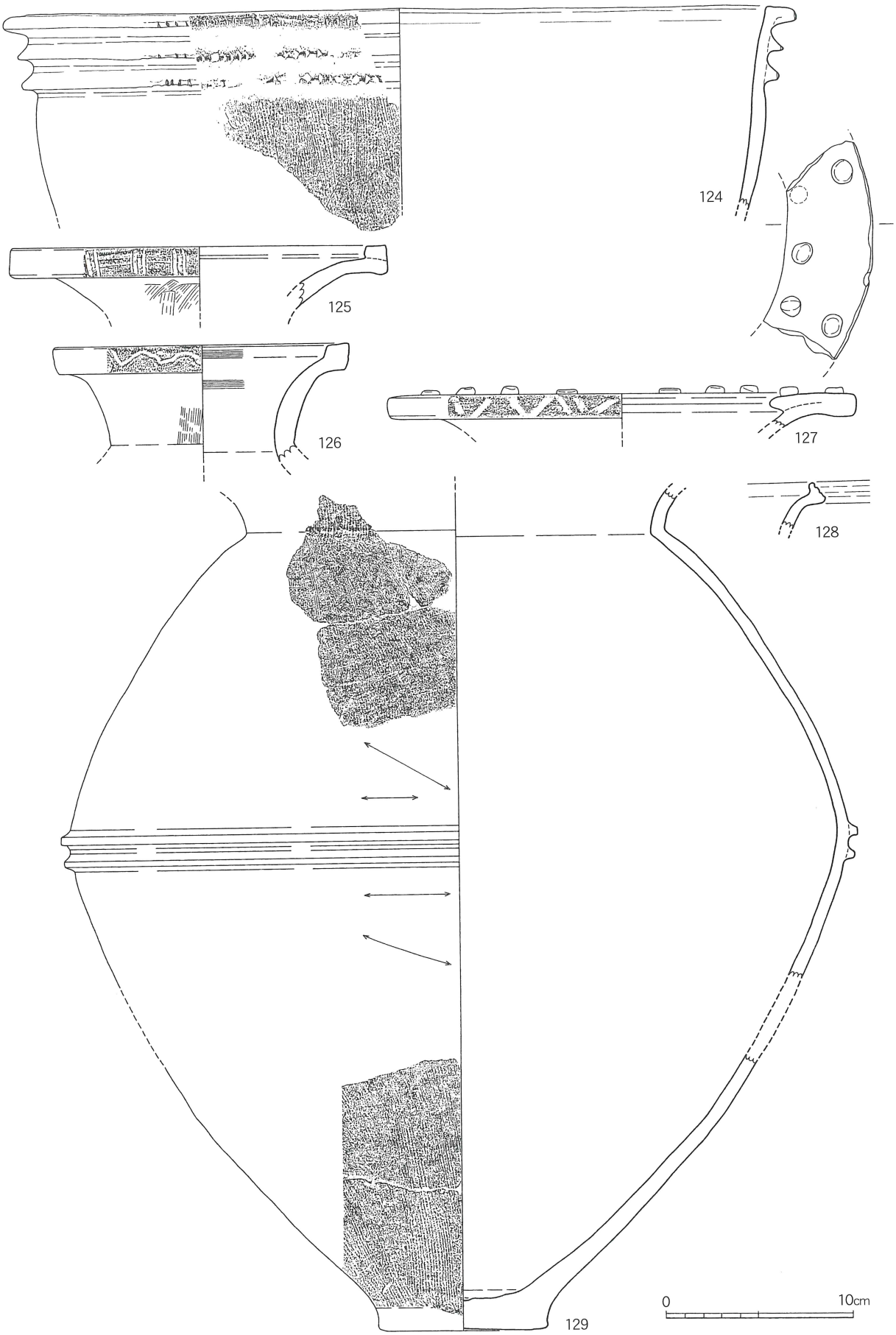
第54図　２次水路出土遺物（３分の１）（４分の１）



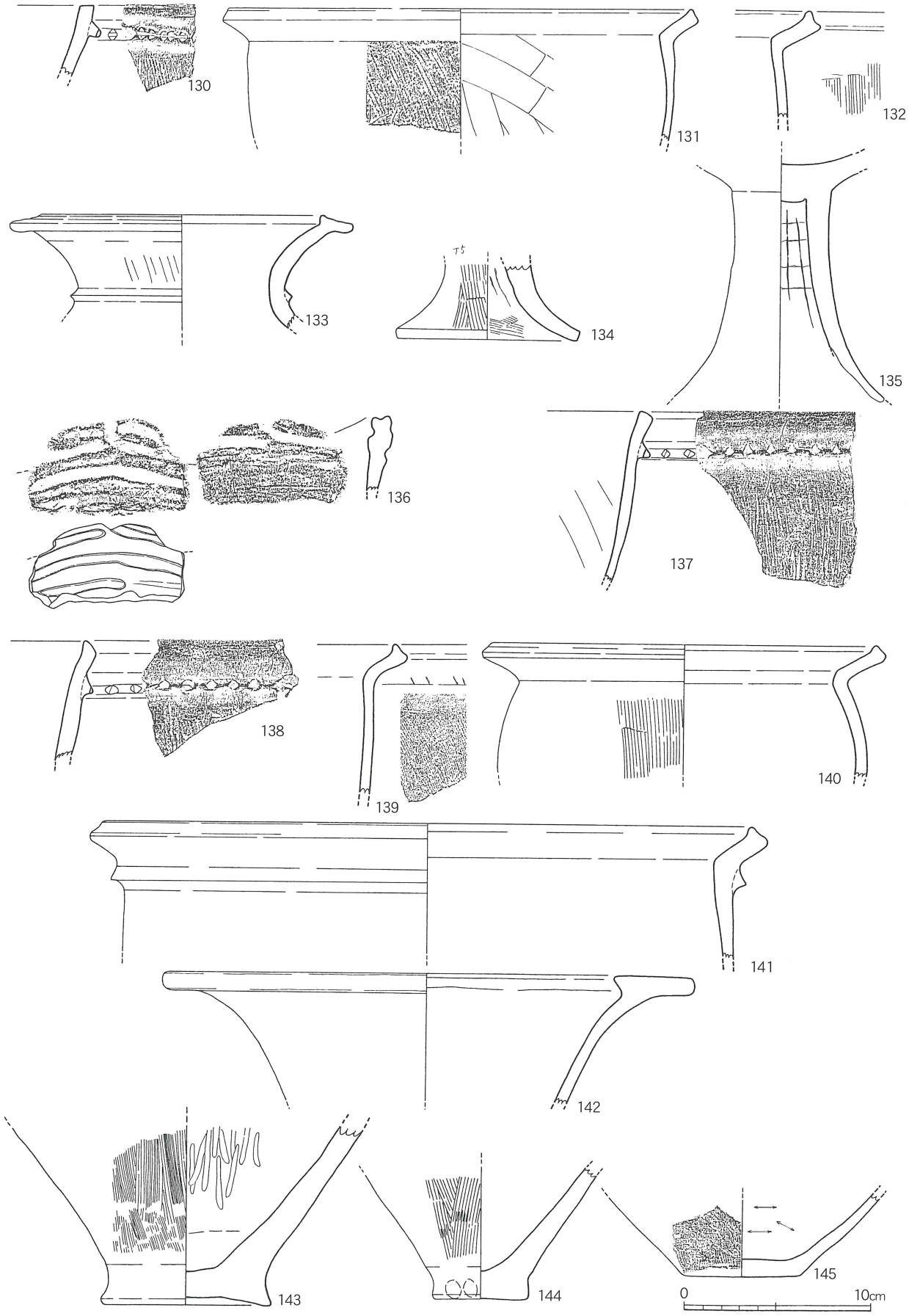
第55図　２次水路出土遺物（３分の１）



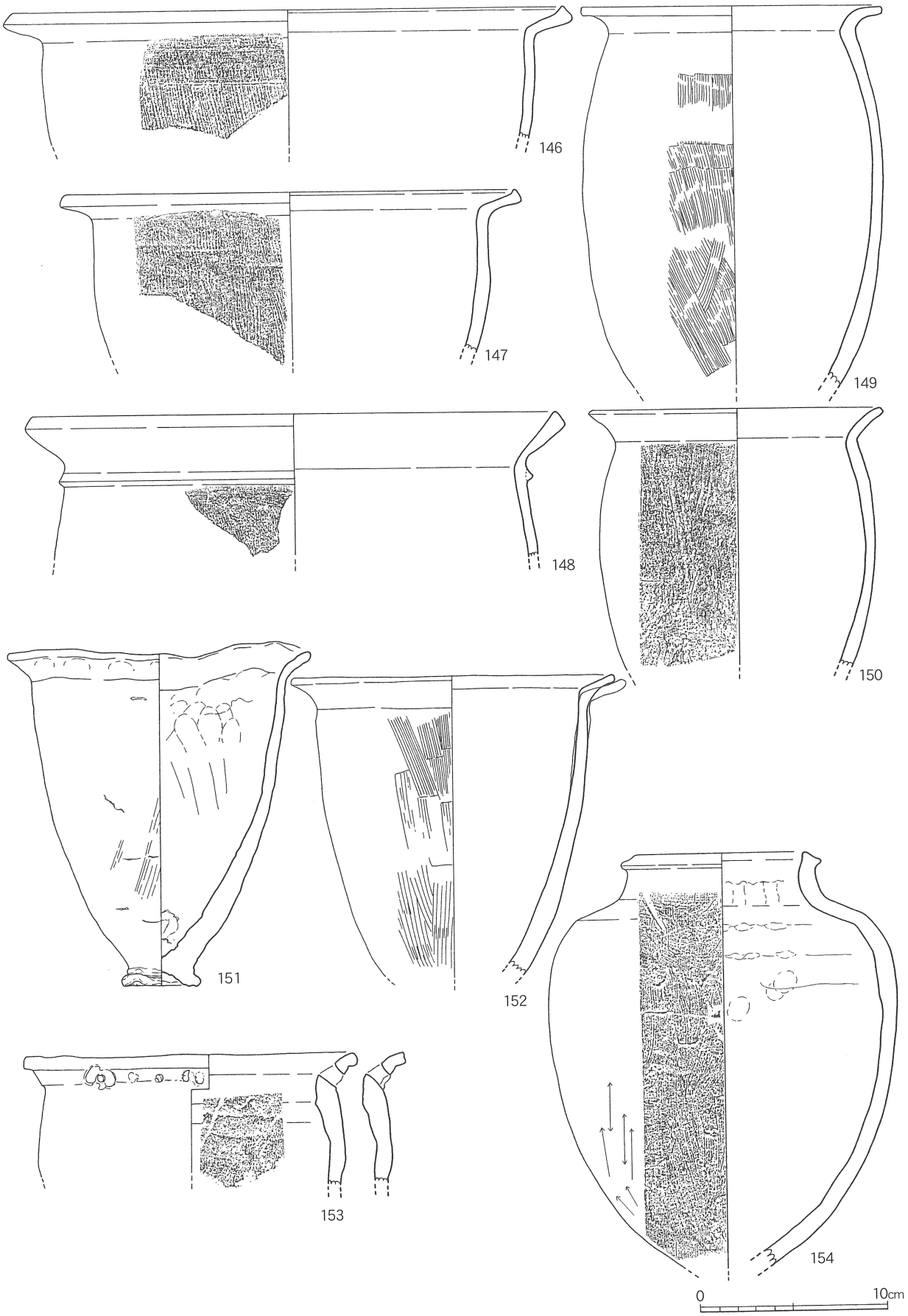
第56図　２次溝上層・黒土層出土遺物（３分の１）



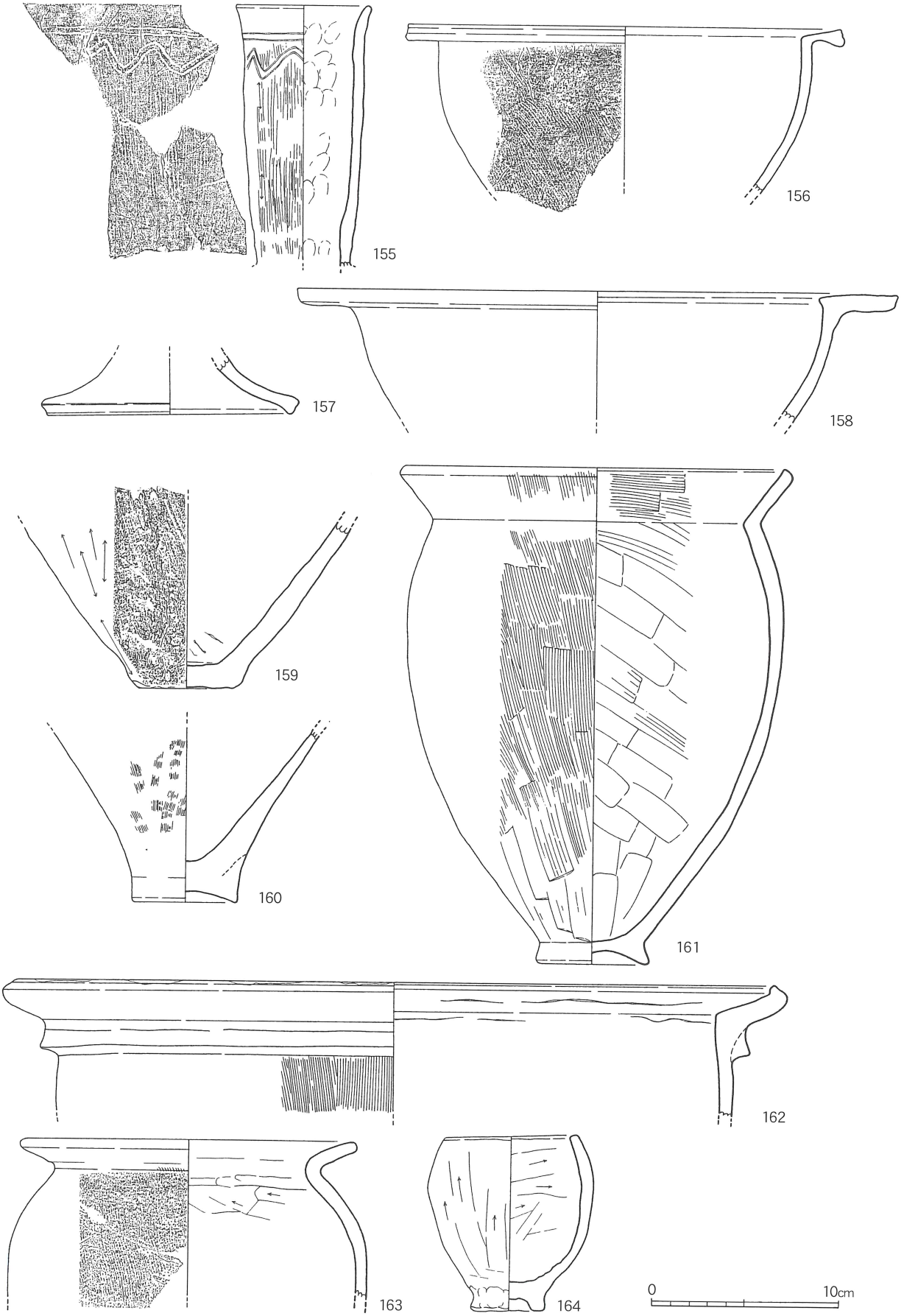
第57図　溝上面黒色土　出土遺物（３分の１）



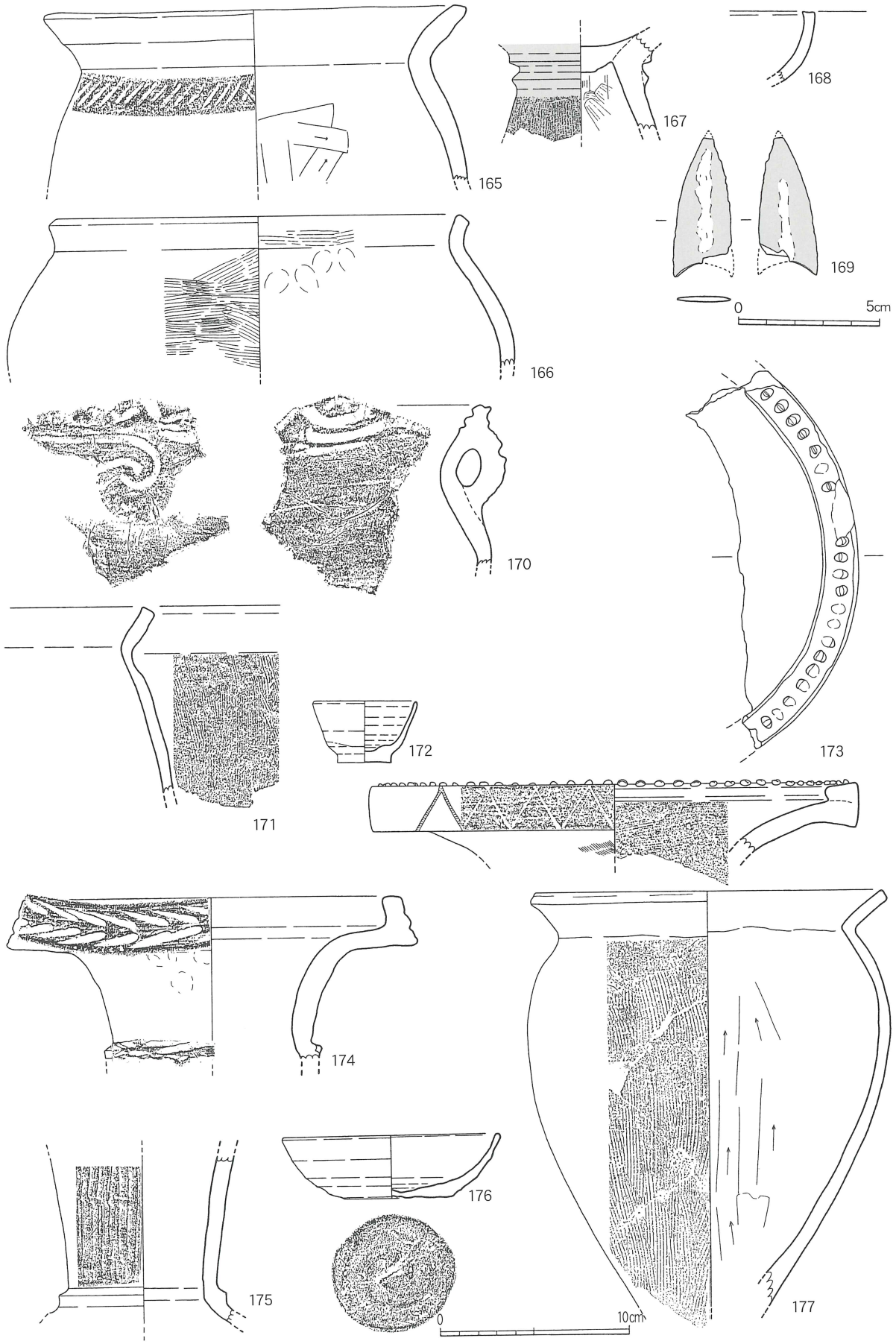
第58図　２次 SD-1･2･3　出土遺物（　分の１）



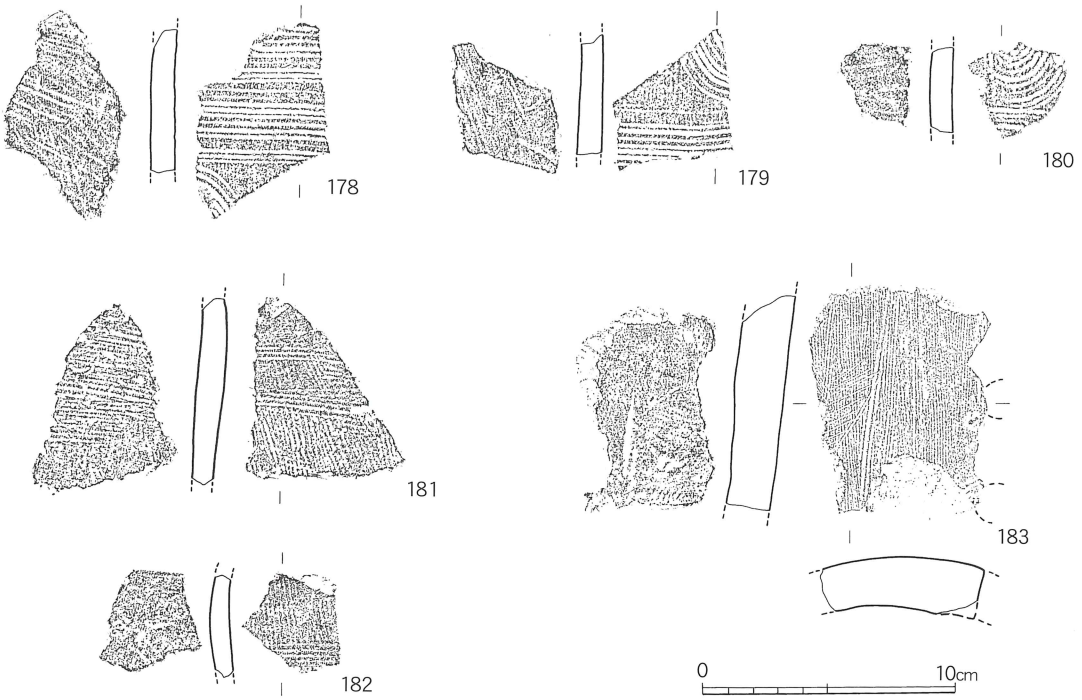
第59図　２次北東壁出土遺物（３分の１）



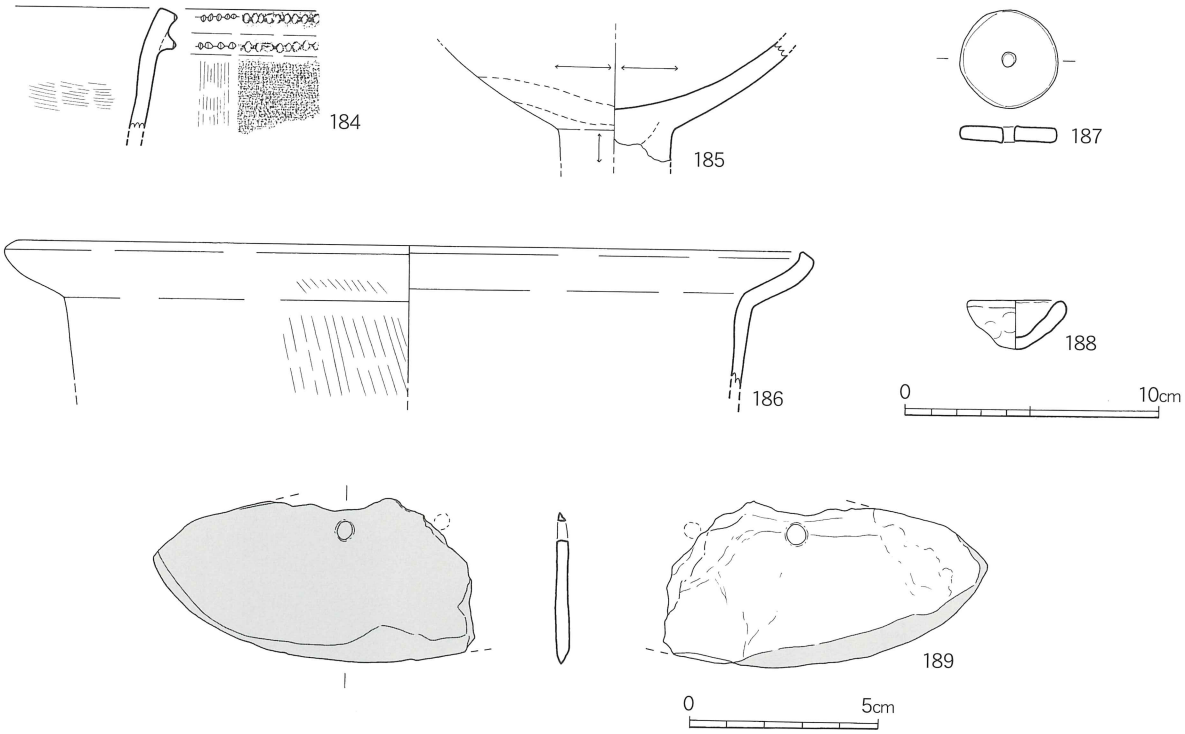
第60図　２次出土遺物（３分の１）



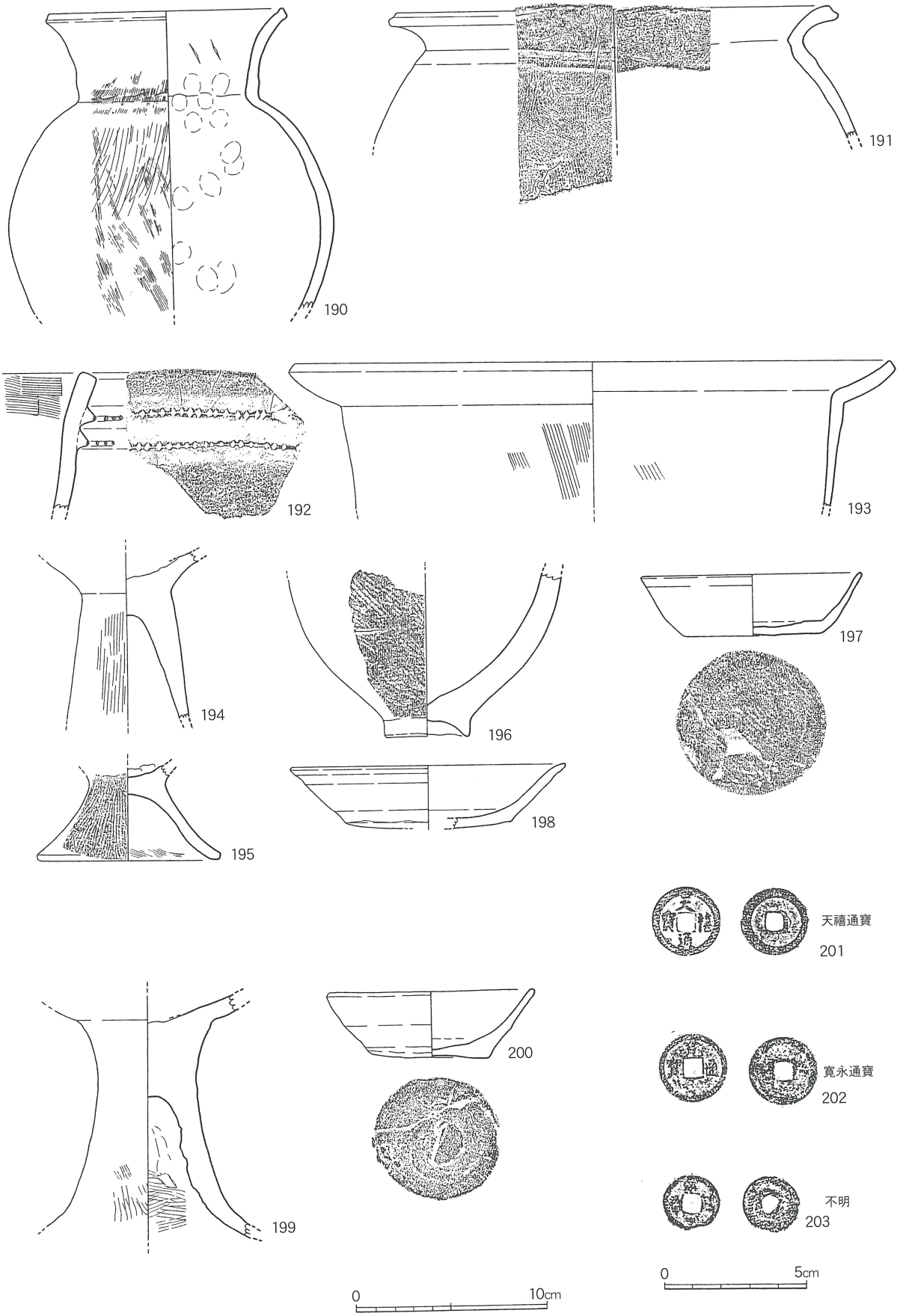
第61図　出土遺物（３分の１）



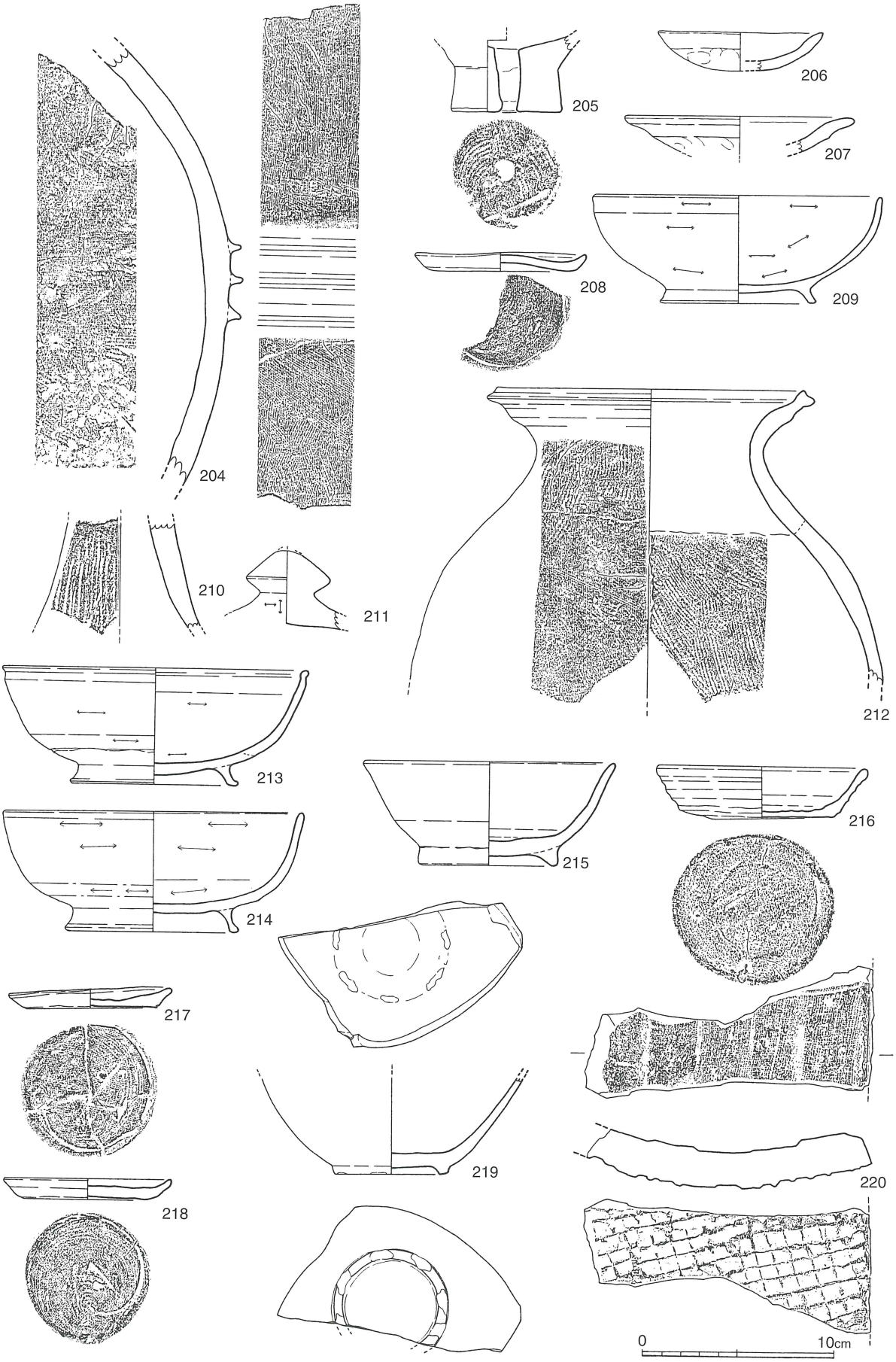
第62図　２次　出土遺物（３分の１）



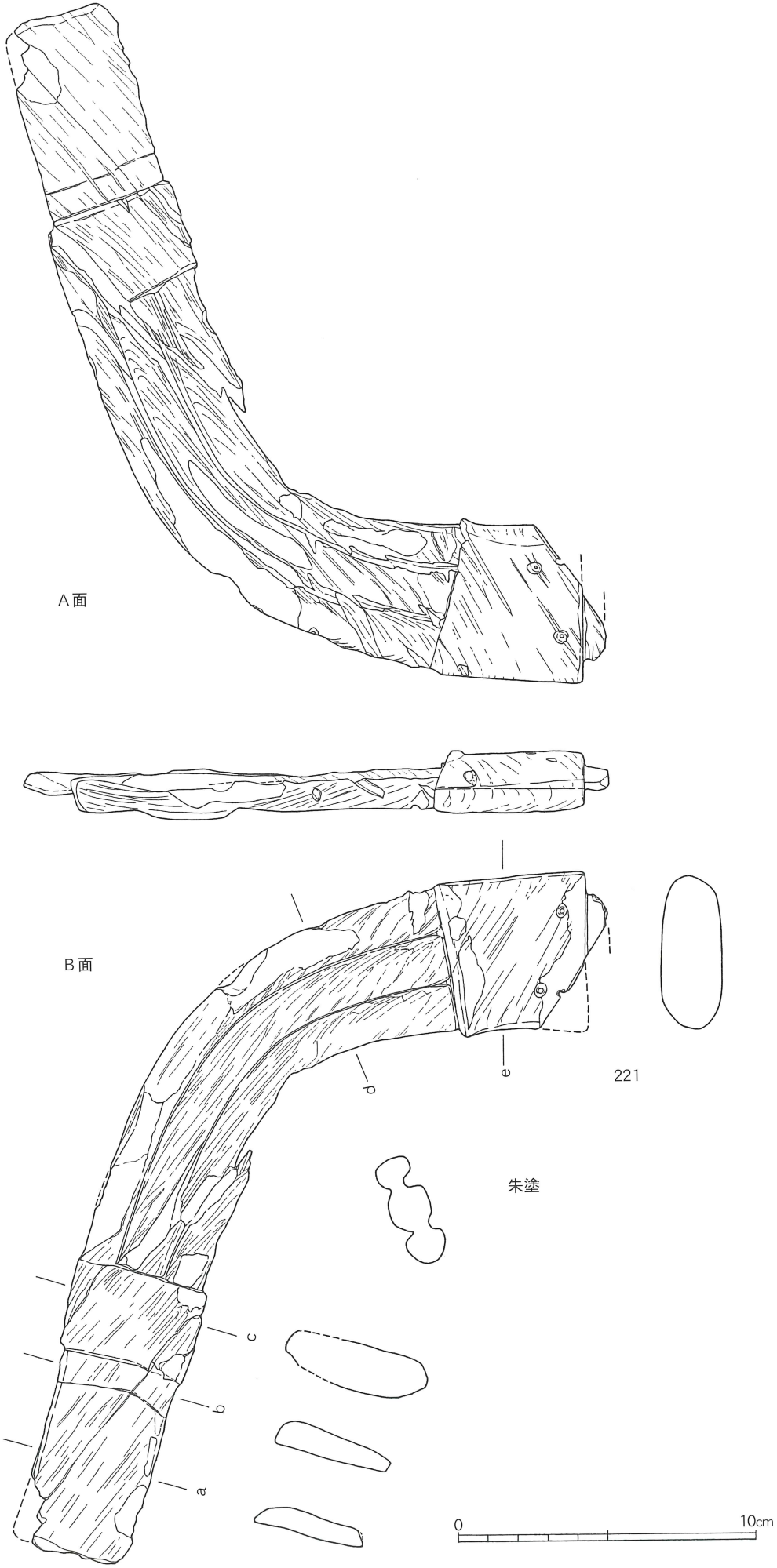
第63図　２次　出土遺物（３分の１）（２分の１）



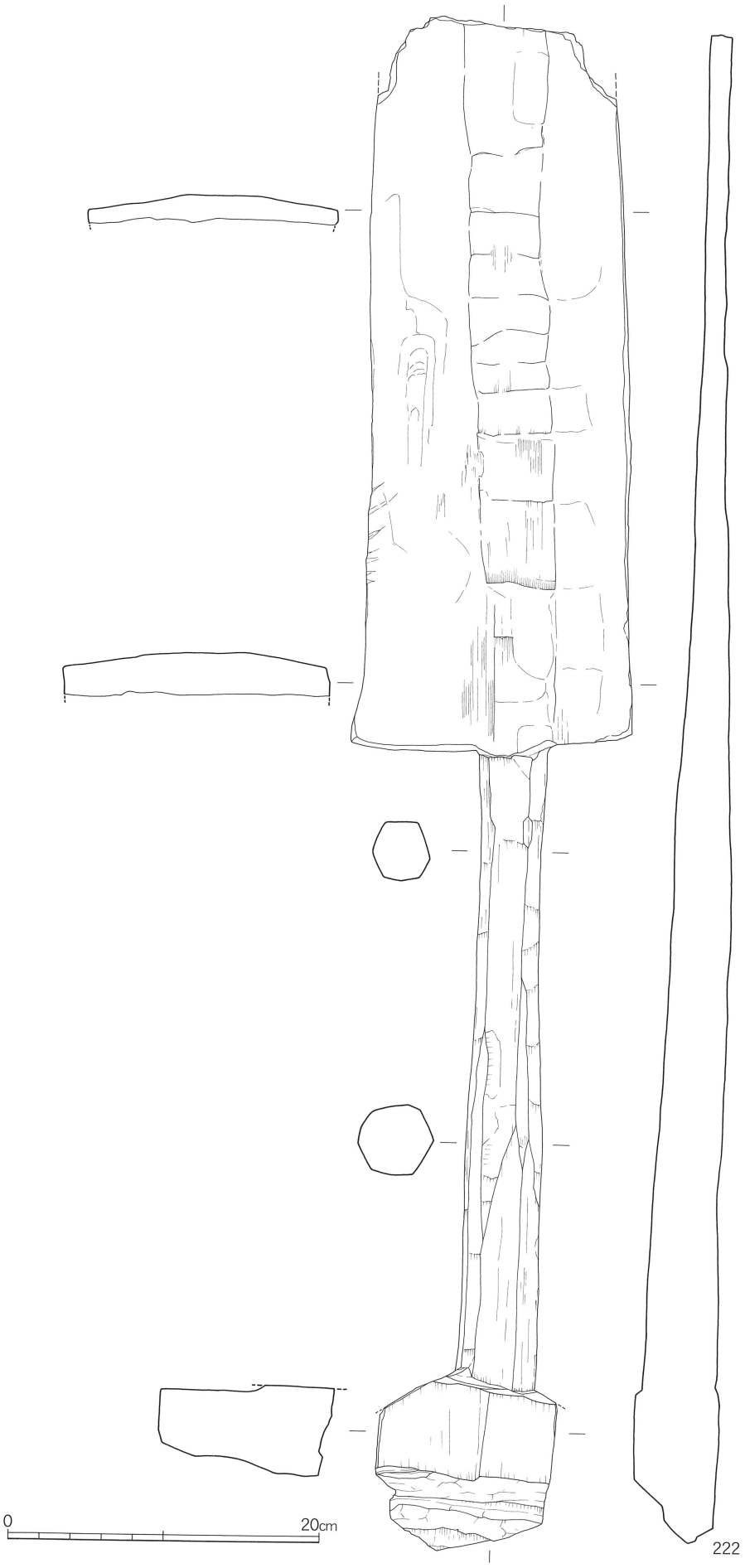
第64図　２次出土遺物（２分の１）（３分の１）



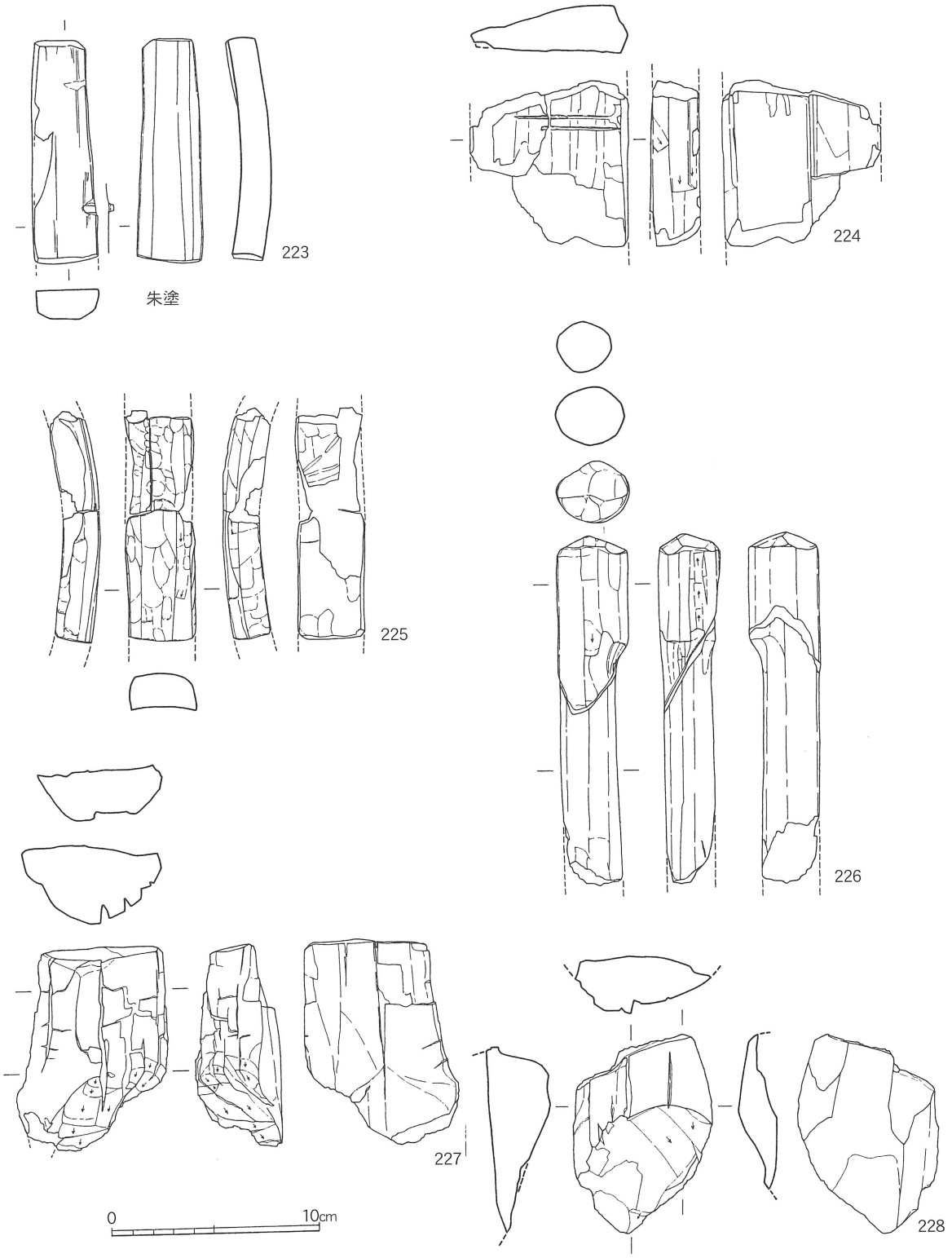
第65図　２次出土遺物（３分の１）



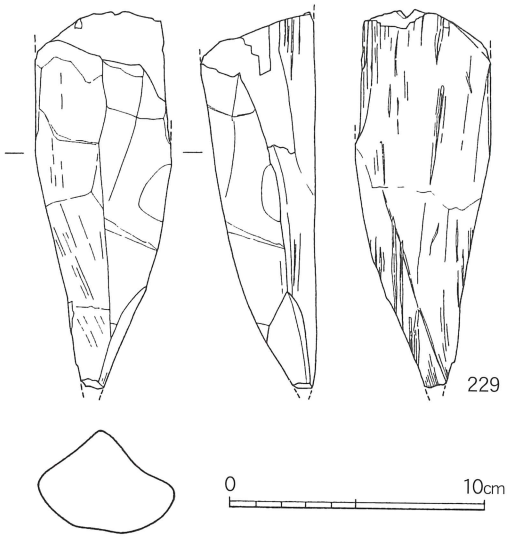
第66図　２次出土遺物（２分の１）

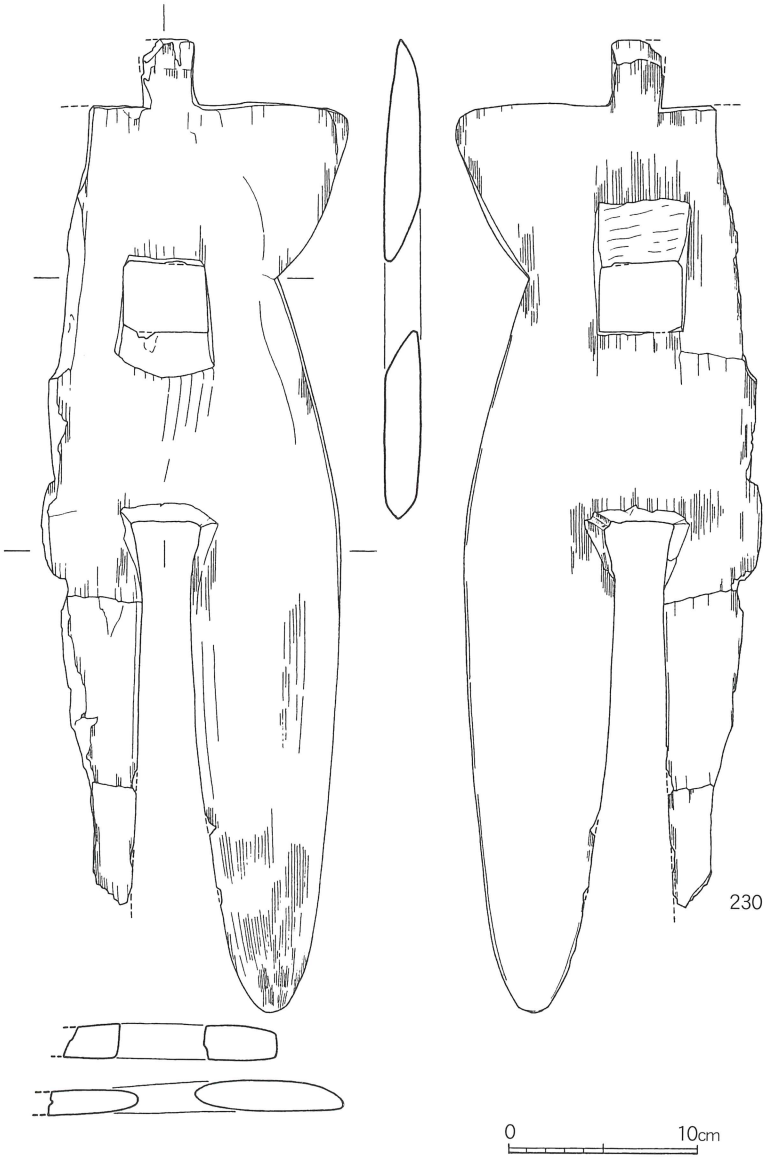


第67図　出土遺物（４分の１）

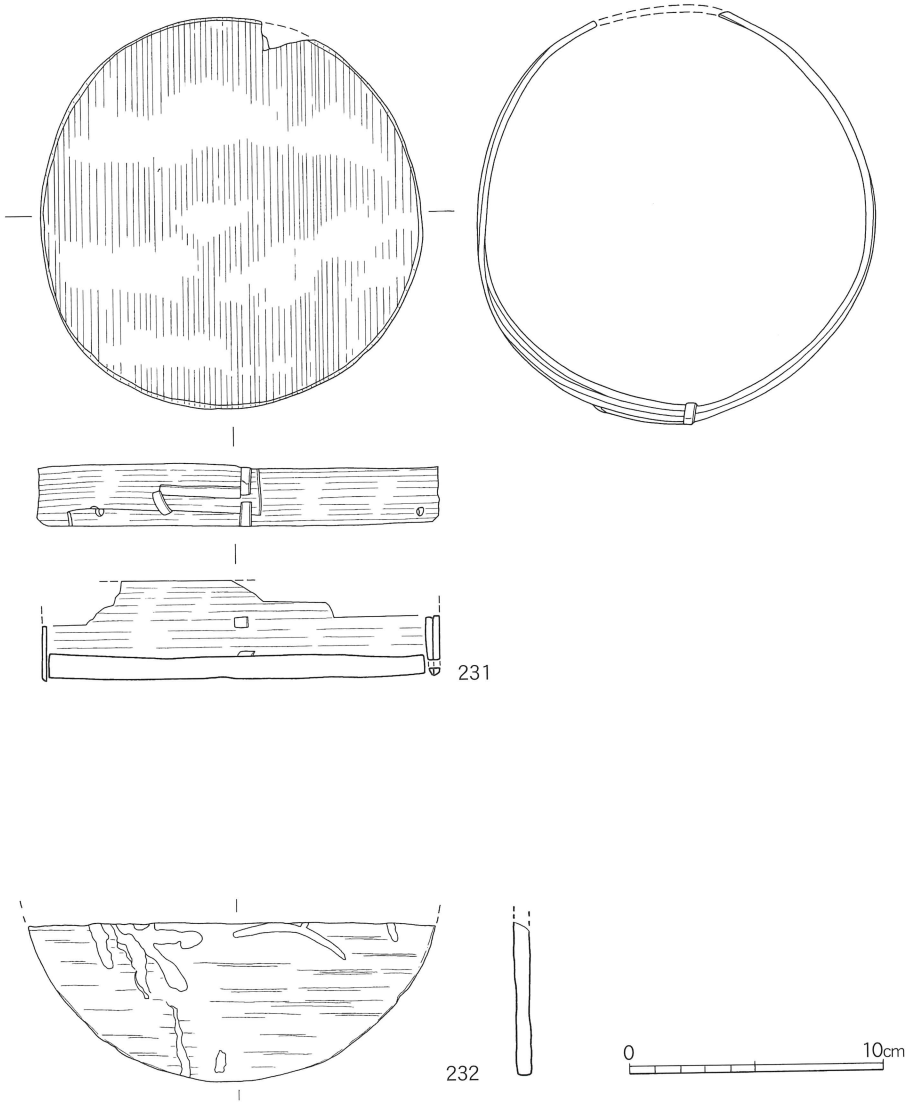


第68図　２次出土遺物（３分の１）





第69図　２次出土遺物（３分の１、４分の１）



第70図　２次出土遺物（３分の１）